
記憶の鎖

空き缶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶の鎖

【Nコード】

N5562B

【作者名】

空き缶

【あらすじ】

あらすじ改定（6月1日）心に傷を負った一人の少年。明るく元気に生きる普通（？）の少女。人と人をつなぐ物語。二人の間にあるものは、一体なんだろう？主に少年視点で語られていく学園恋愛ものです。

第一話：なんだかよくわからない学校生活の始まり

第一話

一年六組。

そんな看板が見えてきた。

遅刻寸前になりながら、俺はそこを目指す。

「とうちやく！」

とか叫びながら入っていった。だがそこには誰もいない。

「なんでじゃー！！！」

黒板をみる。

「遅刻したやつにはひどいことがおこります」

「今日は入学式なので早めに来なさい」

こんなところに書いてわかるか！！！！

とりあえず体育館に俺は向かった。

何か大事なことを忘れながら。

体育館に着いたとたんスピーカーから声が流れた。

「新入生代表市ヶ谷くん。今すぐステージに来なさい！」

って俺じゃん!!!忘れてた!!!

脳内で叫びながら走り出す。その間にはないようは考えておいた。

「ただいまつきました!ついでに眠いです!」

なぜか自分の体調を暴露しながらステージで叫ぶ。

先輩・先生方のしらけた目を見たらテンションが急激に下がった。

「すみませんでした。以後気をつけます。」

一応謝る。本心は眠い!の一言につきる。

【新入生代表、市ヶ谷空君!】

なんか喚ばれた・・・、って違う!呼ばれただよ!とか変なところにつっこみつつ、壇上にあがっていった。

あいつって頭いいの?さあ、よくわかんないけど2000中195とからしいよ?
まじでか!?

そんな声が聞こえてきたが、軽くしかとした。

そして新入生代表の挨拶をなにもなくふつうにすませた。

「一年七組」

そう書いてある教室が見えてきた。後一組。それで俺のクラスにく。

「はあついた〜!」

毎回叫んでる気がしなくもないが、とにかくついた。
一番乗りみたいだ。俺のテンションは教室をみると低くなる。
特に理由はない。

「俺の席はっと・・・。」

とりあえず見つけた。窓際の後ろの方の席。一瞬俺はどんな順番で
席が並んでいるんだ?とか思ってしまった。
どうでもいいことは忘れて、寝た。

もう二度とみたくない・・・。

「ん・・・がやくん・・・市ヶ谷君!」

「おわっと!」

意識が急激に覚醒した。その原因を探ろうと四方をみて、右をみた
ときに原因を発見した。

女子が驚いた顔をしてこちらをみていた。だが視線が前から来て
いた。どうやらSHRの途中だったようだ。

「すいません。」

とりあえず先生に謝っておき、隣のやつに聞いた。

「なにがあったの?」

「え〜と・・・、ごめん!」

何故かいきなり謝られる。

名前も知らない人に謝られるのは、気分が良くないのでいろいろと聞いた。

「えーとまず名前を教えてくださいかな？それとどうして謝ってるのかを。」

じっくりみると結構かわいい。

じゅっとみながら待っていると、なぜか顔を赤くしながら答えた。

「私は川島瞳。市ヶ谷君を学級委員に推薦しちゃった……。ごめんね。」

どうやらそんなことだったらしい。俺は別にどうでもよかったので、わかったと一言いい、HRがちょうど終わったので前にいるやつと話し始めた。

「お前どこ中出身？」

そんなことを聞かれても答えられない。

「えーと、言っても知らないだろうから、言わないでおくよ。」

「そうそう！この学校の三年先輩に超かわいい人いるんだぜ！」

あんまその手の話は好きじゃない。でものっておく。

「どんな人？写真ある？」

「もちろん！隠し撮りしたぜ！」

そんなことをするのは罪ではないのだろうか？

肖像権というものはこの学校の中にはないのか？
そんなことを考えている間に、彼はケータイを開く。
校則破りもやっている。俺はケータイを持っていない。
まあ、俺はそんなの気にしないが。

「ほらこれ！かわいくね？」

「確にかわいいけど。えーと名前は霧月先輩？というよりこれほど高感度の写真どうやってとったの？」

「体育館で。生徒会役員だし、撮りやすかったぞ！」

心の中でため息をつく。こいつは馬鹿だ。

日本全国どこに入学式の時に写真を撮る馬鹿がいるのだろうか？

「みんな撮ってたから、まねただけだけど。」

全員そんな症状か！

とりあえずその日の授業が終わり、トイレに行った。

トイレの個室に入り用を済ませてでようとしたところで、どやどやと7・8人の男子が入ってきた。

明らかに怪しい。おかしい。俺は個室を出ないで聞き始めた。

「おい、霧月を呼び出す場所は体育館裏でいいな？」

「ああ。おとりのやつもいることだし。」

「俺らにさからうやつは、あまりいないだろ。」

『じゃあ行くぞ！』

じゃあってことはこれからかな？止めに行った方がいいのか？

体育館裏ってひねりなさ過ぎだし。つーかどこだよ！

「そんなことより急いでバックを教室においてきて、そっからいくか。」

あくまでマイペース。なんて言っていられないはず。まあなんかやられたときは、社会的に消せばいいし。

「なんて考えるなよ俺！」

と一人で叫んだ後走って体育館裏に行った。

体育館裏に行ったら、ちょうどはじまったところだったらしい。いろいろと男たちが口責めをしていた。

そこへ俺は一人に向かって跳び蹴りをした。

「先輩！早く逃げて！」

その声に反応した先輩は、どっかへ走っていった。

そしてこいつらは霧月先輩のことを忘れて、俺の方へ怒りのオーラをだしていた。

「てめーよくもやったな！」

等々いろいろセリフをはきながら、俺を殴る蹴るの暴行を始める。

診察代のことを考えると後ろめたかったが、この場合は殴られた方が得策かと思い、ただ殴られる。

おそらく数カ所骨折しただろうが、気にしない。とりあえず人を守れただけでよかった。

でも、殴る蹴るに女子が入っていたのは、悲しかった。なぜだかわからないけど、悲しかった。

起きあがろうとして、体に痛みが走った。おそらく肋骨にひびが入ったのだろう。

「はぁ。体中いてー。ま・・・もうちょつと寝るか。今日バイトないし。」

そんなことをつぶやいて、寝っ転がった。その瞬間声をかけられた。

「大丈夫？ 思いっきり怪我してんじゃん。ほら寝っ転がってて。」

俺は驚いた。目の前にいたのが悪名・・・ではなくて名高い？ 霧月先輩だったからだ。

ガーゼで傷口を拭いているらしい。

「きりづふいふえんふあい？ 俺なら大丈夫・・・じゃないですね。」

一応見栄を張ろうとしたけどやめた。俺はなぜかうそをついても、ばれてしまうらしい。

一瞬にらまれた。怖い。でもそのにらんでいる顔も、すごくかわいいと思う。

怪我をしているのにのんびりしていると我ながら思った。

「助けてくれてありがとう！ 危なかった〜。それとさっき失礼なこと考えてなかった？」

「考えてませんよ？（なぜばれているんだろう？）気にしないでください。ぼくが弱いから蹴られたんで。」

一応さしあたりのないことを言っておく。失言に気づかず。

「ぼく？ さっきまで俺って言ってなかった？ まあいいけど。」

やばい！ぼくって言っちゃった。どうしよう……。なんかガキっぽいかいわれちゃいそ

「かわいいよ？ぼくって言っているほうが。」

そんな不安を、一瞬にして先輩は蹴散らしてしまった。ぼくの心も少し解かされた。

「ありがとうございます。先輩。」

「ありがとうございますのはこっちの方よ！ありがとうございます！」

先輩はそういった瞬間抱きついて来た。

「うわぁ！！！」

とっても驚いた。

第一話：なんだかよくわからない学校生活の始まり（後書き）

初投稿ですけど下手なので批評ばんばんやっちゃってください
ではよろしくお願いします

とりあえず更新は週一か半月に一回です

第二話：学校生活三年目（前書き）

あらすじ

高校に入学したばかりの市ヶ谷 空。
いきなりリンチされちゃってますよ！

第二話：学校生活三年目

第二話

あの子をみたのは、入試の時だっただろうか？受付に最後の方であらわれて、走っていった子。

なぜかすごくかわいいと思ってしまった。ぼーっとする。

ふと下へと視線を向けると・・・、赤黒い生徒手帳が落ちていた。拾ってみると名前があり、写真が載っていた。

これはあの子のだ。そう思った瞬間に後ろから声をかけられた。

「さつき〜！何やってるの？」

「ひゃう！・・・、びっくりした〜。」

これは斑鳩リョウ。私の親友？で幼なじみだ。いろいろと噂好きで至るところで鋭い。

さりげなく私の天敵。

「で、なにしてるの〜？」

「えっ！？ なっなにって・・・。」

なんでだかわからないけど、どもってしまった。その隙にリョウが行動してきた。

「ゲット〜〜〜〜！これは・・・生徒手帳？」

スリだ。絶対これはプロの域の技だ。手が全然見えなかったのは、気のせいではないだろう。

「そう。さっきの子のやつなんだけど……。返さないと困るよね？」

「そりゃもちろん！学校一もてるさつきからならうれしがると思うけど、かっこよかったから私が渡そうかなあ。」

「うーん……。私が渡すよ。帰りに通ると思うから。」

他愛もない話をしながら、私は試験が終わるのを待っていた。

そして試験が終わりを告げた。

だけど、幾度も待てども彼はでてこない。気になり、試験会場に行ってみた。

歩いていく。誰ともすれ違わなかった。そして会場の目の前について。

ドアをノックしてから開ける。あの子は確かにここだったのにいない。

「神隠し!？」

んなわけない！っておもいながら入っていった。

それでもいない。一度リョウのところに戻ってみた。

「さつき通っていったよ？ちょっと遅かったね。」

ついた瞬間、その声をかけられがっくり来た。でも、なんであわなかったのだろう？

そう聞いてみた。

「なんか新入生代表の挨拶するらしいよ？あの子。」

新入生代表の挨拶・・・、今年もつとも成績がよかった人がやるものだ。

あの子がやるとは・・・。頭がいいのね。

今日は四月八日。

入学式があった。なぜか生徒会役員になっている私は、まえでいろいろと走り回っていた。

新入生代表の子がこない。さっきから私の頭を支配しているのはそのことだった。

「ただいまつきました！ついでに眠いです！」

なんでこんなこと暴露しているんだろう？ちょっと笑ってしまった。でも笑っていたのは私だけで、ほかのみんなはしらけた目線を送っていた。

そのあとなんだかしゅんとなって、謝っているみたい。

その後呼ばれて、新入生代表の挨拶に行っちゃった。特にさしあたりないようなことを話している。

みんないろいろとあのこのこと噂しているみたい。確か名前は、市ヶ谷空君だよね。

うん！おぼえておこつと！

三年になっても退屈なままの話が終わり、私はみんなとサッカーの話をするために、ほかのクラスのところへ行った。行く途中男子がみていた気がするけど、気にしないで行くことにした。

友達のところへ行くと、なぜかみんないなかった。私はきよろきよろして探した。そのときに声をかけられた。

「どうしたの？」

誰だったかは忘れたけど、一応答える。みんながいないこと、話をしに来たこと等々。

「さっき体育館裏に行つたみたいだよ？」

「ありがと！んじゃね。」

教えてもらうと、さっさと走る。今日は新入生が、部活見学にくるかもしれないのだ。

その相談をしないと！

体育館に行くと、土を盛り返したような痕があった。確かあの二人はウサギを飼育していたはず。

だから埋めに来たんだ。納得してここを立ち去ろうとする。

今思うと、どうしてさっさと帰らなかったのだろう。どうしてあの男が、不良集団の仲間だと、気づかなかったのだろう。

いきなり突き飛ばされた。感じられたのはそれだけだった。

「え……？」

突き飛ばされてショックのせいでよく聞こえない。なにを言っているの？

でも、そんなときに、彼の声は、聞こえた。

「先輩！早く逃げて！」

金縛りにあっていて、私を動かす呪文。それは私の奥深くまで響き渡ってきた。

心の中でありがとうと叫びながら、私は教室に戻って、着替えて荷物を持って部室へ行った。

そこで二人を見つけ、いろいろ話をしていた。

でも彼はどうしたのだろうか？大丈夫かな？とか思いながら、飛び込んできたみたいだし、大丈夫！

と元気づけながら練習した。

部活が終わる時刻になり、一時も心を離れなかったことを考えていた。

上の空らしく、後輩に恋でもしてる？なんて言われる始末。

そしてあの子・・・空君を探しに行った。

そこに空君は倒れていた。ちょっと移動したのだろう。石の床の上で寝ていた。

「大丈夫？思いっきり怪我してんじゃん。ほら寝っ転がってて。」

私は持っていたガーゼを水に濡らしてから、顔の傷口につけた。

「きりづふいふえんふあい？俺なら大丈夫・・・じゃないですね。」

うそをつきかけていたので、にらんでやった。そしてお礼を言う。

「助けてくれてありがとう！危なかった〜。それとさっき失礼なこと考えてなかった？」

「考えてませんよ？気にしないでください。ぼくが弱いから蹴られたんで。」

ぼく？もしかして俺って作って言ったのかな？ぼくの方がこの子は似合ってる。

「ぼく？さっきまで俺って言ってなかった？まあいいけど。」

一応聞いてみる。でもなんか不安な顔になっている・・・。

「かわいいよ？ぼくって言うっているほうが。」

だから私は本心を告げた。上から見ていると、とてもきれいな瞳。俺って言っている時より、ぼくって言うっているほうが、もっときれいだとおもったから。

「ありがとうございます。先輩。」

「ありがとうございますのはこっちの方よ！ありがとうございます！」

お礼を言ったときの顔がかわいくて、つい・・・。

「うわあ！！！！」

抱きしめてしまった。そしてしっかりと介抱する。そんなこんなで、波瀾万丈の一日は終わりを告げた。

「守ってくれてありがとう・・・。」

第三話：転校生登場

第三話

あの後、俺は傷を拭かれて、ガーゼがなくなり、ハンカチで最後押さえたという始末。

どれだけ出血してたんだ？

1週間。今は4月15日、午前10時。俺はあの日から風邪と偽って、学校へ行っていない。

後一週間は安静にしてないといけないらしく、暇なので家にある図書室で本を読みあさっていた。

図書室といってもたいそうなものではない。だいたい4畳半くらいのスペースに本が置いてあるだけだ。

主に医学関係と、スポーツ関係。後ファンタジーも好きなのでそれもある。

それすら終わると本当に暇になる。何回もあの部屋の本は読み切ったし、その他にはすることがない。

暇暇暇暇。今の俺の状態はこんな感じだ。

（勉強をしないといけないかもしれない。）

そう思ってしまうのはふつうだろう。そう自分にいいわけをしながら、俺は勉強をした。

――紙の上に走らせるシャー
――ペンの音が聞こえる。――
――

そろそろ休憩するか。そう思い立ち時計をみる。

10時00分。

見た瞬間固まった。もしかして12時間も???

その通り12時間もやっていた。あり得ない集中力だ。確か英語の単語暗記・予習と、数学の予習と、社会の予習と、etc・・・やっていた。

この内容からして、正直1ヶ月くらい皆より進んでしまったらしい。俺は馬鹿だ。一日にしてせっかくの勉強するということを、終わらせてしまったらしい。

先ほどまでの馬鹿な俺に叫びたくなった。ばっかやろう!と。そしてそのまま、寝てしまった。

今までバイトしていた金で次の日、本を買い込み読みまくる。

図書室に本がまた増えたけど気にしない。

そしてさらに一週間経過した。

やっと学校へ行ける日。今日まで本を読みあさったせいで、無駄に知識が増えてしまった。

三回目の風景。特に考え事をしているわけではなく今まで読んでいた本の内容が頭を巡る。

そして徒歩。歩いていく。

学校でなにをしようか考えながら歩いていくと、前の人とぶつかった。

「すみません!えっ?」

「あ・・・大丈夫ですよ。あれ?」

何の因果か偶然か、ぶつかったのは霧月先輩だった。

「あ・・・、おはようございます。」

「おはより、傷はもう大丈夫なの？」

といいながら、俺の顔を見てくる。ちよつとどきどきしてしまった。

「うん！傷は残ってないみたいね。」

先輩はぼくのことを気にかけているみたい。ちよつとうれしい。

先輩に傷の手当てをしてくれたお礼を言わないといけない。そう思
って切り出した。

「この前のことですけど・・・。」

その瞬間、先輩の顔が固まった。それを無視して続ける。

「手当てしてくれてありがとうございます。お礼と言うには及ばな
いですけど、これあげます。」

言葉が進むごとに、先輩の顔は柔らかくなっていく。そして俺が家
庭の医学・怪我という題名の本を出したとき、笑われた。

その笑みは見惚れるほど、きれいだった。

「ありがとう。でもなんでこんな本なの？」

俺は話した。先輩はこの前手当てするとき、ガーゼで拭いただけで
後はなにも出来なかったこと。

自分の家にはいろいろ本があってもう暗記したから渡したと言うこ
と。

「先輩女子サッカー部なんですから、この本使うことになるかもしれませんよ？」

一応言っておく。その後学校に着いた。

今日登校したとき、霧月先輩といたのはもう伝えられている。学校ネットワーク恐るべし。

いろいろ質問されたが受け流して、退屈な授業を受けた。

特に親しい友はいない。一人でのんびりとすごす。

授業が始まったようだが、窓の外を見る。

じくじくっとみていると、車が来た。高い車だ。

やっている内容は分かり切っているので、暇だ。

そして放課後、校長室の前を通ると、聞いたことある声でした。

「・・・のクラスにして！そこ以外だったらあんまはいりたくない！」

この声は誰の声だろう？気になって待ってみた。

どなりあいをしながらか、決まったようだ。おそらく希望していたクラスに入れたのだろう。

ドアが開く。

でてきた人物をみて、固まる。

「栄介と健介！？」

「おう！空じゃん！」

「久しぶりにみたけど変わってねえなあ」

上から順に、空、栄介、健介だ。区別が付きにくいので健介にはへっをつける。

ってだれに俺は話しているんだ？

『そうそう、俺たち転入するから。お前のクラスに。』

爆弾発言。俺の脳内を空襲する。そしてそのことがリピートされた。とてもうれしい。いつから入って来るのかを聞いてみる。

「いつからくるんだ？」

『明日から。』

二度目の爆弾。投下される。

うれしいことを聞いてしまった。今日はいいこと目白押し！
そして問いかけてみる。

「なんでさっさとこなかったんだ？」

「そりゃ・・・お前の入った高校突き止めるためだよん。」

そういったとたん真剣な顔に二人ともなる。

『お前まだあのこと引きずっているんだろ？』

昔のことを知っている人間がいるのは、ほっとすると同時に悲しくなる。

昔のことは時に包み込む布となり、時にすべてを切り裂く刃となるのだから。

「いや・・・わかんない・・・。実際今まで考えたことがなかったし。」

「おいおい・・・。心配しているんだからYES or NOだろ。」

「悪かったな・・・。」

空気が暗くなりかけたところで、一気に吹き飛ばすように、栄介が声を出す。

「まあ、引きずってなかったらそれはそれでここでの生活楽しめるし！」

『というわけで市ヶ谷空君！』

二人そろって声をかけるときは、ろくなことがない。逃げようとしたが服を捕まれる。冷や汗が流れる。

『ではこれからいろいろと教えてもらおうか！ふふふ・・・』
「これから授業あるのに～～～！！！」

次は数学か・・・あの先生ならなにも言われないだろう。
そして俺は屋上へ強制連行された。
俺とこいつらが仲がいいのは・・・
小学校のころの親友だからだ。

屋上で誘導尋問にしっかり引っかかり、ぼろぼろになりながら帰宅する俺だった。

第四話：壮絶なる告白（前書き）

いきなりリンチされて、そして休んでいた間に昔の友達が現れて・

・

平穏な学校生活の方が楽なはずなのに・・・
でも楽しいと俺は思っています！

b y市ヶ谷 空

第四話…壮絶なる告白

第四話

完全に疲れきっていた俺は、家に帰ったら即刻寝た。
夢で久しぶりに過去のことを見た。

俺がバッター、ワンアウト満塁。そのときの俺は情けなく、緊張しまくっていた。

これで打てば、決勝へいけたのに。最悪のゲッツーだった。守備もとれなくて負けてしまった。

情けない……。なんて情けないんだろう。

俺は一人で泣いていた……。

そしてどうなったんだろう……。

俺が起きたのは七時半だった。

のんびりと朝ご飯を食べ、家を出る。

電車で揺られること15分。

駅に着いた。

そこで変なのにあってしまった。正直言うと変でも何でもないただの人だった。

「栄介？健介？なにやってんだよ……」

彼らはバックをあさっていた。おそらく忘れ物だろう。

問いかけたとたんこっちを向き、スがるような目で見てくる。

こいつらがこんな目をしているときは、必ずと言っていいほど問題

に巻き込まれる。

俺は逃げようとした。
捕まった。

「親友がこんなことになっているのに、見捨てるのはひどいんじゃないの？」

「俺もそう思うな。というわけで、空。今日グローブ一つかしてくれ。」

そう頼み込まれる。が、断った。

「何だよ！！お前野球部だろ？」

「俺は・・・部活に入っていない。」

そういった瞬間、彼らの顔は何かを思いだしたように固まった。

「一週間に一回なら行ってもいいけど、それじゃ部活に迷惑だ。そんなのはだめだと思うから。」

「そうだな・・・。」

ってこんな話をしている間に、もう8時15分。急がないと遅刻する。

「おい！走るぞ！遅刻するから。」

そう言い捨てて走り出す。

二人も追ってきた。

学校に着いたとき、遅刻の一分前。

ぎりぎりだ。

そしてSHRが始まった。

そのとき・・・あいつらが入ってきた。

『すみません！遅刻しました！』

二人そろって頭を下げ、顔を上げる。

二人の顔が似ていることに、皆動揺する。

自己紹介も程々に、適当に座っていた。

俺の前と後ろになった。

SHRが終わると、恒例の質問攻め。

それを眺めながら退屈な授業の用意をして、寝てしまった・・・。

次に目覚めたとき、一時間目の途中だった。

ぼーっとしていると、笑い声が俺に向かって起きる。

その瞬間、栄介を捕まえた。

「なにをした？」

「消しゴムをお前の頭の上に投げてた。」

悪びれずに言うこれを見て、あきれかえった。

先生がこちらをみていたが、適当に髪をすいて、ぼーっとする。

適当な授業も終わった。

野球部にはいるというこいつらが、勧誘に来たのをはり倒し、そして学校を出て行った。

アクシデント発生。

「空君！どーこいつくの？」

霧月先輩と、もう一人知らない人がいる。
霧月先輩の友達だろう。おそらく三年生。
俺の視線に気づいたのか自己紹介をされた。

「あたしは斑鳩いかるがリョウ。よろしく！」
「市ヶ谷空です。よろしくお願いします。」

自己紹介をされたので、言っていたことだけをしっかりと返した。
なにも言わないので挨拶してから立ち去ろうとすると。

「「待ちなさい。」」

二人して同じことを言い、両肩を捕まれた。

「どうしたんですか？」

冷や汗を浮かべながら問う。

「「今日暇なら来なさい。」」
「却下です。暇ですけど行きません。」

いろいろ口答えをするが所詮二対一、うち負かされて強制送還。
喫茶店へ連れ込まれた。

他愛もない話をする。
なぜ俺にかまうのだろう？
問うてみる。そうすると斑鳩先輩が、意味ありげに霧月先輩に目配せする。
そして答えてくれた。

「そ・・・それは・・・秘密で!!!」

顔を真っ赤にしながらだった。

「そうですか・・・。答えてくれないなら推理しちゃいましょう！
というわけで斑鳩先輩。」

「なに？それにリヨウウって言うてくれた方がいいけど。」

「じゃありヨウ先輩・・・？なんで霧月先輩は顔真っ赤にしている
んですか？」

「いつか教えてもらえるとと思うから、気にしないで。」

意味深なことをつぶやいた。全然わからない。推理する情報がなかつたら、ただの推測になってしまう。

あきらめてふつうの会話をした。

学校でのこと等々。

六時になったからもう帰ります。と告げたとき、先輩たちの顔は百面相のように揺れ動いた。

じーっと観察していると気づいたのか、二人とも空咳をして目配せしあった。

「えーっと空君？」

「何でしょうか？」

「これから私につきあってくれない？」

「いいですよ。」

短く会話を交わし、リヨウ先輩と別れてから一軒の家の前で先輩は止まった。

といってもリヨウ先輩の家はここから歩いて一分だが。

「ここはどこですか？？」

何となく予想がついているが聞いてみる。案の定予想通りの答えが来た。

「私の家だけど？とりあえず入って。」

さりげなく命令形。いい言い訳が思いつかず、とりあえず中に入れてもらった。

両親はいるだろうし、大丈夫だろう。

「親はいないからくつろいでって。」

くつろげる方がおかしいでしょ！！！！

なぜか晩ご飯を作ってもらった。

簡単にチャーハンだったが出すような味だった。

そのことを言うのと微笑んでくれた。

「で、どうして俺はこんな状況なんでしょう？」

食べ終わった後のんびりと帰ろうとすると、先輩に両肩を捕まれた。

「あら？そんなのもわかんないの？」

「ええ、わかりません。」

そんな風に話して、最後にわからないといったとき、先輩の顔は目

第四話：壮絶なる告白（後書き）

今日はあと二話投稿するのでよろしくおねがいします

第五話：帰り道（前書き）

どうしよう！？私・・・ついに告白しちゃった！

微妙に強制だったし・・・。

ご飯しっかり作れたかしら？

返事は来るの？

ではこうご期待！

b y 霧月 さつき

第五話：帰り道

第五話

壮絶な告白の後……。

霧月先輩は顔を真っ赤にして、おそらく自分の部屋に逃げ込んでいた。

答えてもいないのに帰るのはどうかと思い、そこでだしてもらった珈琲を飲みながら（苦かったから砂糖を入れた）、のんびりとどこからか取り出した本を読む。

本を読むこと30分。

8時半になった。

そろそろ帰ろうと呼び出す。

「先輩？起きてますか？」

「起きてるわよ……。」

不機嫌な声が帰ってくる。

「入りますよ？」

「っ……だめっ！」

「そうですか……。では答えは明日会ったら話すので、とりあえず今日は帰ります。おじやましました。」

といい、家を出て、自分の家に戻った。

入学してから大変だ……。とりあえず学校へ行こう。

そう思い立ち家を出る。でた瞬間ドアを閉める。正確には閉めようとした。

「ひっでーな、お前。せつかく一緒に登校しようと思ってきたのに。」

「栄介？健介？なんでここに？」

話の内容はふつうだが、行動はものすごい。あけようとしている二人と、閉じようとしている一人。

俺はあきらめドアを押さえる力を緩めた。

その瞬間ドアがものすごい勢いで開く。どんだけ力入れてたんだ？

「というわけで、一緒に行こうじゃないか、空。」

「どんなわけだ！・・・わかったよ・・・。仕方ないし。」

へというわけで、今日から毎日一緒って言うわけだ。どんまい。く

「ちょっと・・・それ本気？」

『マジです！』

この後いろいろ説得した結果、用事がなければ一緒に行くと言うことで合意した。

のんびりと駅まで歩く。

改札を通り電車に揺られること、15分。

その間に、俺は先輩のことの調査を依頼した。

こいつらは噂を集めるのが得意だからだ。

そして改札をでて、歩く。

しばらく歩くと、リョウ先輩にあった。

「おはようございます。斑鳩先輩。」

「あ、おっはよー。いっちー。」

「いっちー？誰ですか？」

「あんたのこと！市ヶ谷だからいっちー。わかった？それと私はリヨウって呼んでって言ったでしょ！？」

「はい……。わかりました、リヨウ先輩。」

話しながら学校へ行く。先輩は栄介と健介を追っ払った後、霧月先輩の話になった。

先輩は昨日の告白のことを元から知っていたようで、詳しいことをいろいろ聞いてきた。

俺は適当に受け答えをしたが。

学校にて

霧月先輩のプロフィール

- ・霧月さつき（きりづきさつき）
- ・身長160センチ
- ・体重は聞けない
- ・女子サッカー部副部長フォワード
- ・3年6組
- ・ミルクティー好き
- ・斑鳩リヨウと仲がいい
- ・3年の中では一番もてている
- ・本人に自覚なし
- ・明るく社交的
- ・異性につきあったことは一度もない

等々……

「ふっふっふ。俺が情報を集めたんだ。感謝しやがれこのやろう！」

「よく言うよ……。俺に任せっきりだったくせに。」
「……………」

沈黙。

今日は久々に弁当を作ってきた。三人分ある。

さっきのお礼と言うことで栄介と健介に弁当を渡した。

こいつらは料理が出来なくて購買で買っていたはず。渡した瞬間栄介に抱きつかれた。

「ありがとー！！！！めっちゃ感謝！金の無駄遣いがなくなった！！！」

「代金は取るよ？150円ね！」

「まあ、それがふつうだろう？常識を考えろ。」

二人とも観念して150円ずつしてくれた
そして屋上へ行く。

「なんでここで食わないんだ？」

「いつか教える！」

そう受け答えて、走って屋上へ行く。

屋上で待ち合わせをしているのだ。

先生に「走るな！」と注意されたが気にしないで行った。

屋上に上る。誰もいない。だけど俺が来た後に先輩が来た。
今日の待ち合わせ相手。

「こんにちは、先輩。」

「こ・・・こんにちは空君!」

ちよっと緊張したような、高い声で挨拶している。平静に見せようとしているのか、表情を変えないように努力しているように見える。おもしろい。こっちも笑わないように努力してしまう。そして微妙な沈黙が降りる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「せっ、先輩? とりあえず本題に入りませんか?」

「えっ・・・・・・・・いいわよ。」

「とりあえず、あのことはお断りします。ですけど理由は嫌いだからじゃないですよ!」

俺の答えを聞いたとたん逃げ出そうとした先輩は、また足を止める。続きを話す。

「ぼくは先輩のことをよく知りません。先輩が知ってても、ぼくが知らないのでは意味がありません。

だからお試し期間って言うのはどうでしょうか。」

「お試し期間?」

「だからぼくが先輩をもっと知るために、1週間返事を延ばさせてください。お願いします!」

「えっ・・・・・・・・いいわよ。」

こうして一連の騒動は、ひとまず収まった。かに見えたただけだった。

「一週間か・・・・・・・・。長いわね・・・・・・・・。」

家へ着くため駅へ向かう。なぜだかわからないけど、ちょっとだけいやな予感がした。

そしてその予感は半分現実となる。

後ろからひしっと抱きつかれる。

「・・・・・・・・・・。」

「なんで無反応なのよ！」

つつこみを入れられる。振り返る。誰だかは予測がついていた。

「なんで無反応なのよ！」

同じことを二度繰り返している。おもしろい。

「あーおどろいた。これでいいですか？」

「よくない!!!!」

「あはは、すいません。ちょっと反応がおもしろくて。・・・で、用事は何なんですか？」

「一緒に帰ろうかな? って思ったり・・・・、してないよ! うん! してない・・・・。」

(ちよっと考えればわかりますよ・・・・。)

「じゃあ一緒に帰りましょうか？」

「ふえ!? ななななな、なんでわかったの???」

・・・・・・・・・・。

両者の間に沈黙が落ちる。

「ふつうに考えたらわかるものではないのですか???」

「そうだったの・・・。」

落ち込む先輩。とりあえず謝ってからいろんなことを話した。先輩はいろいろなことを聞いてきた。ほとんどはぐらかしてしまっただが・・・。

そして別れるところが来た。俺は電車。先輩は自転車。ここで別れる。

「じゃあさようなら。いろいろ先輩のこと聞けておもしろかったですよ！」

「そんなこと言っても空君ほとんど教えてくれなかったじゃない！またあしたね。」

そういつて先輩は自転車に乗って、見えなくなった。

俺は電車に乗り込む。

意識もなくつぶやいてしまった。

「ぼくの過去なんか知ったら、絶対にだめだ・・・。」

第六話：サッカー部ディフェンダー伊藤梓（前書き）

空のやつひどいよなあ～～～。

親友からお金を取るなんて・・・

ほんとあいつは・・・って何するんだ健介！

は～～～な～～～せ～～～

兄が迷惑をかけました。では楽しんで読んでください

b y 栄介 & a m p ; 健介

第六話：サッカー部ディフェンダー伊藤梓

第六話

Next Day

「おい栄介！そんなに弁当はあげられないって！」

「いいじゃん！ちよっとくらいくれよ！」

「ちよっとじゃないから言っているのだろう？栄介。」

図星をつかれ固まる栄介。その隙に栄介が持っていた箸をぶんどり、そこについていた卵焼きを食べた。

栄介復活。微妙におこっている。

「お・・・俺のたまごー！！！」

「お前のではないぞ。だいたい食べてなにが悪い。」

（俺のだよ・・・人のもので勝手に争うな。）

そんなつつこみを心の中で入れつつ、のんびりと兄弟げんかをみる。いろいろ言い争っているようだ。

なぜかいつの間にか、あっちむいてほいに変化している。

・・・・・・べたすぎる。

午後の授業に入った。

今日はまじめに授業を聞く。

だいたいわかることだから少し考え事をする。

考え初めて最初にでてきたのは先輩のことだった。

先輩は俺のことを知らないのに、それでいいのだろうか？

反対に俺はよく知っている。どうすればいいのだろう。

答えは、でない……。

放課後、今日のはんびり過ごせる日。

今日は先輩の部活を見に行こう。

心で考え、グラウンドを歩く。

「おい！空！！！」

「なんだ？栄介！」

「野球部見ていかねーか？」

「遠慮する！今日は用事あるし！！！」

「そっかー！じゃな！」

ある程度会話を遠距離でして、野球のグラウンドから離れていった。

サッカーのグラウンドへ行く。

もう部活は始まっていた。

先輩のポジションはforward。

ボールを受け取りながら走り出す。

疾風のように駆け抜ける。

ぼーっと見とれていた。するといきなり目隠しをされる。

「なにをしているのかなあ？市ヶ谷空君。」

思いつきりドスの利いた声で話しかけられる。だけど正直言って怖くない。

怖いことなんて滅多にないけど。

俺に害を与えるつもりがないからだろう。

「すいませんけど手、はずしてくれませんか？今見ていたのですが。」

」

一応丁寧語でこちらの主張を伝える。

「はでしたら答えてくれる？」

「もちろんいいですけど、内容によります。」

そうしたら手はずしてくれた。目が暗がりになれかけていたので、もうちょっとなっていたら、ひどくなるころだった。

そして後ろを振り返る。そして女子サッカー部の格好をした人に聞く。

「あなた誰ですか？俺には見覚えがないのですが。なぜ俺の名前を知っているのですか？」

質問連発。何とか先輩は一回考え込んだ後、俺に向かって条件を提示した。

「じゃあ答えるから、その代わりなんでここにいるか教えてくれる？」

「いいですよ。こっちから答えます。」

そういつて考え始める。俺にはポーカーフェイスは出来ないから、真実の少しを教えれば大丈夫だろう。

「なぜここににいるかは、女子サッカーを見てたからですけど。」

「あんた・・・ひどいわね。」

やっぱり答えた内容は正しいけど、相手の意にそぐわないようだ。

「ちゃんと答えたので次はあなたの番です。」

「しかたないわねえ……。私は伊藤梓^{あずさ}、二年生。女子サッカーのディフェンダー。こんなもんかな？」

なぜあんたの名前を知っているかは……。企業秘密。」

秘密かよ!!! 心でつつこみながら、あきらめる。

そしてまたグラウンドの方を見ながら話す。

先輩の動きを目で追う。すごく活き活きとしている。

かっこいい。今はそれしか表せない。

先輩を追っている動きに気づいたっぽく、伊藤先輩が話しかけてきた。

「さっきからずっとさつき先輩追ってない？ 気のせいかもしれないけど。」

答えたくなかったが、たぶんこの人は勘が鋭い。答えなかったら間違いないやばいだろう。

「その通りですよ。よくわかりましたね。俺としては結構散らしてみてたつもりでしたけど。」

「あっさりと答えたわね……。でも先輩は人気あるから見ていると結構迷惑かもよ？」

「そうかもしれないね。まあ今日から後はくるとしても、一週間に一回ですけど。」

「ストーリー？ あんたってそんな趣味だったんだ……。」

「違いますよ伊藤先輩。それにそんなことで、俺はあわてませんが。」

「梓」

名前かよ……。

「いと——」 「梓」

「わかりました……。梓先輩。」

少しばかりため息をつきながら、名前で呼ぶ。

「そろそろ部活の終了時刻ですけど、参加しないんですか？」

「ちょっと足首捻挫しちゃって。だから養生中。ほとんど治りかけだけだね。」

どうやら捻挫していたらしい。早くなおしてください、と言ってから部活の終了時刻となり帰ろうとした。

「では梓先輩さようなら。って、なにつかんでるんですか？」

俺は肩を見る。右手がみつかった。後ろへ振り向く。梓先輩が肩をつかんでいた。

少し身構える。そしてもう一度問うてみる。

「なにつかんでいるんですか？」

「なんとなく。」

げんなりするよ。これはこれで疲れてくる。

「とりあえず、離してください。」

「いいよ。」

って、いいのかよ！最初からつかんでくるな！

「では、さようなら。梓先輩。」

「じゃーねー。」

こうして帰ろうとグラウンドをでようとする。
門のあたりまできて、そこで栄介と健介を待つ。
そうすると霧月先輩たちがでてきた。

正確には、斑鳩先輩と霧月先輩の二人だった。
先輩に言いたいことがあったので、二人に近づく。

「霧月先輩？ ちょっといいですか？」

「わっ！ そ、空君かあ。」

「明日、昼休み。屋上来てくれませんか？」

そう問いかける。昨日の告白の返事をするつもりだ。

そういった瞬間、斑鳩先輩の顔がにやりと笑ったように見えた。

大スクープ発見！ みたいな感じに。

俺は確信犯的に問いかける。

「いゝかゝるゝがゝせゝんゝぱゝいゝ？ なに考えているんですか？」

「な・・・、なにも考えてないわよ・・・。」

先輩の顔に、冷や汗が浮かんだような気がした。それは一瞬にして消え去った。

そして小声で、「なんでばれたんだろう・・・。」とつぶやいている。

この距離ならまるまる聞こえているのに・・・。
そして先輩は答える。

「わ、わかったわ。明日の昼休みね。じゃあ、い、一緒にか、帰る？」

どもりながら先輩は俺に聞いてくる。ちょっとおもしろい。笑いをこらえるのに苦労した。

丁寧に栄介と健介と帰るから、と断り、二人を待って一緒に帰る。

「おい、おまえさうなんで今日女子サッカー部にいたんだよ。」

「それは俺も気になった。教えてくれ。」

情報伝達はやはり速い。どっから聞いたんだろう。

でも俺はこの二人だけには隠し事はしたくない。

今までのことを洗いざらいうち明けた。

告白されたこと、一週間のお試し期間のこと、等々話した。

「ばらすなよ・・・！」

『もちろん！』

「こんなのは黙っててもばれることだし。」

「同感。」

『で、答えはどうするんだ？』

答えたくないことを聞いてくる。

「先輩に答えたら言うよ。それまで待ってろよ。」

雑談をしているうちに駅へ着いた。

そして電車で眠る。

そして視た。

「産まれなければよかったのに！！！！」

第六話：サッカー部ディフェンダー伊藤梓（後書き）

小説UPこれで今日はおしまい
ではすぐ読み終わるでしょうけど読んでくださいね～～～

第七話 .. 事件の前触れ

第七話

急に目が覚める。悪夢を見た。
正確には過去の夢だ。

「はあ、はあ、はあ・・・」

キモチワルイ・・・○

布団をたたみ家を出る。今はそれが、緩慢な動作になってしまふ。そして駅へ向かう。電車に揺られる。なにも考えない・・・、考えられない・・・。

電車からでて改札を通る。学校へ向かう。何気ないいつも通りの動作。

それが今はつらい。ものすごくだるい。今日は思いを伝える日なのに……。

気がついたら学校にいた。聞いてみると二限目だったらしい。

それ以外のことは、みんな答えてくれなかった。

授業を聞く。しっかりとノートをとる。

相変わらずの生活。

[illegible]

— — — — —
— — — — —

また脳内の時間が飛び、気づいたときには屋上にいた。
今は何時だろう？腕時計を見る。

12..40

今は12時40分か。ってことは、先輩に答えを伝えるときか・・・。

「えーと・・・空君？」

ソプラノの声が聞こえてくる。心地よい。
こんな気持ちになったのは久しぶりだ。

「もしもし？起きてる？」

先輩の声が聞こえる。

「起きてますよ？ぼーっとしてただけで。」

「そう？ならいいのだけれど・・・。」

心配そうな顔で、俺を見つめてくる先輩。そして微笑みながら本題に入る。

「先輩、いきなりですけどあの話、答えを伝えようかと思います。」

ぴくっと強ばり、こっちを先輩がじっと見てくる。

「えーと・・・、受けようとは思いますが・・・。」

俺はお茶を濁す。言った瞬間目を輝かした先輩だったが、お茶を濁したとたんまたじっと見てくる。

そして俺は決意する。

「一つ、お話をしようかと思うのですがよろしいですか？」

「ええ・・・いいわよ？でもなんでそんなことになったの？」

それには答えず、言葉を紡ぐ。

「5年前、ある小学校に一人の男子生徒がいました。彼はとても臆病で、この世界に生きること、何の意味も持たず暮らしてきました。だけどそのときに、二人の男子生徒が現れました。

二人とも、彼と似たような感情を持っていました。でもただ一つ違ったのは、彼らは「生きたい！」と思っていることでした。

彼は次第に二人に惹かれていきました。そして少しずつ心の傷は広がらなくなっていきました。」

話し終えたとたん、先輩は声を出さない。そして俺が続きを声に出す。

「俺の過去話ですけど、どうでした？あまり文章力なくて、うまくまとめられませんでしたけど・・・。」

「その彼って言うのは・・・空君？二人の少年は誰なの？」

こんな話だけだといろいろ疑問点はあると思う。だけど今は答えない。

「黙秘・・・。」ということにしておいてください。それと答えなん

ですけど、こんな僕でよかったらつきあってください。」

あっさりと言葉を発した俺に、先輩は驚いたみたいだ。そして先輩も言葉を発する。

「い、いいの・・・？ほんとに！？」

訂正。「驚いている」だ。

「過去のことについては、あまり詮索はしないでほしいですけど、それ以外ならあまり嘘はつかないんで。」

「ほんとに・・・？そう・・・、よかった・・・。」

そう言い残し、先輩は階段を走って下りていった。

「転ばないようにしてくださいね〜。」

一応そう声をかけておく。転ばなかっただろうか？
そう案じながら、真っ青な空を見上げた。

さつきside

「どうしよどうしよ！！！」

「なくにがどうしよなの？」

今日は返事を出される日だ。自然な顔で会いに行くのも、難しいと思ってしまう。

[illegible]

「ひゃう!!!」

「もう昼休みだよ？」

$$\begin{matrix} 1 \\ 2 \\ \vdots \\ 3 \\ 0 \end{matrix}$$

しばらく時間経過・・・○

56

気にしない。

「ごちそうさま！」

私は素晴らしい時計を見る。

12..35

まだ間に合う。ほっと一安心し、歩き始める。リョウがまだ後ろで、変な目をしていただけ。

屋上へ着く。ドアをそっと開けてみる。なんかぼーっとしているみたい。声をかけてみる。

「空君?..?」

その声に空君は振り向く。でもまだねていたような感じが、ぬぐい切れていない。

「もしもーし?起きてる?」

「起きてますよ?ぼーっとしてただけで。」

「そう?ならいいのだけれど・・・。」

どう考えてもそれ以外に考えつかないし、平気じゃないかな。

どうやって話しかけよう?考えてみる。

思いつかない・・・。

こんな時こそ自分の頭の悪さを呪いたくなる。こればかりはどうしようもない。

そんな思考を、ものすごい勢いで働かせる。空君は、そんな思考を紙のように突破してきた。

「先輩、いきなりですけどあの話、答えを伝えようかと思います。」
いきなり！？私の魂の叫びも空君には届かない、って心の中での魂の叫びなんだから当然よね。
ちょっと待って、心の準備が……。そんなことを考えてる暇なんてない。

「えーと……。受けようとは思いますが……。」

ほんとに！？でもどうしてお茶を濁すのだろう……？

「一つ、お話をしようかと思うのですがよろしいですか？」

そのことが何の関わりを持っているの？何のため？どうして？聞きたいことはたくさんある。でも、今は聞かなきゃいけない気がする。

「ええ……。いいわよ？でもなんでそんなことになったの？」

「5年前、ある小学校に一人の男子生徒がいました。彼はとても臆病で、この世界に生きること、何の意味も持たず暮らしてきました。だけどそのときに、二人の男子生徒が現れました。」

二人とも、彼と似たような感情を持っていました。でもただ一つ違ったのは、彼らは「生きたい！」と思っていることでした。

彼は次第に二人に惹かれていきました。そして少しずつ心の傷は広がらなくなっていきました。」

そのことを聞いた瞬間、何のことだろう……。？と思った。私には全然わからない。

でもとてつもなく重い話なのだろうと思った。それが過去話と聞いたから余計に。

今は声が遠くに聞こえる。でもそれだけははっきりと聞き取れた。

「・・・それと答えなんですけど、こんな僕でよかったですあってください。」

「い、いいの・・・？ほんとに！？」

本当にいいのだろうか・・・？でもうれしい！心が温かくなっていく。

そして恥ずかしくなったから、急いでそこからでた。なんか空君が言っていたような気がするけど気にしない！

「リヨウ~~~~~!!!!!!」

「なにさ？いきなり？」

私はリヨウのところへ走っている。そして簡潔に要求を伝える。

「空君の過去のこと調べて!!!!」

「うるさい!!!!ちよっとはだまらんか！」

怒られた。確かにうるさかったかも・・・。

謝って、なんとか約束を取り付けた。

ちよっと危なかったかも・・・。

リヨウside

私は家で今「市ヶ谷空」とやらの情報を集めている。

全然集まらない。かろうじて集まったのは樽でも一件だけ。

市ヶ谷空は、人殺しだ・・・。

第七話：事件の前触れ（後書き）

のんびり書いているはずが・・・

結構速く更新できました

更新速度二週間に一度改め不定期に変えます
きがむけばたくさんUPするので

第八話：街中にてのデート

第八話

俺は起きあがった。また汗をかいている。

最近、悪夢を見る確率が高くなってきた。なぜだろう？

いつも通りに栄介と健介との三人で登校する。

こいつら朝練ないのか？ふと思い立ち問いかける。

「今日は4月30日。今はテスト2週間前だぞ……。部活は休止中！」

「へえ〜。」

知らなかった。っていうか、そろそろテスト勉強始めないとまずいってことですよね……。

4限目終了後……。

学校にて、テストの範囲が発表された。まだ範囲は広くない。

それを見て安心し、屋上へ向かう。言うまでもなく昼ご飯を食べるためだ。

屋上へぼろい鍵をはずして、でる。陽は温かく、風はほとんど吹いていない。

そこで先輩を見つけた。

「何やってるんですか？」

「あ、空君？どうしたの？」

「いやどうしたもなにも・・・、昼ご飯食べに來ただけですけど？」

「うわあ~~~~！すごい！」

なんか、いつの間にか先輩が俺の隣に来ていた。当然驚き、少し引く。そして少し離れてから食べ始める。

また先輩がよってきたが気にしない。

「おいしそうね、その弁当。ちよつともらうわよ！」
「えっ!? ちよ・ちよつと!」

必死の抵抗も空しく、唐揚げをとられてしまった。でも、おいしうに食べているのを見て、まあいいかと思ってしまう・・・。

ぶつぶつぶやいていたら、先輩が声をかけてきた。

「来週の日曜私と出かけない？」

しばらく意味を考える。意味を理解したところで納得し、うなずいた。

[illegible]

時計はその時刻を示していた。

テスト勉強もある程度終わった俺は、町で待ち合わせをしていた。ってギャグじゃないぞ。

一応これはデート扱いなんだろうか？とりあえずそんなことを考えながら先輩を駅の前で待つ。

「ねえねえちょっと、お姉さんと遊ばない？」

でた！ナンパイイベント！正直どうでもいい。ちらと見て、先輩ではないことを確認し、またのんびりと待つことにした。

「ちょっとちょっと、しかとはないんじゃないの？」

訂正。待つだけではなくて、追い払わなくてはいけないみたいだ。ため息をつく。正直言って面倒だ。

そしてその誰だかわからない人物へ向かって、言葉を発する。

「すみませんが、俺に何か用事があるのでしょうか？それとも、俗に言うお誘いというやつですか？」

「そんなのどうだっていいじゃん。料金はこっち持ちだし。」

そんな風に話す誰かさんを見て、またため息をつく。見事に会話が噛み合っていない。だめだなこりゃ・・・。

「ナンパとかお誘いなら遠慮しますけど。それ以外に用事はあるんですか？」

「そんなのどうだっていいじゃん。」

だめだこの人・・・。

「ナンパですね……。最終警告です。離れてください。人と待ち合わせをしているので。」

「それって女の子？ そんなのよりあたしと一緒に居ようよ。」

最終警告を俺は発したはずだ。だからまず殺気を放った。それだけでこの周囲にいる人たちが消えた。というより俺を中心として避け始めた。

「な……。なによ……。」

さすがに異質な雰囲気を感じ取ったのか、完全に引いた。そして俺は殺気を鎮める。

「ごめん空君！ 遅れちゃった！」

そこに先輩がやってきた。会釈をする。ただ先輩も、周りの人からでている俺に対する異質の雰囲気を感知取ったのか、不安みいだ。

「何なの？ これ……。？ さっさと行きましょう！」

そういう先輩と俺は歩き始めた。そしていきなり聞かれた。

「空君……。あの感じはいったい何だったの？」

「あ……。あれですか？ ナンパされたので軽く怒ってやっただけですよ？」

「本当にそれだけ？ ほかにもなんかあったんじゃないの？」

「まあ……。ありましたけど「言いなさい！」

急に会話をうち切られた。だけどまだ言えない。その旨を先輩に伝えようと「そう……。」といい、納得ではないだろうが追求はやめ

た。

そして別の話題に切り替わる。

「先輩？これからどこへ行くんですか？」

「そんなの決まってるじゃない！」

決まっているのか。先輩って計画的だな。そんなことを思った俺をあざ笑うかのように、先輩は次の一手を打ち込んできた。

「これから喫茶店行って、そこで空君に決めてもらう！」

浅はかだった……。

喫茶店……というより、ケーキ屋の方が正しいと思われる場所に無理矢理つれてこられ、飲み物を飲むだけですませた。

この手のケーキは絶対甘いのだ。俺は甘いもの嫌いだしな！

それに……居心地が悪い……。

周りにカップルが何組かいたけど、みんないちゃいちゃとスプーンで「あ〜ん」とかやっているよ……。

俺はまだそこまで変じゃない。目の前の誰かさんはその段階まで墜ちているけど……。そしてやってほしそうに見ているけれど……。

「じゃあ、どこ行きますか？」

ある程度先輩が食べ終わってから俺は切り出す。先輩の返事はひどく適当だった。

「空君に任せるわ〜。」

67

そしてスポーツ用品店へ行った。まだ先輩は不機嫌だ・・・。
俺、なんかしたかな？

「せんぱい。ここ入るんですけどいいですか？」

返事はなかったけど入っていったからいいのかな？

そう思い俺も入る。先輩は速攻でどっかいなくなっていた。
速い・・・。

俺は先輩を捜すことにした。めばしいところは一カ所だった。

「せんぱい。」

一瞬で見つけた。サッカー系統の売り場のところにいた。じーつと見ていたので声をかけてからあがる。

「野球のところにいますので！」

野球のグローブ売り場に行った。自分に合う新しいグローブを探す。
探し終えて何回かはめてみて選び終えた。青色の少し大きめのグラブだ。

「6800円です！」

高かったが・・・。

先輩を探しに行く。まだ同じ場所で、いろいろなものを目を輝かしながら見ていた。

「先輩？帰りましょ。」

「わかった・・・。じゃあ帰りましょか！」

機嫌が元に戻ったみたい。よかった。
そんなことを考えていると聞かれた。

「空君なに買ったの？」

俺の持っている袋を見ている。でも俺は答えるつもりはない。

「秘密です！」

「空君、秘密おおすぎよ。なんか教えてくれたっていいじゃない。」

そんなこと言われても……。結構困る。

「しかたな「仕方なくないわよ！恋人なんだから！」

「からかうのがおもしろいですけど……。野球のグローブです。」

「からかったの！？ひどい！」

でも笑いながら言っているから、大して怒っていないのだろう。
くだらない話をしながら家へ帰っていった。

さつきside

空君は野球をやっている。一回見てみたいかも。
そう考えた私はリョウに電話した。

「リョウ？」

「あ、さつき？どうしたの？」

「空君のこと何かわかった？」

「うん・・・、わかったわ二つだけね。」

二つわかっているようだ。微妙に言いたくなさそうなのはなんでだろう？

「じゃあ教えて！」

「一つだけよ。もう一つはまだ噂の段階なんだから。」

というわけで一つだけ教えてくれるらしい。

「元々いっちは勉強より運動が出来る子で、シニアに入っていたらしいのよ。それでそのレギュラーだったらしい。」

運動が出来るねえ・・・。そうは見えなかったけどそうなのだろう。ちゃんと確証をつかんだりヨウの情報は、はずれたことがない。

「そのシニアは名門でね、一回全国ベストエイト行ったときがあって、その原動力がセカンドの進藤栄介、ショートの進藤健介、ピッチャーの立松閃、キャッチャーの大門和樹、そしてセンターの市ヶ谷空だったらしい。」

その情報に、絶句した。そんなすごい選手だったなんて・・・。

「そしてその五人で『鉄壁のセンターライン』って言う異名をもらっていたらしい。」

「それってものすごいことじゃないの？」

「確かに。その準決勝も、この五人以外のところへたくさん打たれて負けたって話だから、能力的には結構高いんじゃないの？ 今度野球見せてもらえば？」

そういわれて私は言葉に詰まる。

「空君ね、秘密が多くて……。どこから手をつければいいかわかんないのよ……。」

「そうなん？じゃあ出来る限り調べてみるけどあんま期待しないでね。」

第八話：街中にてのデート（後書き）

すみません・・・。

長くなりました。

テストあけ・・・。

第九話…お墓参り

第九話

悪夢の中で見えたカレンダーは5月8日。明日だ。

明日は命日……。

最近気分が重いのはそのせいか……？

俺はがばっ！と布団から起きあがる。今日は5月7日。
いつものように出かけた。

栄介たちとテストの話をする。いろいろ問題を出し合いながら駅へと向かう。

まだ栄介はほとんど努力をしていないようだ。逆に健介は努力をしているようで、俺より頭がいい。

というより俺と栄介は、集中していかないと全然覚えられないという頭なのだ……。

やがてそれも問題がなくなり、野球の話になった。

「お前ら部活どうなの？レギュラー入ったか？」

『そりゃもちろん！』

「だって8人しかいないしな。な、健介。」

「そうそう。俺らがほとんど追い出してやったからな。」

さりげなく物騒だし……。つか……。

「追い出したって？しかも八人じゃでれねーじゃないか。」

「大丈夫！一人当てがあるから！幽霊部員という。」

「栄介。空は今、そんなことを聞きたいんじゃないんだろう……。

」
栄介と健介は二人で会話を進めていく。入る隙間がない……。

「ちょっとね……、不良のたまり場になっていたんだよ。野球部。」

「だから俺たちが試合で勝ったらでていってもらうことにして、勝っちゃった訳ですよ。」

「よかったじゃん！健介！栄介！」

素直にほめる。こいつらは普段から、破天荒なことばかりやっている。だからこそこんな行動しても、俺はなにも言わないわけだが……。

「それよりお前、一人称僕に変えていないのか？」

「栄介……、どうでもいいじゃんそんなこと。」

俺はその話をスルーする。そして俺はおとといのことを二人に告げる。

「けどそれはほとんどスルーされた……。さっきの仕返しのもりかよ……。」

「そうだ、空。助っ人として野球部に来てくれないか？」

「健介……、俺は今は出来ない。」

「嘘はよくないよ、そら〜。おとといデートしているときに、グローブ買っただろ？」

「な、なんで知ってるんだよ……、栄介……。」

「企業秘密で！というわけで、でなさい！」

強制かよ……。諦めるしかなさそうだな……。

学校でテストが終わった後・・・。

「テストどうだった？」

俺は栄介と健介に尋ねる。

健介はぼつちりだったみたいだ。

栄介はがっくり来ているらしい。

実際は二人とも本当は俺より頭がいいのだが、栄介は授業を聞かないので平均点並みしかとっていないらしい。

「野球の話だけどどうすんだ？」

「幽霊部員でるって言ってたからでなくていいぞ。」

なにそれ・・・！こちとらわざわざ来てやったというのに・・・。

「すまないな空。まだまだお前に頼れる状態じゃないだろうし。」

健介はいつも俺をいたわってくれる。ありがたい・・・！

「んじゃあもうそろそろ予選だろ？俺もメンバー入れておいてくれ。」

二人はまず固まった。哑然呆然という言葉がよく似合う。

「どうしたんだ？二人とも・・・、なんか変だぞ？栄介だったら、これ幸いにと「じゃあレギュラーで入れとくから。」とか言いそう

まじかよ……。諦めるしかないのかなあ？神よ……。って俺は無神論者だけど。

9時10分

俺は、雨の中、遠出をしていた。秩父の方まで行って親戚の家に顔を出す。

といっても俺が顔をまともに会わせるのは二人だけだが。

「ただいま花梨、叔父さん。」

「おかえり〜〜、空！」

「おかえり、空。」

二人が俺と顔を会わせてくれる人だ。雅弘叔父さんと花梨。

「墓参りには行ったのか？」

「ただけど……。それと後で花梨に相談があるから。」

「わかった。というわけで親子の会話楽しんできなさい！」

花梨の明るい気遣いを受けて、雅弘叔父さんにさりげなく気遣ってもらい、俺は傘を持って墓地へ行った。

とぼとぼと、墓への道を10分ほど歩いていく。

ついた。だがこのときになって、花を持ってくるのを忘れていたのに気がついた。

市ヶ谷家の墓と記してあるところにひざまずき、傘を手放し1分ほど黙祷を捧げる。

そして俺はしゃべり始める。

「久しぶりお父さん。1年ぶりだね。僕は元気だよ。」

高校やっとなつて、友達も何人か出来たし。栄介と健介も、また同じクラスなんだ。というより、無理矢理転入してきたっていう感じだけど……。

あいつらしいだろ？家の中もしつかりと掃除しているし、俺のことは心配しなくても大丈夫だよ。

もっと話したいことはいっぱいあるのに……、どうして言葉に出来ないんだろう？それが本当に残念だよ……。

もっともつと教えたいことがあるのに……！なんで死んじゃったの？って、いつもここに来ると泣いちゃうな……。

もう泣かないって決めているのに……。ここだとどうしてか泣いちゃう。もう、断ち切らないといけないのだった……。うっ……。

」

最後の方は泣きも入ってきた……。透明な液体が雨と一緒に流れ落ちる。どうしてまだ泣いてしまうのだろうか？
そんな風に考えていたことは、後ろから聞こえた一言で、うち破られた。

「あゝ空？ひさしぶり」

お気楽な声が後ろから聞こえる。もしかしてこの声は……。

「大門か？」

「そのとおりだよ、ひさしぶり。大門なんていう風に呼ばないでよ。せめて和樹と呼んで。」

「懐かしいね。半年ぶりくらい？」

「確かそんなものだよね、お墓参りに来たんだよ。」

間延びした声なのに、聞いていると心地よくなってくる。だからこそ俺たちをまとめられたのだと思う。

「おまえ・・・、そんなでかいなりしてそんな声で話すなよ・・・。」

大門の身長は180cm。俺よりかなりでかい。

「まあいいじゃん。そんなことより墓参りしているんでしょ？終わったみたいだし帰ったら？それと、栄介と健介は一緒じゃないの？」

「あいつらは風邪ひいた。というより栄介だけがひいた。んじゃーな。また会おう。」

そういつて墓地を立ち去ろうとする。後ろから声がかかってきたが、聞かなかったことにした。

大門はこういつていた気がする。

「野球をまたやらないのか？」

叔父さんの家に戻り、花梨を呼ぶ。

「どうしたの？空。私に相談って？年の功があるから答えてあげるわよ・・・、ってびしょぬれじゃない！風呂入ってきなさい！」

速攻で言われ風呂に入る。でてきてまた花梨を呼ぶと先ほどと同じようにハイテンションで問いかけてきた。

俺は言う内容を考えていなかったが、勝手に口から言葉が紡がれる。

「また始めようかな？っておもってるんだけど・・・。」
「なにを？」

「野球。でもやってもいいのかな？　っておもって……。どうすればいいのかわからないから……。僕はどうすればいいの？」

「私にあなたの行く道を決める権利はないけれど……。空がやりたいと思うことを今はしなさい。そのためにね、こっちはこっちでお金を貯めておいたのよ。バイトなんかしなくてもいいように、空がいつかそんなこと言うなんて、分かりきっていたことなんだから。」

そういわれて目の前にだされてきたもの。それは……。

「なんだこの通帳？」

通帳だった。何なのだろう？

「これは空のお父さんの生命保険でもらっていたお金。それと私の貯金も少しばかり入っているわ。自由に使いなさい。」

「え……。な、なんで……。こんなのが……？」

「私と父さんで生命保険に加入させておいたのよ。無理矢理ね。」

俺は啞然とする。その表情のまま固まっていた。花梨が言葉を続ける。

「もっていきなさい。暗証番号は〇〇〇〇よ。」

「あ、ありがとう……。僕はやりたいことをやっていいんだね？」

『もちろん！』

叔父さんがいつの間にか現れて言っていた。

俺はその二人の気遣いに感謝して、この家を去り、自分の家に戻っていったのだった。

第九話：お墓参り（後書き）

一昨日投稿したばっかなのに・・・
なんか速くなっている気が・・・

第十話：家庭訪問（前書き）

どうもこんにちは。

こんな話をここまで読んでくれてありがとう！
空のことよろしくね。

b y 花梨

第十話：家庭訪問

第十話

テストの結果はまあまあ良好。学年10位という位置に納まった。

健介は3位をとっていた。栄介は211位だった。

放課後になった。

「おーい、空！」

「なに？211。」

「それを言うなー！！！」

栄介の順位が211位だったため俺と健介は、その数字で呼んでいた。結構人をからかうのはつぼにはまるが、栄介はいちいちきれかけるからおもしろい。

「わるいわるい。で、なんか用事でもある？」

「特にない。」

まあそれでもいいか。校庭を見ながら校舎を歩く。

校舎をでて門へ向かう。栄介とはここで別れる。

「じゃあまた明日な！」

「またな~~~~~！」

門を出て今日はバイト先へ向かう。ふた駅電車に乗り、高川駅で降りる。

そこから10分。歩いて松山運送へついた。

「こんにちわ〜!」

「おう! いつもだな!」

社長の松山さん。俺の父さんの友達で、事情のある俺を雇ってくれている。

俺のここでの仕事は荷物を運ぶ。とにかく運ぶ。ひたすら運ぶ。それだけだ。

「ほい空! これ二階に持ってつとけ!」

「はい!」

そんなこんなでバイトが終わり、家へ帰る。すでに周りは真っ暗、家へとぼとぼと歩く。

「空君なにしているの?」

予想外。なんでこんなところにいるんだ?

「霧月先輩じゃないですか! こんばんは。」

「で、なにしているの?」

「これから家に帰るところですけど? 先輩はなにしているんですか?」

気になったことを告げる。汗をかいている先輩は、においを気にしているのかは知らないが、こういった。

「走っていたけど今はとりあえずシャワー浴びたい。」

見ればわかる! 叫びたいのをこらえながら問いかけた。

「いや、そうじゃなくて・・・。なんで走っていたんですか？」

「基礎体力UPのためよ。テスト明けだからしっかり走り込んでおかないと。」

なるほど！俺は納得した。でも結構話したから体は冷えていないのだろうか？

そのことを言うと「今日はちょっと、がむしゃらに走っていたから歩いて帰る予定なの。」って言われた。

「ここから家までどのくらいですか？」

「10キロ位かしらね？」

「じゃあ家まで遠いですし、一回うちにきますか？」

自然にでた言葉だった。自分でも、言った瞬間は理解が出来なかった。先輩は哑然とする。そして顔が赤くなった。しっかりと、自分の言った意味を確認してから俺はあわてた。

「あっ・・・いっ、いやならこなくてもいいですよ！せつ、先輩の都合って言うものがあるだろうし・・・。」

どもりながらもなんとか言えた。先輩はまた哑然とした表情をしている。

どうして？そう聞いてみる。すると先輩は、口をしばくばくさせながら話そうとしていた。

顔が表情にでておもしろい。

「だ、だって空君、自分の家のこと全く教えてくれなかったじゃない！い・・・、行きたいけど・・・。」

「じゃあ行きましょうか！ついてきてください！」

「ちよつ、まって〜!」

本当におもしろい。ついつい笑ってしまう。先輩がなんか言っているけど気にならないほどだ。

そして俺は先輩が追っかけてくるのを見ながら、家へと向かった。

「ここが空君の家？」

「そうですけど・・・、変ですか？」

「変!」

そうだろうか？一般常識から見たらでかい方だと思うが・・・。

「なんで時代劇にでてくるような家なのよ!」

「あゝ、父さんの趣味です。」

「それに広すぎ!うちの三倍くらいあるんだけど!」

「あゝそれは・・・うちの父さんとやじいちゃんとか、親戚みんなで買ったんですよ。」

「どんな話!??」

まあ驚くのもわかるが・・・。

「教えなさい!」

「命令形ですか!??」

拒否権なし!?!とりあえずシャワーかなんか浴びてもらおうか。そう告げて、俺は家に入った。

「空君お風呂どこ?」

「あゝ、そこまっすぐ行って、左に曲がるとありますよ!」

先輩は風呂から上がってきた。「タオルは!？」とか言っていたので渡した。

たぶん顔が真っ赤になっていたと思う。なんか、風呂から上がったときっていうのはかわいい気がする・・・。

先輩はどんな風になっていたんだろう? どんな風に思っていたんだろう?

「ふう、ありがとう空君。」

そんなことを考えていたら、先輩は風呂から出てきた。どぎまぎしてしまう。

「さてと。そろそろくくん??聞かせてもらおうか?」

「せ、先輩、く、口調が怖いです。僕なにかしましたか? そんなのだと、話そうと思っても怖くて話せないんですけど・・・。」

それに迫ってくるとどきどきする。そんな感情を持ったことはなかったのに・・・。

「仕方ないわね。離れてあげるわ。」

「助かります。じゃあ話しますね。って言ってもたいしたことじゃないんですけど。」

そう前置きして、僕は話を口へと乗せる。

「今から10年くらい前ですけどね、うちの親戚みんなが時代劇にはまっちゃいまして、それでみんなでそんなところに行きたいと言

い始めたんです。」

こんな感じでいいのだろうか？言葉を紡ぐ。

「それで、「ないなら作ればいい。」とうちの父さんとじいちゃんが言い出して、みんなそれに賛同したんです。」

「それで？どうなったの？」

「うちの父さんが5割だして、じいちゃんが一割、残りをほかの親戚たちが負担したんです。それで、一番資金を使ったうちの父さんにここを家にする権利が与えられたんです。」

だから毎年、正月やらなんやら、イベントがあるたびに親戚が泊まりに来てました。」

今更ながら説明すると、ものすごい家だと思ってしまう。

見ると先輩も啞然としている。

「すごいわね……。もっと空君についての話はないの？」

俺はそのことを聞いた瞬間固まった。思い出したくないことを少し思い出す。

冷や汗がたくさんでて、先輩がなんか言っていたのも聞こえない。ドカッ！と急に衝撃が来た。目の前を見ると木の棒があった。

体を起こす。いつの間にかこの部屋にいる人数は4人になっていた。

「よっ！空！」

「栄介と健介？ってどうしてここにいるんだお前ら。神出鬼没だな・・。」

「いや、空をからかおうと思ってきたんだよ。家隣だし。家はいるときに声聞こえていたぞ？思いつき。」

「マジで！？っーかとなりかよ！いつの間に住んでんだおまえら！」

「？」

でも正直ありがたかった。あのままだと、俺はどうなっていたのだろうか？

「からかうのはやめて、さっさとけえれ。そろそろ先輩も帰る時間だろうし。」

「えっ、あっそうだね。じゃ私帰るわ。」

「送っていきましょうか？一応ですけど・・・。」

一応先輩は女性だ。痴漢とかもあるのかもしれない、とかいろいろ考えていると「そうするわ。」といってきた。

栄介と健介を追っ払い、俺と先輩は歩き始めた。俺はチャリを押していた。

なんか栄介たちが乱入したときから、先輩が不思議そうな顔をしている。

無言のまま結構な距離を歩いた。暗闇の中を歩く。歩き続けていると、先輩が声をかけてきた。

「空君？あのさ・・・、栄介くんと健介くんのメアド教えてくれない？ちょっと聞きたいことがあるの。」

「いいですけど、俺知りませんよ？あいつらのアドレス。ケータイ持っていないんで。」

「じゃあ今度本人に聞くわ。じゃあうちについたから。送ってくれてありがとう。」

「じゃあまた会いましょう！先輩！」

そうやって俺はここを離れて家へ帰っていった。どうして不思議そうな顔をしているんだろう？

第十話：家庭訪問（後書き）

更新期間空きました

すみません

あまり内容はよくないです。いつものことですけど
では楽しんで読めたかは知りませんが、

楽しんで読めたかたは今後もごひいきに

（読んでる人っているのかな？）

第十一話：願い（前書き）

なんで私の出番がこないのよ！

せっかく題名までになったのに・・・。

ではこんな作品でも楽しんで読んでください。

b y 梓

第十一話：願い

第十一話

もらった通帳のことは後回しにしておいた。

今は悩み事もなく楽しんでいたいから……。

今日の昼休み、次の時間は体育。俺はみんなと野球をしている。

「おっしやー！ ナイスピッチ！」

「さすが双子バッテリー！」

なぜか栄介と健介はバッテリーを組んでいる。これも普段見せないところとして、心に納めておこう。

体育の時になれば、二人のコンビネーションを存分に見せてくれるだろう。

今度は栄介たちの攻撃になった。ピッチャーは、野球部の正ピッチャーが担当している。

栄介が打った。ボールが飛ぶ。そして重力があるから落ちていく。人がいる。ちょうど落下点だ。もちろんボールを見ていなかったから避けられるはずもなく……。

ドカツ！と当たった音がした。

誰かこちらへ乗り込んでくる。

誰かと思ったら斑鳩先輩だった。

「おいこら！ なにさつきにぶつけてんだ！？ 謝れ！」

リョウ先輩……。怖いです……。みんなもろ萎縮しちゃってますよ？

それに先輩も霧月先輩ほっておいてるじゃないですか……。でもそれを言ったら、なんかありそうなのでやめといた。俺には自ら不幸になる趣味はない。

いろいろと向こうで栄介に文句をつけている。

俺はその間に霧月先輩の元へ向かった。体を揺らしてみろ。微妙に反応があった。

「せんぱうい？大丈夫ですか？」

「ん……。空君……。手さわりたい……。」「ちよっと待てえ！」

叫びながらつつこみを入れる。それで先輩は目を開けた。

いていた内容はおぼえていないようだ。僕は二重の意味で安心した。

安心したのはすぐに驚きへ変貌した。

先輩が鬼神のようなオーラを放つ（ように見える）。周りの人は先輩を避けて動いている。

あまりにもおかしくて、気になる。俺は斑鳩先輩のところへ走っていった。

「いか……。じゃなくて、リョウ先輩！」

「お前も殺されてえか！？っていつちーじゃんか。どうしたんだ？」

一瞬びびった。めっちゃ怖い。なんか栄介ぼろぼろですよ？

栄介をその辺にほっぽって俺に話を要求してきた。

俺が言ったのはたった一言。

「あれです。」

「あれ？」

先輩は俺の指し示す方向を見つめて、諦めたような表情になった。

「あれねー鬼神モードになっちゃってるわ……。いつも私でもとめるのが精一杯だしな。何かやりたいことやったら止まるよ。」

「それ以外に止める方法ないんですか!？」

「あるけどねえ……。わかんない。」

おいおいちょっと……。困るよ……。ほんと。

「毎回違う方法で止めてたからね……。何とかして止めてきて。彼氏だろ？」

「か、彼氏……。」

顔が少し赤くなる。やっぱりその響きは恥ずかしい。

「わかりました。がんばって止めてきます。」

「それでこそいっちー!がんばってねー。」

無責任……。その言葉が頭をよぎる。

なにをすれば止まるんだろう?とりあえず先輩のところへ行ってみた。

なんでバッターボックスで打つ構え?

しかも健介にピッチャーやらせているし……。

「健介!なにやってんの?」

「あの先輩に投げろって言われて、投げないと栄介にみたいになるよって……。」

めちやくちゃだ。しかも健介は震えている。
先輩のところへ走る。そしてバットをひったくった。
これでどうなるんだ？止まってくれるのだろうか？

・・・、止まらなかった・・・。

今度は俺の方に向かってきた。俺は逃げる逃げる。必死で足を動かすが、先輩はサッカー部。体力は俺より多い。
そして追いつめられた。

「ちょ、ちよっと先輩・・・、止まってください！」
「バット。」

駄目だ。なんか、どっかおかしくなってる。そして俺に飛びかかってきた。

俺には逃げ場がない。受け止めて、転ばされた。
もしかしたら・・・。思いつきじたばた暴れている先輩を抱きしめる。

「ふにゃ~~~~。」

先輩は変な声を上げて止まった。脳がオーバーヒートしたのかな？
だけどこの体勢・・・、誰かが見たら誤解しそう・・・。
そこにリョウ先輩が現れた。最悪だ・・・。

「あ~~~~！！！！さつきに抱きついてる！！！！」

「誤解ですって！」

「そんなこと言う人ほどねえ・・・。」

そういい哀れみの視線を向けてくる。俺は説得を諦めて、いろいろあって倒れた先輩を保健室へつれてった。

[illegible]

保健室で寝かせてもらう。今は穏やかな表情だ。

保健の先生は今は職員室だろうから、二人きりだ。

二人きり・・・○

いけない妄想が頭をよぎる。

「駄目駄目！」

顔を真っ赤にして追い出す。端から見たら変人かな？そして視線を校庭へ向ける。

今はリョウ先輩がバターボックスにいる。

振った？なんかものすごくスイングスピードが速かった気が。

飛ぶ。ものすごく飛んだ。

ガシャン! どうかの窓が割れた音。リヨウ先輩はどうしたんだ?

「い、いねえ・・・。」

足が速い。もう校庭にはいなかった。

「あ……、空君？　ここって保健室？」

先輩が目を覚ました。ねている顔もかわいかったけど、起きているほうが安心する。

「そうですよ？ボールが当たって、気絶したんでここつれてきたんです。」

「じゃあ気を持ち直したから帰るわ。ありがとう。」

「そんなこと言わないで今日次の時間さぼりましょ？話もしたいことですし。」

言っておくけど、俺はまじめだから今まで授業をさぼったことはない。寝たことはあるけど。

雑談を交わす。たまに外へ視線を向けて校庭を見る。

チャイムが鳴ったけど気にしないで話し続けた。

栄介と健介怒られてるかな？

先輩と話しているのはとても落ち着く。

こんな時間は永遠に続きはしない。それがわかっていても、なお祈ってしまう。

『こんな時間が永遠に続きますように』って……。

こんな言葉がベタなのは分かりきっている。でも、僕はそれでも願う。

さつきside

目を覚ましたらそこは保健室だった。辺りを見回すと空君が外を見ていた。

横顔もかわいい……。きつとかわいいって言う形容詞より、かっこいいの方がいいだろうけどね。

「じゃあ気を持ち直したから帰るわ。ありがとう。」

私がこんなことを言ったのは、二人きりが恥ずかしかったから。

でも空君によって押し切られちゃった。私ってそこまで危険って思われてないのかな？

魅力もないのかな……。

どんどん私の気持ちは暗くなっていく。でも、空君と話しているうちに元気が出てきた。

自分のことだけど単純だなあ……って思う瞬間。

やっぱり私は空君のことが、好き……。って恥ずかしい！

私たちは一限分休んで授業に復帰した。空君はちよつとしかられたみたい……。大丈夫だね？

そしてリヨウと合流して授業の最中に話をした。

「二人きりどうだった？」

わかっててやったの！？ちよつと非道い……。

「楽しかった、いろいろ話せたけど、一番おもしろかったのはアンタのことよ。」

「なにが？」

「窓ガラス。バッティング。」

空君から聞いた話を私はしてやった。リヨウはがっくりとそれを受け入れた。

リヨウはこんなことではくたばらないことを経験上知っている私は、攻撃を待つ。

「さつきさあ……。」

リヨウは、私が意識を失ったときにあったことを話し出した。

そして私も撃沈する。

話も程々に授業に集中した。

私は集中できなかった。空君相手にあんなことやこんなことを・・・。

それでも空君は受け入れてくれる。告白を受けたからには私のことがす、好きなんだろうけど。

どうしてだろう？

一応、今度遊ぶ約束は取り付けることが出来た。そのときに聞き出せるかなあ？

第十一話：願い（後書き）

執筆のペースはどんなもんがいいでしょか？

こんな区切りかたで大丈夫でしょか？

第一見られているかどうか・・・

こんなのですが見てくれたかたはありがとうございます。

第十二話：学級委員現る？（前書き）

・・・・・・・・・・。

私ってなにか言えるほどキャラでてないよね・・・。

作者もうちよつと出番増やしてください・・・。

b y 瞳

第十二話：学級委員現る？

第十二話

本日は快晴なり。っていうことは……。

「あゝつゝいゝ。」

そろそろ部活の大会が始まる頃だ。俺は栄介たちを見に行こうと思っている。今日は、栄介たちは朝練でいないから俺は一人で学校へ行った。改札を通り、ホームへ向かう。いつも通りの動作。

「あれ……？市ヶ谷君？」

聞いたことがあるような声で、話しかけてくる人がいる。そちらへ体を向ける。

「えゝと、川島さんだっけ？」

「え、ええ……。」

初めて駅で会うな。いつも会わなかったのは登校時間の差だろう。学校で気になっていたことを聞いてみる。

「そういえば、学級委員じゃないんだよね？どうして？俺、寝ていたからわかんないんだけど……。」

彼女はがつくりと肩を落とした。すぐ復活したからポーズだったんだろう。

「そうなの……。今年も学級委員はやだなくって思ってたんだけ

どね、立候補したの。だけど水口さんにとられちゃって……。」

なんか引っかかるセリフがある。どこだろう？水口って誰だ？学級委員さぼりまくってるから、全然わからない……。その言葉を口に出す。彼女は少し驚きながら答えた。

「クラスのなかで、進藤くんたち以外にふつうに市ヶ谷くんに近づいて行ってる、面倒見のいい人だけど……。覚えてないの？」

思い出した。なにかと俺に世話を焼くやつだ。しょっちゅう俺に近づいていろいろ言っていたのはあいつが学級委員だからか。うん、納得。ついさっきまで忘れていたことを棚に上げて、そう心中でつぶやいた。なんかおもしろいあだ名持っていなかったっけ？確か……。

「川島さん？一つ聞けどさあ。」

「なに？」

「あれじゃなくて、水口さんって変なあだ名持ってた？」

喉まで出かかっているのだけれど、でない。このもどかしい感覚。これが難解であるほど自力でといたときは、すっきりする。今回は、それほど悩まなくてもそうだから問う。

「確か姉御とか……。後、姐さんとか……。なんか男っぽいっていうのかなあ……。？」

そうだ思い出した。栄介と健介が話していたことだ。俺の周りいろいろなと言っていたなあ……。あの会話はおもしろかった。

「ありがと。思い出した。」

「べ、別に・・・、お礼言わなくてもいいよ。同じクラスだし。」

早口・・・。ものすごく早かったぞ・・・。こんな他愛もない話をしながら、電車へ乗り込んだ。

「今日なあ、川島さんと一緒に登校したよ。そんでな．．．」

「なんでお前らはそんなにもてるんだよ・・・。」

栄介はうなだれながら俺たちに告げる。すぐ気を持ち直したのでポーズだろう。

104

栄介の性格が悪い？確かに騒がしいやつだけど大して性格は悪くないぞ？考えて、仮説を組み立ててみる。

「実は俺たちがいないところで、いろいろやっている。とか？」

そんなことを言うとな栄介はさらに落ち込んだ。すぐ復活し俺につっこむ。

「ぜってー違う！俺、性格に表裏ないだろ！」

そういえばそうだった。続く仮説を組み立てていると後ろから声がかかる。

「進藤兄があんたたちというからよ。だから性格が悪くみられんの。」

だれ？後ろを振り向く。すると人が立っている。見て思ったこと……。

背えたけえ……。いいなあ……。

「えーと、誰だっけ？」

「アンタは……、いい加減に覚えろ！あたしは水口明日香！アンタと同じ学級委員だって！」

へえー、こいつかぁ……。確かあだ名が姉御、姐さん。気になったことがあるので問う。

「俺たちと一緒にいるからって……？どーゆーこと？」

「進藤弟とアンタの性格がよすぎるから、隣にいる進藤兄の性格が

「へ？もうこんな時間？」

時計を見るとバイトの時間はとくに過ぎている。今日はもう諦めるか……。そして教室を出ようとする。すると俺の独り言に声がかかる。

「そうだけど……。アンタ今日変じゃないの？大丈夫？」

俺だけかと思っただけに誰かいた。声のした方へ顔を向ける。暗くてよく見えないが、水口さんだろう。

「水口さん。俺、なにしてた？」

「初めて学級委員の仕事をやったけど？それと、あたしに「さん」をつけんな。むずむずする。」

「わかった。で、仕事って終わったの？終わってなかったら手伝うけど。」

一応言っておくべきだろう。だけど仕事は終わったらしく、「やることはない」と言うことだった。帰る前に校庭を見る。女子サッカー部はまだやっているようだ。そこへ向かおうとしたが、かなわなかった。

「ちょっとアンタ。かawaii女の子を一人で置き去りにする気？」

どこがかawaiiんだ？じゃじゃ馬のような……。俺から見たらかよわいの部類には入らないと思う。

「どこが……。？かawaii？」

「うっさいわね！」

まあいいや。先輩と今日は約束してないし。バイトも一日だけなら大丈夫だろ。淡い希望を持たせて諦めて一緒に帰ることにした。

「まあいいけど？一緒にかえんの。」

学校を出て歩いていく。水口も電車だろうから、駅までは一緒だ。そして単刀直入に話を切り出す。

「で、俺になんのようなんだ？」

こいつが単に最後まで残っていたからって俺と帰るのはあり得ないと、思う。帰ってきた返事は予想通りだった。

「いや、今日アンタ上の空だったからさあ、気になって。」

「そうそう。俺も聞きたいことがあったんだ。『進藤弟とアンタのことが、女子の中ででない日は今んとこないからね。』ってどうゆう意味だ？俺ってなんか悪事働いたり、目立つようなことは・・・したか。なんでだ？」

昼休みの時と全く同じ反応をする。そして俺に告げる。

「アンタ、バカ？アンタはなあ女子に惚れられてんだよ。理解できたか？」

「んなわけねえだろ？俺、まだ一回しか告られてないけど？」

「バーカ。もうちょっと周りに目を向けろ。あたしが言えんのはそんだけ。」

意味わかんない……。しかも走り出したし。やっぱ、あいつじゃ

じゃ馬・・・。

俺はのんびりと家へ向かっていき、家へ着いたとたん驚かされる
ことになった。

第十二話：学級委員現る？（後書き）

P Cぶっこわれました。すみません。

おそらくウイルスにやられているかもしれないので、復旧まで時間がかかります。

楽しみにしていたかたは（いるなら）すみません。

第十三話：遊びへ行こう！（前書き）

私の出番少ないな。

もうちょつといろいろと絡ませてくれよ。

つままないだろ？

こんな明らかに変な小説だからここまで読んでくれた人は感謝の気持ちを送るぞ。

b y r i o u

第十三話：遊びへ行こう！

第十三話

この前、バイトを連絡も入れずに行かなかったから、松山さんに思いつきりぶん殴られた。・・・頬が痛い・・・でも、俺のことを心配してくれる人がいるっていうのは、うれしいかも。

今日は休日。先輩と出かける日。・・・らしい。というのも俺がすっかり忘れていたせいだろうが、怒鳴られた。最近不幸なような・・・。

栄介と健介を誘って待ち合わせ場所に行った。栄介たちがくるとは告げていないが、大丈夫だろう。たぶん・・・。

待ち合わせ場所に5分前につくと、なぜか斑鳩先輩がいた。

「よ！ いっちー。遅かったじゃん。」

「リョウ先輩？ なにしているんですか？」

遅かったもなにもリョウ先輩とは約束していないんですけど・・・。

その言葉を飲み込み、返事を待つ。すると、霧月先輩が見えた気がした。それに気づかずリョウ先輩は俺に答える。

「そりゃー、さつきとかと遊ぶからだけど？」

「なに言ってるの！」

割り込みが来た。霧月先輩がいきなり現れて文句を言い始めた。

「だいたいアンタ誘ってないでしょ！？なんでここにいるのよ！」

「えー？ そりゃないじゃん。私に知れないことはない！」

「でも駄目！せっかく二人で遊ぼうと」「でもいっちーも人つれてきてるけど？」

先輩はこっちを見てがっくりとうなだれる。もしかして、栄介とかつれてこない方がよかったのかな？もしそうだったら、ごめんなさい先輩。

今はひそひそ話に移行している。しかも栄介と健介も参加している。なんか仲間はずれにされた気分で悲しいんですけど。なに話しているのか気になる……。

結局、みんな一緒に遊びに行くことになった。霧月先輩は不服だったみたいだけど、ここは諦めてもらおう。

「先輩？どうしておこっているんですか？」

「別に。」

おこってるよ……。これじゃあ、楽しめるのも楽しめないじゃないか。駅前のボーリング場へ向かっているが、先輩だけずっと不機嫌なのだ。後ろで栄介と健介と斑鳩先輩が、なにやら話をしているけどよく聞こえない。どこへ行くのかもみんなが決定したみたいだし。

「どこへ行くんですか？」

「ボーリング場。」

先輩ずっと不機嫌だなあ。そんなのだとつままないのに……。なんで自ら、自分の感情をいやな方へ持っていくのだろう？俺はそんなのはいやだ。

に行った。

そしてボーリングが始まった。このパターンだと、チーム戦になる。
・・・と思う。

「なあ、霧月さん。俺と健介対あんたとリョウさんでチーム戦やらないか？」

やっぱり出たよ……。栄介は自分に自信を持っているからなおさらだよな……。

「もちろん！ やってやりましょう！」

「私もさんせー。」

「俺は……どっちでもいいや。」

健介以外はみんな乗った。罰ゲームも検討するらしい。栄介のやつ……、負けるって思っていないな。罰ゲームは昼飯をおごる。普通の罰ゲームを選んできたな。

会話が終わり、ゲームスタート。先輩は何か聞いたそうな顔をしていたけど。それは後で聞こう。今の俺は応援に回る。

カコオオン！

「しゃあ！」

栄介はストライクを取ったからか一人で盛り上がる。すぐ後に、リョウ先輩が投げる。

ドッカアアン！

これってボーリングの擬音じゃない……。壊れかけてるよ……。いろいろ。

「ううん。ちょっと不調ね……。なんか微妙にやる気が出ないわあ。よし！」

やる気でないって……。十分すごいの投げてますよ？

そしてなにを思ったか、リヨウ先輩は霧月先輩に耳打ちする。瞬間、先輩は顔が真っ赤になった。

「よっしゃー！活力出た！」

人の反応が活力って……。どんな人だよ。もう1投リヨウ先輩が投げた。

みんな無言になった。

それもそのはず、先ほどは荒れていたのが正確無比になった。こんなのでありますか？

次は健介だ。普通に投げて普通に倒した。誰も見ていない……。意外とかわいそうな役回りだな……。

そして最後に霧月先輩、投げた。この中では一番遅い。そしてコントロールもない。

一番下手だと思う。だけど調子が悪いだけかもしれない。

勝負が終わった。

結果は332対300で先輩達が勝った。リヨウ先輩がものすごく点を取った。

スコア200越えとか……。ばけもんですか！？

栄介と健介は、昼飯代を1000円ずつ払っていた。いと哀れなり……。

そして俺はまず、リヨウ先輩に呼び出された。

「どうしたんですか？聞きたいことって……。」

とりあえず聞く。聞かなきゃ始まらない。先輩は簡潔に答えた。

「なんでさあ、あんた情報が全然出てこないの？あんたのこと調べた結果、確証が得られたのが本当に少ししかないんだけど。」

「いやですね。先輩。別に俺のこと調べたって、どうもしないですよ？」

正直言っただけ冷や汗が出る。こんな問答はしたくない。それでも先輩は次々と心をえぐる。

「だってあんた、出身中学も謎だぞ？これはあまりにもおかしい！あの双子にも言えることだけだ。」

「一つ言わせてもらいます。」

もうたくさんだ！こんなことを話したくない！口調は冷静に語りかける。一つ間違うと、俺の口は爆発してしまいそうだ。

「勝手に人のことを詮索しないでください。俺はいつか語るの、そのときまで待ってくださいませんか？」

そういう残り、霧月先輩のところへむかった。

「先輩、なんでやらないかでしたよね？」

「ええ。そうだけど……。どうして？私たちとやるのがそんなつ

「まらない？」

「いえそうゆうわけじゃなくて・・・。単純に金欠なんですよ。」

「そうなの？　ならいいわ。よかったわあ、私たちとやるのがつまらないからって言われなくて。」

今のところ、そんなことはあるはずがないのに……。大丈夫。の
はず……。

「なんで空君は・・・、やっぱいいわ。」

「なんかその言い方、ものすごく気になるんですけど……。」

[illegible]

声を張り上げすぎて疲れた。家へ帰って寝る。

久々にみんなと本心から騒いだなあ……。すごく懐かしかった。

これは後日談だけど、リョウ先輩の使っていたボール。全部ひび割れたみたい。

いったいいくらかかるんだろう？

ボーリングしてすみません！次はリョウ先輩誘わないでできます！たぶん……。

第十三話：遊びへ行こう！（後書き）

結構雑なUPになりました・・・。すみません。

おそらく誤字脱字が結構あるので、あったら申告してください。
お願いします。

第十四話：買い物道中

第十四話

今日もバイトが終わった。明日からはバイトがないし、ゆっくり休めるぞ！最近ゆっくり出来なかったからな・・・。

そんなことを考えて、俺はのんびりと帰宅する。そのころの俺は有頂天だった。家へたどり着いた瞬間、そんなことは言えなくなった・・・。

「やつほー！空！遊びに来たよー！」

玄関を開けた瞬間、声が聞こえた。ピシヤリとドアを閉じる。今のは幻覚と幻聴だ。花梨がこんなところへくるわけ・・・。

「なんでドア閉めるのさ？せつかくこんな美人が遊びに来ているのに。」

すぐにドアが開いた。幻聴じゃなかった・・・。なんでいるんだよ！

「美人は否定しないけど、ちょっとさあ・・・。」
「な〜に？」

満面の笑みを浮かべた顔で言うてくる。こいつ・・・、確信犯だろ・・・。絶対気づいてる。

「くるなら連絡してからこい！こっちの都合があるだろ！」
「いいじゃん。久々に空の料理が食べたくなったし。着替えもあるし。この前置いておいたでしょ？玄関に。」

スーパー○屋。今日はそこに買い物へ行った。

「ね〜空〜。なに買うの？」

「今日は・・・、親子丼だから卵と鶏肉とたまねぎかな。というわけでタイムサービスに行くよ。」

今日は、たまねぎがものすごく安く出るらしい。一個10円とか、確かそんなもんだったはず。俺は燃えていた。

「たまねぎが安くなってるから、できるだけとってきてね。俺も行くけど。」

「りょ〜かいっ！」

そしてタイムサービスが始まった。とうとうしてもおばちゃん軍団がいて、取れない・・・。
やっと一個つかんだところで終わりを告げてしまった。一個じゃあな・・・。

「そら〜っ！どうだった？」

俺はそちらを見ずに簡潔にいう。

「一個だけ・・・。」

「情けないなあ・・・空。私が取ってきたから大丈夫！」

その自信満々な声を聞き、俺は振り返った。と同時に啞然とする。それもそのはず、花梨は6個もたまねぎを持っていた。

「どうやって、そんなとったの・・・？」

自分でもぬけた声になったと思った。でも、それが気になる。
でも花梨はにっこり笑ってごまかした。たまには話してくれよ・・・。

でも花梨をタイムサービスに連れて行くと、ものすごく成果を挙げることがわかった。

安く会計を済ませて、俺はとても上機嫌だ。成果を挙げた当の本人はのんびりと鼻歌を歌いながら歩いているけど。
そういえば花梨は、ここになにしに来たんだろう？

「なあ花梨。」

「なに〜？空。」

「なにしに来たんだ？」

花梨は答えるか答えないか迷っているようだ。結構時間がかかったからまだ言えない内容なんだ、ってことは理解できた。
だから俺はいつてやる。

「いえないなら、言わなくていいよ。」

花梨はそのときの俺の顔を見て、すごく驚いていた。どうして？
そして俺たちは歩いていく。そして反対の道からかけてくる人がいる。そして見覚えのあるシルエットが浮かんできた。

「あれ・・・？霧月先輩？なにしてるんですか？」

「空君・・・？っ・・・！」

まず俺の顔を見て、少し先輩は笑顔を浮かべた。その後花梨を見て

先輩の顔は悲痛な顔になり、駆け出した。
なんで？

「先輩！？」

「空！今すぐ追いなさい！」

その声には強制力があつた。そして俺は荷物を花梨にわたし、走り始めた。

花梨side

今日私がここへ来たのは確かにわけがある。それを空に見破られたのは計算外だった。そこまで鋭くないって思っていたから。

でも、私は答えられなかった。空にそのことを言っていたいかわからなかったから。

だけど、いわなかったことをすぐ後悔した。

あんな、全てを諦めたことがあるような儂い表情を見せられたら・・・。なんか、ものすごく自分が小さく見える。

あんな表情をしないで！私は・・・、そう叫びたかった・・・。

そして空の先輩がやってきた。私のせいでその人と仲が悪くなっってはだめ！そう思った私は、今度こそ声を出せた。

「空！今すぐ追いなさい！」

空は追っていった。そして私は自嘲する。いつも、肝心なところで手が届かないのよね・・・。

さつきside

空君のバカっ！私とはあまり一緒に歩いてくれないくせに、なんであの女とは一緒に歩いているのよ！

私は泣き叫びたかった。空君は私の彼氏なのに……。そこまで考えたところで顔が赤くなる。

あの子は誰？どうして私とは歩いてくれないの？どんどんいやな感情が私を支配する。

「先輩！」

空君の声がする。追ってきてくれたんだ。うれしいけどなんか逃げちゃう。

そして腕をつかまれた。

「離してよ！」

うれしいのに。体と心は相反する行動をとってしまった。でも、それでも空君は手を離さず、しっかりと私真摯な瞳で見つめてきていた。

そのきれいな瞳に私は少し感情が収まる。その瞬間を見計らったのかは知らないけど、空君は声をかけてきた。

「先輩。あれは・・・、ぼくの従姉弟なんです。父さんのほうの。」
「え？ そうなの？」

聞いた瞬間私は顔を赤くする。何も聞かずに立ち去った自分のバカさが恥ずかしくなったのだ。空君がうそをついているとはまったく思いもしないくらい、すっかり私の疑問に答えてくれた。

そして二人してゆっくりと、従姉弟さんのところへ戻っていった。

空 side

何とか誤解解けてよかったよ。本当に危ないし、花梨には感謝してる。俺の脚を動かさせてくれたことはありがたい。

二人が挨拶をしてる。花梨が余計なことを言わなきゃいいけど。

「それで、空とは付き合っているんですか？」

「花梨！」

俺のあわて方と、先輩の顔が真っ赤になったことですぐ知れた。爆弾投下はやめてほしい。

「空とはどこまで行っただんですか？」

「かくりくん？ いい加減にしろ！」

そしてかりんを強制的に引きずっていく。

家へついてつかれきったのか俺はすぐ寝てしまった。

朝目覚めたら、花梨はいなくなっていた。そしてテーブルの上にメモがある。

楽しかったからね！ またくる！ 親子丼作っておいたから！

花梨

ありがとう。俺は何かに感謝したくなった。

花梨が作った親子丼は、たまねぎだらけだった……。しかも四苦八苦した跡が残ってるし。

「もうちょっと料理っての学べよ！」

第十五話：露見（前書き）

ここまで読んでくださりありがとう。

とりあえずここは私の要求を言わせてもらおう。

空の家へ移住したい！

b y市ヶ谷 雅弘

却下します。

b y作者

第十五話：露見

第十五話

今日は休日。一日バイトに明け暮れる。最近、叔父さんの家が生活費まで送ってくれようとした。というより、叔父さん本人だけが送ろうとしたみたいだ。そのお金は送り返したが。

「ほいっ！空これ運べ！」

「ハイ！」

急いで荷物を荷台へ積む。物事をいろいろ確認しながら積み込む。天地無用もOKのはず。

そう確認していると、松山さんが来た。

「今日は久しぶりに、一緒に配達行くかあ？」

「そうさせてもらいます！」

そうして歩き始めた。今回は近くの家10軒ほどを回るらしい。だからトラックに乗り込む。

シートベルトをつけ、松山さんの顔を見る。

かっこいいとまではいかないが、男らしいというかごつい感じの顔。目が細く、筋肉がとてもある。

そういう俺も、この仕事を始めてから筋肉がたくさんついた。下半身もしっかりしてきたと思う。

「なんだ？空。ついに俺に惚れたか？あいにくだが、俺には妻子がいるんだ。」

「残念ながら惚れてませんよ。僕にはそっち系の趣味はないんです。」
「何回も言ってるだろう？ 敬語は使うなって。俺は知ってるやつ一人なんだからな。」

そうはいっても年上に対しての敬語を使い慣れてしまっているのだから仕方がないと思う。
努力しようとは思うのだが。

「善処してみます。」
「仕方ねえ、諦めるか。」

そのセリフを何度聞いただろうか？ 諦めても次の日にはまた復活する。

「それと暑いんで、窓あけていいですか？」
「そりゃもちろん大丈夫だが？」

そんなことより暑い。窓を開けた。
しばらく無言で松山さんが運転する。周りの景色がどんどん入れ替わる。
それを俺は見つめていた。

「ついたぞ。荷物出せ。」
「はい。」

荷物を台車に積み、運ぶ。その間に松山さんはチャイムを鳴らす。
荷物を届ける。確認をして礼を言い、去る。

その繰り返しを10回ほどやった。そして、最後の一件に向かって
いる。

「今日はこれで終わりですね。」

「おう！今月の給料上げといてやるよ。」

「本当ですか！？ありがとうございます。」

ラッキー！もっと今月はまじめに働かないと。

報酬に見合うだけの働きをしないと、給料が下げられちゃう。

「じゃあ冷房つけるか。」

「かんけーないじゃん！」

思わずつつこむ。つつこんでからふと思う。

この景色、なんか見覚えはないか？

「じゃあ窓閉めろよ。」

じゃあって・・・、こんな時って何言っても無駄かな・・・。

最後の配達する家に着く。見覚えがあつたのは間違いではなかった。

「ほい！空！ラスト一件！」

「了解しました！って、え・・・」

目の前にあつた家は霧月先輩の家だった。

もしかして今日の配達はこののか？ちょっと見られたくないんだ
けど・・・。

俺の希望は打ち碎かれなかった。松山さんは、反対側の家へ行つて

いた。俺はほっとし、荷物を台車で運ぶ。

「松山運送です！」

「はぁゝい。」

そんな風に話しているのが聞こえる。

「おゝい、空！荷物もってこい！」

「はい！今行きます。」

そういい、荷物を持っていく。

俺たちは荷物を渡し、車に乗り込む。

先ほど閉めた窓を開き、外をぼーっと眺める。

俺はその瞬間息をのんだ。

霧月先輩が向こうから走ってきた。こっちを見ている。思いっきり気づかれたかも……。

ま、いっか。ばれてない、たぶんばれてない。

そう思ったけど、俺は帽子を深くかぶった。

松山さんがこっちへ来る。乗り込んで来た。そしてエンジンをかける。

「じゃあ行くぞ。帰ったらアイスおごってやるからな。」

「は、はぁ……。」

トラックがようやく発進した。その瞬間気づかれた。間違いない。こちらを凝視している。

すれ違い、ようやく一息つく。途中でスーパーによって、某アイスを買った。

会社へ戻る。今日の仕事は終わりを告げた。だから買ったアイスを食べ始める。

ふつうのバニラ味だがおいしい。ゆっくりと味わいながら食べて、ぼーっとする。

声がかかり現実へと戻された。

「空〜！お客だぞ〜！」

「は〜い！今いきま〜す！」

この働いている場所を知っているのは誰だろう？ いやな予感はあるものだ。だからささやかな抵抗として、階段をゆっくりと下りた。いやな予感はうれしくないことに見事的中してしまった。ほんとうがつくりくるよ・・・。

「先輩、こんなところでなにしてるんですか？」

俺は少し言葉に刺を持たせた。見つかりたくはなかったのに・・・。だから気を利かせてもらえるところで働いていたのに・・・。せっかくの努力が無意味になってしまっじゃないか！

そして先輩は俺の不機嫌な状態を察したのか、ちょっと驚いていた。

「もう一度聞きます。なにをしているんですか？」

「ちょっと空！そんな言い方はないだろ！？ちゃんと話せ！」

「黙ってください！こっちとしては大問題なんです！」

俺は怒った。本当にいい加減にしてほしい。

すると松山さんがものすごいにらみを送ってきた。

「いいから、ちゃんと話せ。これは、社長としての命令だ。」

ものすごいすこみだ。俺が怒ったときなんかの100倍は怖い。

「わかりました。先輩、ちよつと来てください。」

先輩は黙ったまんまだ。そして動く気配がなかった。どうしたんだろっ？

やっぱり俺の態度のせいかな・・・？それだと少し悲しくなってくる。

[illegible]

何かいやな音が頭の中で響く。気のせいだと思ったかった。

先輩はまだ動かない。そして僕の視界がぐらつき始めた。それに耐えて、先輩に声をかける。

「先輩？ 行きますようか？」

動かない……。本当にシヨツクを受けたんだろう。

僕もちよつときつい。とりあえず立ち直らないと。

そして今度は強制的に腕をつかんで、二階へと引っ張っていった。途中で我に返ったのか、あわてて俺から離れたけど。

二階で座る。沈黙が続く。その沈黙を破ったのは俺からだった。

「で、聞きたいことはなんですか？」

問いかけてみる。俺はこの重い沈黙に耐えられない。

「全部。」

「却下します。」

「けちけち。」

なんか先輩、性格変わってない？

「じゃあなんでバイトしているの？」

先輩は俺のことについて核心に迫れると思っているのか、問いつめてきた。

答えるべきなんだろう。言いたくないことを省いていき、内容を決めた。

隠せないこともあるんだよなあ……。そう心を慰めながら、俺は語り始めた。

「俺の家ものすごく静かだと思いませんでした？」

まず外堀から埋めていく。先輩は首をひねっている。

そのときのことを思い出しているのかなあ？そのまま俺は続ける。

「今、俺は一人暮らしなんです。今俺が言えるのはそれだけです。」

端的な事実のみを告げる。驚いたのかな？

確かにそれしか言えない。だからこそ先輩は怒らないだろうか？

「そうだったの……。大変なのね……。」

「あゝ……。別に大変じゃないですよ？楽しいこといっぱいありますし。」

この言葉が本心かどうかは、言葉にだした俺にもわからない。

だけどその言葉が本当になればいいなあ……。っと思う。本心か
ら。

だから……。

先輩を家まで送っていった。いろいろ話した。

そして家へ帰りぐっすりと眠った。

先輩は俺のことを同情するのかな？俺はそんなことはされたくない。
絶対に……。

第十五話：露見（後書き）

とりあえずちよつとずつはがしていき始めます。
うまくいくかはわかりませんが・・・。
とりあえずこれからもよろしく願いします。

第十六話：告白イベント再び

第十六話

俺は心配だった。同情されるかもっていうのもあるけど、僕に愛想を尽かしてどこかへいなくなってしまうことが怖かった。本当にそれだけは怖い。

それでも俺は普段通りにすごしていく。今日も一人で通学。最近あいつらが野球ががんばってるみたいだし、素直に応援しておこう。

今気づいたけど弁当家に忘れてきた……。せっかく今日は肉結構入れたのに……。ミスったー！

そして今は放課後。呼び出しらしいけどなあ……。なんで呼び出されてるんだろう？

「つきあってあげても良いわよ。」

普段通り、平穏。そのはずなのになんでそれを崩されてるんだろう？

私はあのことを聞いてショックを受けていた。どう接すればいいのだろう？ なんとさえいいかわからない。

朝練でもそのせいでキレがなかったみたい。

「さつき先輩大丈夫ですか？」

「あ、梓……。うん、大丈夫。」

「大丈夫じゃないですよ！ 思いつきり繕ったような表情してるんですけど！」

そんなのだろうか？顔を触ってみる。その瞬間「やっぱり……。」
という梓のつぶやきが聞こえた。

「やっぱりって？」

「悩み事があるってことですよ。カマをかけてみただけです。」

私、こんなのに弱いよね……。駄目じゃん。さらに気落ちする。

「元気だしてください！それはそうと、市ヶ谷空のことですか？」

「なななななな、なんで！ってはあゝ。」

私本格的に駄目ね……。ポーカーフフェイスくらい作れないと……。

「なんでって……。結構噂になってますよ？霧月さつきと市ヶ谷空が仲がいいって。最近はそれに斑鳩リョウと、進藤兄弟が入ってきてますけど。」

「え……。みんなにばれてるの……？」

「ええ、知らない人の方が少ないですけど。」

そうよね……。空君は人気なんだから、みんなに噂が伝わるのも速いわよね……。

私はがっくりと肩を落とした。

「先輩？それと手紙預かってるんですけど。」

「誰から？」

いろいろと混乱した状態で話を続ける。着替えながらなので、よく手紙が見えなかった。

「知りません。」

「わかった。ありがとう。」

もう始業開始まで10分ない。私たちは急いで着替えた。

そして放課後。

「つきあってください!」

なんでこのイベントがよりによっておこるの?

朝、下駄箱にたどり着く。そこで栄介たちと出会い、教室へ行くために階段が上がった。

「野球部調子どう?」

「結構良好。みんなしつかり動けるようになったし。」

とは言ってるものの、栄介と健介の表情は芳しくない。なにか理由があるのだろうか?

「どうしてそんなに暗いんだ?」

「それは・・・。」

「栄介のバカが、いきなりシード落ちだった高校と当たる番号引いてきやがった。本当に最悪だなこいつ。今年で引退する先輩もいるってのに。ほんっとこいつ駄目だよな。」

いつも全然しゃべらない健介がここまで言うとは・・・。そこまで

させるとは……。栄介と対戦相手、恐るべし。そんなところや
り合って、勝算はあるのか？

しかも栄介の足思いつきり踏んでるし。

「勝算は？」

「現時点で0，1％。ピッチャーの調子がよければ1％。そんなも
んだ。」

そこまできついのかよ……。こいつらがいて勝てないのは、ピッ
チャーがものすごく悪いとかそんなもんだろうけど。でも聞いている
感じだと、悪くはないみたいだけだな……。

ここで健介が足を踏むのをやめた。栄介は悶絶中。

「どこと当たるんだ？」

「泰仙高校。」

「ってマジか！」

俺は叫ぶ。確かに勝算はほぼ0だ。この学校で勝てる方がおかしい。

「泰仙高校。数年前から弱体化し、今年はシードではない。だが今
年の選手たちは、数年前に甲子園に行った者と匹敵するくらいの強
さらしい。」

いつの間にか復活した栄介がメモ帳を読み上げる。どこからそのメ
モ帳だしたんだ？

「まあせいぜいがんばれよ。骨は拾ってやるからな。」

「「なんで死ぬみたいな感じで言うんだ！」」

ここは二人して合わせてくる。さすが一卵性双生児。教室へ向かう。

自分の席に座り、教科書等の中に入れようとしてあることに気づく。

「手紙???」

あまりにも男の使うような者には見えない。・・・だってシールがハートの形。どうしてこんなが入っているんだ？

手紙の表面を見る。しっかりと「市ヶ谷くんへ」って書いてあることから、俺宛なことはわかる。これはいわゆるラブレターですか？あいつらにそれを見せてみる。

「ラブレターじゃないの？」

「ラブレターだろ？」

言葉は違っても意味は全く同じだ。結局それしか結論が出せないな・・・。

「よかったなあ！空。」

これは栄介。よかったっていわれても……。俺、今彼女らしき人いるんだけど……。

「それは誰からだ？」

「えーと。書いてないよ。」

その言葉を聴いた瞬間、健介は眉をしかめる。

そして、健介にしては珍しく爆弾投下して、席へ戻っていった。

「俺も、ついていく。」

回りが固まる。冗談ではなく本当に。10秒の沈黙。そしてチャイ

ムが鳴った。

なんでついていくなんて言い出したんだ？

私は、憂鬱だった。その気持ちを表すかのような天気だ。実際はそんなはずないのだが。

「雨かぁ・・・。」

そしてため息をつく。私はどうすればいい？今は、光が見えない道をただ歩いているような、そんな感じた。

「さつき！ため息つくとき幸せ逃げちゃうよ！」

「わかってるわよ・・・。そういえばリョウ。手紙がきたんだけど・・・。」

「ラブレターじゃないの？」

私を取り出したものを見てそう告げる。中身はまだ読んでいない。封を切り、中身を見る。内容は簡潔だった。

今日の放課後、体育館裏に来てください。

「呼び出しねえ・・・。とりあえず行ってきたな。」

元からそのつもりだから何もいわない。この話題はもう終わった。そういえばリョウに聞きたいことがあったんだ。そう告げて私は話す。

「ねえ。なんで空君は一人暮らしなの？」

「はぁ！？一人暮らし？」

結構驚いている。そりゃそうだろう。そしてリヨウは「にやつ」と笑いかける。

「そうか。ため息ついていたのはこれが理由かあー。」

「ちょ、違うって!」

私にポーカーフェイスは無理なんですか? 神様……。

「まあ調べてみるわ。」

「よろしく。」

その会話が終わったとき、チャイムが鳴り響いた。

放課後。俺は体育館裏に向かっていた。無論手紙のことだ。健介もついてきている。

そしてそこでのんびりと待つ。そうしているとなぜか男子生徒が現れた。

「あれ……、なんだと思う?」

「知らん。でも敵ではないな。む

敵ってなに……? なんか変なことを考えているのは気のせいかな? そして女の子がやってくる。その続きに霧月先輩。……霧月先輩……? ? ?

昨日のことが脳裏をよぎる。

少し……、気まずい。二人とも無言が続く。意を決して声をかけてみようとする。

「あの……。」

なんで、こんなところではもるんだろう？先輩は同情しているの？そのことばかり気になった。だけどそんなことを気にしていられない。今はただの先輩後輩を演じなければいけないのだから。

「霧月先輩？なにやってるんですか？」

「そ……、じゃなくて市ヶ谷くん。呼び出しだけど？君は？」

「俺もですけど……。」

まったく同じ用事だったようだ。それ以外に話したくはないから、俺は自分で考える。俺は誰に呼び出されたんだ？

「私よ！こっちへきなさい！」

俺考えてたこと声に出したっけ？とりあえずついていってみた。ついでに健介はもう部活へ行った。「もう大丈夫か。」っていいながら。なにがだ？

先輩たちと少しはなれて、話し出す。

「つきあってあげても良いわよ。」

「却下。」

即答する。俺はそんな風にいうやつは好きじゃない。というより好きにはなれない。こんな女王様の態度は。

「な……、なぜです！」

「一つ、君はそれが物を頼む態度だとわかっていない。二つ、その告白は本気なのかわからない。三つ、これが一番だけど、俺には好きな人がいるから。かな？」

最後のを告げるのはためらった。だけど、どれが誠心誠意の対応だ
と思うから。案の定こめかみをぴくぴくさせているけど、気にしな
いでおこう。

そして名前を聞いた。

「名前はなに？」

「私は・・・、泉みさきよ！ふったことを今にも後悔させてやるわ
！」

「そっか。これからよろしく。」

なんか鳩が豆鉄砲食らったような顔をしている。友達としてのつも
りだったんだけど、顔を真っ赤にしてここから走り去った。結構顔
赤かったな・・・。

そして隅のほうへ目を向ける。その瞬間ずっと隠れた感じがした。
なんでだか誰だかわかる・・・。

「ばれてるからやめておいたほうがいいですよ？」

俺はそういつて背を向けた。そして先輩と合流する。

霧月先輩もちょうど終わったようだ。なんか今のイベントで心がな
えたらしく、やる気が出ないから一緒に帰ることになった。それっ
てサボりだよな・・・。

私は放課後、体育館裏に向かった。

リョウがなんかいろいろと画策していたけど気にしない。

歩いていく間に、まったく同じ方向へ向かっていく女の子を見た。
なんかいやな予感がする。

歩いていくと空君と、よく知らない男子生徒と、健介くんがいた。

なんで？

「あの……。」

私はあのことを謝ろうと思った。だけど声を出す前に、空君が話し始めた。

「霧月先輩？なにやってるんですか？」

「そ……、じゃなくて市ヶ谷くん。呼び出しだけど？君は？」

「俺もですけど……。」

まったく同じイベントだったみたい。同じ……？それってすごくだめなんだけど！そう考えても解決はしない。そう考えて私は、がんばって大人の笑みを浮かべようと努力した。失敗しちゃったけど。

「で、あなたが私を呼び出したの？」

「は、はい！」

「で何かいいたいことは？」

不機嫌だから高圧的に……。なんかやだねえ……。

「つきあってください！」

簡潔明瞭に告げられる。なんでよりによって、このイベントが起くるんだろう……。

「いやよ！私にだって好きな人がいるんだから！」

そういつて私は彼をここから追い出した。ちょうど空君がこちらへかけてくる。見られていないかと心配になり、こっちへきたことへ

ほっとする。

・・・自分の感情がよくわからない。いろいろ理由をつけて、私は一緒に帰ることに成功した。

結局なにもなく――あったけど終わった。泉さんはなにがしたかったんだろう？よく、わからない・・・。

先輩も同じ用件だけど、断ったって聞いて安心した。それにしても眠い・・・。最近いろいろがんばりすぎたかな。

見ると先輩も考え事をしている。なにに悩んでるんだろ？でも聞く気にはなれなかった。

そして電車に乗って、俺はそこで別れた。今日もバイトがんばるぞ！そう自分を叱咤して。

私が一緒に帰った本当のわけは、空君のことをもっと知りたかったから。そして謝ろうと思ったから。なんで一人暮らしなの？とかもっと聞きたいことがある。

でも聞いたらいなくなっちゃいそうな感じがして・・・。だから聞けなかった。でも知りたい。どうすればこの矛盾を解決できるの？謝ろうと思ったときに、空君はバイトに行ってしまった。私はどうすればいい？悩んだ私はリョウにメールを打つことにした。

空君のこと、うわさも含めて全て教えて。と・・・。

それがどんなことになるかも考えずに。

第十六話：告白イベント再び（後書き）

すみません・・・。

投稿これから少し遅くなります。

塾の宿題がものすごく出ているので・・・。

第十七話：観戦& a m p; ハプニング

第十七話

告白イベントはあっという間に忘却の彼方へと押しやられた。覚える必要がなかったし、考えてみたら疲れるばかりだ。そう思っていたけど、この風景を見ていると頭が痛くなってくる……。

現在は昼休み。なんか頭痛がする。理由はわかりきっているけど。みんなで昼飯を食べている。食堂にわざわざ弁当を持ってきた意味が不明だけど。

目の前、霧月先輩。右隣、栄介と健介。右斜め前、リョウ先輩。俺の左隣にはなぜか泉さん、俺はその存在は無視することにした。なんか話しかけてきたのに答えた瞬間、ものすごい勢いで喋りそうだし、絶対先輩が変なことを言って詰め寄ってくるに違いない。それは怖い。それに周りのテーブルから俺にさっきを放ってくる女子と男子。主に俺のクラスの名前が出てこない人。極めつけはなんかストーカーみたくこつちをじっと見ている人だ。そしてその中で一番殺気を放っているのは、川島さんと水口だった。川島さんが殺気を放っている意味は分からないけど、水口が殺気を放っている意味はなんとなく分かる。

おい、アンタ！なにでれでれしてるんだ！

みたいな感じかな？してるつもりはなくとも、俺だって高校生だからなっている可能性はあるだろう。なんかこのこと考えた瞬間、霧月先輩がこつちをじろつと見てきたんだけど……。
それにしても俺っていつから女難の人になってるの？

「はあ〜」。

ため息がでる。健介が俺を元氣付けるように、肩をポンっとたたく。微妙な心遣いにうれしくなる。

「栄介？明日試合だよな？頑張れよ。」

「もち。やるよ・・・！」

なんか闘争本能がものすごく沸いている状態って想像できなかったけど、今の栄介の状態を言うんじゃないだろうか？っていうくらい、やる気がみなぎっている。頑張れよ。

なんていってる俺は無責任極まりないな・・・。

「え？明日栄介君たち試合なの？」

「そうだけどさつき知らなかった？」

なぜか答えたのはリョウ先輩。その情報網はどこからくるんだ？そして哀れ、栄介がしゃべろうと意気込んだところで喋れなくなっている・・・。

「まあ、とりあえず応援に来てくれ。戦力的にみたら勝てないのは分かりきっているけど。」

健介は諦めた感じで言う。確かにその通りだ。燃えていないわけではなく、冷静な判断をして言っているから誰も責められない。そして健介がめったに浮かべない笑みを顔に出す。悪がきの表情にそれは似ていた。

「だから・・・、一泡絶対吹かせてやる。」

がんばれよ。俺どうせ試合でないしな、気楽だ。

やばい・・・、失言だ・・・。逆鱗に触れたかも・・・。案の定、こめかみをぐりぐりとやってきた。

「ぎゃあ！い、痛い！痛い！」

「涙目もかわいいわねえ・・・。」

俺はその言葉を聴いた瞬間、俺はひいた。十メートルくらい離れた。本当心臓に悪い。しかも、先輩はそれを見て、面白がっているというのだから。

「からかうのはやめてください！」

「あっはっは、分かった。」

下心ありそうな顔で言われると、正直安心できない。一応釘を刺しておく。

「放課後の事言いますからね。」

その瞬間リョウ先輩は下心という名の余裕をなくし、冷や汗をかいていた。まあ、そのへんはどうでもいいけど。

とりあえずさっさと歩くことにした。リョウ先輩は後から走ってついてきていたけど。

「そういえば、いっちー。」

「なんですか？」

「やっぱ後だね。」

なにが言いたかったんだ？先輩の思考回路は俺には理解できない。

「グローブ持ってきました？」

「こういうときの醍醐味はもちろんホームランボールや、ファールボールをとることにあるでしょう!？」

「私野球ファンじゃないし。」

[illegible]

なんでだか分からんけど、みんな礼のとき声を出さなかった・・・なぜかバツクネットにいて、観戦を始める。それにしても人が全然いないな。空席がかなりあるじゃん。

今日は暑いし晴れてるから、絶好の観戦日和なのに。

「あゝ空だゝ。」

「大門と、閃？ 久しぶり。なににきたんだ？」

155

てだな。」

「栄介と健介を見にきたに決まってるよ。」

なにが決まってるんだよ……。第一、自分のチームの応援は二次か？

そんなことを話し合っているうちに一回裏のこちらの攻撃は終わってしまった。

栄介と健介のコンビで一点入れたらしいが、それまでだった。

「一点か……。」

俺はつぶやく。今年の泰仙は、調べたところによると攻撃重視だという。栄介か健介がいるとはいえ、5回コールドで終わるだろう。

「一点でも十分じゃないのか？優勝候補だぞ？」

「俺もそう思うよ。さすが栄介と健介だねえ。」

「でもあいつらあんなバッティング良かったか？健介はともかく、栄介は打率低かっただろ？」

それが不思議だった。バッティングを得意にするには結構の時間が必要。あいつらはそんなに特訓したのか。そう思うと体がぞくぞくする。

「ニヤニヤ笑うな。気持ち悪い。」

「そうそういっちー。変だよ？」

なぜかリョウ先輩にまでそんなことを言われる……。そして二対一で争い始めた。

「つていうより、アンタは空にとってのなんですか？」

「それは俺も気になるな。中途半端なことは言うなよ・・・！」

なんか、大門がここだけ真剣になった。怖くないけど。

「あっはっは。私は単に先輩後輩のかんけーだつての。別にばれたところでどうにもならないだろうし、嘘ではないぞ。」

「まあ・・・、それもそうか。」

「そっか。ならいいや。」

その瞬間周りに・・・っといっても、人数は少ないがどよめき声
が上がる。俺たちはみんなそっちを見る。

現在、五回表、12対2。この回で点を入れていかないと、コールドが決定する。そしてセンターがフェンス際で倒れていた。アウト
カウントが増えたのだから、ノーバウンドでキャッチしたのだろう。
あ・・・、担架だ。

『選手の治療をいたしますので、しばらくお待ちください。』

ウグイス嬢がしゃべる声が球状に響く。みな黙り込み、しっかりと
グラウンドに眼を向けている。

そしてこんなときに、場違いなケータイの着メロが聞こえた。

「誰の？」

「私のだ。ちょっと待って。」

そして、画面を覗き込んだ先輩の目は、面白いものを見つけたかの
ように光り輝いた。

—————なんかいやな予感がする。

第十八話：白鳥の舞

第十八話

「はい、いっちー。お呼びだよ。」

「俺!？」

これは先輩のケータイではないのだろうか？なんでそこに俺宛のことがくる？

なぞだ……。

俺はケータイを受け取り画面を覗き込む。誰からだろう？霧月先輩かな？

もしそうだったらうれしいな。そう思いながら送信者の名を見る。

「進藤栄介」

……。なんでこいつが先輩のアドレス知っているんだ？まだ内容は見ないで、先輩に問いかける。

「なんで栄介がアド知っているんですか？」

その俺の疑問が顔にあふれまくっている顔を見て先輩はさらに笑い、俺に言う。

「企業秘密。ふふふ……、私の情報網なめるなよ。」

「ってめっちゃ怖いんですけど!」

「じょーだんよ。この前一緒に遊びにいったときがあったでしょ？そんなときおど……、教えてもらった。」

なんか脅したみたいと言ってる感じがさらに怖い。結構情報漏れてたりすんのか？恐ろしい……。

そして俺は本文を見る。

今すぐ、ベンチに下りて来い。速くしろ！

それを見た俺はなにかを感じ取る。ものすごく切羽詰った状況らしい。そして俺は走り出す。

ケータイを先輩に放り投げ、ダッシュで外へ向かう。なにかみんなが言っていたけど、それを黙殺して走る。

そして俺は外へ出た。人が邪魔だ。とにかく走る。全力で。そして俺は途方にくれる。どこへ行けばいいんだ？

「そろそろ……！！こっち……！！」

栄介の声だ。声のしたほうに俺は走る。そしてすぐにつくと栄介に引っ張られて、ベンチ裏に行く。

「はぁ……。」

汗をぬぐい、息を整える。整ったところで問いかける。

「どうした？」

「頼む！試合に出てくれ！」

栄介にしては珍しく人に頭を下げている。そんな冷静な、自分を外から見ているような感覚だった。幽体離脱じゃないけど。

「頼む！なんかおごるから！」

そんな問題かよ……。そんなことをしなくたって俺の答えは決まっているのに。でも聞きたいことがまだある。

「あのセンターはどうした？」

「軽い脳震盪で、気絶中。今は目覚めないらしい。っというわけで頼む！」

そんなに言うなよ。でも、あの人脳震盪か。そっか……。

「そんなに叫ぶなよ。うるさいだろ？そして出るかどうかだけだ。」

一度言葉を切る。栄介が期待と不安の入り混じった目で俺を見る。口を開き、言葉を紡ぎだす。

「もちろんOK。こんなチャンスめったにないだろ？」

「サックス……！！」

「「「「よっしゃ！」」」」」

よっしゃ？どこからか聞こえてきた。その声の出てきたところを探すと、野球部のみんながこちらを見ていた。……ドアを小さく開けて。

ばれてないつもりだろうか？

「栄介。ユニフォームは？俺持っていないけど。それと、選手登録してあるのか？」

「ふっふっふ……。」

栄介はニヤニヤ笑いながら言う。……気持ち悪いぞ。これがさっきまで人に物を頼んでいた態度か？

「その点に関しては抜かりなし！ほら！」

どこからか取り出したメンバー表と、ユニフォーム。まずメンバー表をもぎ取る。そこには確かに俺の名がある。

そしてメンバー表を返し、ユニフォームを受け取った。背番号は「8」。

「8番・・・？なんで？」

「お前が、レギュラーだから。」

そのことを聞いた俺はうれしかった。それを隠すために急いで服を脱ぎ、アンダーシャツ、ユニフォームを着る。

そこで重大なことに気がついた。

「あ、グローブ観客席なんだけど・・・。」

「じゃあ投げてもらえ。リョウ先輩がいるだろう？」

むちゃくちゃな。それしか手がないから今回だけはそうした。

「つーかさ、最初から試合に出てほしいって言えば俺持ってきたのに。」

「だって・・・。」

「だっては似合わない。」

ぐさあつ

速攻で切り捨てる。栄介は胸を押さえてなにやらぶつぶつ言っている。健介に目で問いかけると、答えてくれた。

「こいつがいきなり「試合に出て」なんてやったら来ないかな？」と

か考えたかららしいけど?」

「へえ。そんなことかよ……。別にそんなことしなくても行くのに。」

その話をしながら借りたスパイクを履く。ちよつとサイズが大きいけど平気だろ。

観客席にいるリョウ先輩に叫ぶ。

「せんぱい!!! その袋とってください!!!」

聞こえたのかな? ぱーつとみていると袋が上から落ちてきた。そつちをみるとなんか三人で談笑中だ。・・・興味ないのかよ。

そして俺たちはグラウンドへと飛び出した。

センター足立君に代わりまして、市ヶ谷君!

ウグイス嬢がいい、「わー」と声がする。俺はそれを遠くに感じる。集中すると起こる、いつもの懐かしい感覚。ぞくぞくする。

試合が始まった。

そして俺は、再び空を飛んだんだ。

リョウside

「はーあ。いっちー行っちゃったね。」

「そーだね。」

私とこの大門とかいうやつは、結構意気投合している。そして何かが始まる予感がする。面白そうだ。

そして横をぱーつと眺めていると、うちの学校のやつらがいた。あ

れは一年かな・・・？

そう。確かに一年だ。確か名前は川島瞳と、水口飛鳥だ。いっちらのクラスの人だな。ちよつとした悪戯心だ。呼びかけてみよう。

「川島瞳と水口明日香！こっちへきなさい！」

命令形で済ませてみた。そしたら警戒した感じできた。そりゃ当然よね。

「なんのようですか？」

言葉にとげが……。私ってそんなに嫌われてるっけ……。気にしないで続ける。

「いや、これからオモシロそうなのが見れそうだからね。少人数より、大人数でしょ。」

「そうそう。俺もそう思うよう。」

うるさい。私は心でそう思う。なんでこんなでかい図体したのが、こんな口調でしゃべってるんだ。

「おもしろいって・・・なんですか？」

今度は小心者っぽい子が問いかけてきた。確か川島瞳。私はそれに答えず、何かをたくらんだ目で笑い続ける。
みんなにひかれかけたからやめたけど。

「もしかして・・・、空が試合出るんですか？」

小さい声で立松とやらが問いかける。私はその返事を目で返す。「

「そうだよ」と。

それを見た彼は、つぶやいた。よく聞こえなかったけど、こういう風に言っていた。

「・・・は再び・・・舞う。」

どんな意味があるんだ？聴こうとした瞬間、ウグイス嬢の声が聞こえた。

センター足立君に代わりまして、市ヶ谷君！

立松というのと大門以外は驚いた表情をする。そりゃあ当然か。でも聞けなかった。私ってこんなに情報集めるの下手だったかな・・・。

私の気持ちも関係なく試合が再開した。・・・当たり前だけど。妙にそのユニフォーム姿が似合っている。相手のバッターが打った。センターを狙い打ったらしい。素人目にもそのことが分かる打球が飛んでいった。

いっちーが走る。疾い、だけど届かない。ヒットか・・・。観客全員が思った瞬間、いっちーは飛んだ。鳥のように。

そのプレーにみんな、声を出せない。それほど見惚れるプレーだった。チェンジになったが、まともに動いていたのは、いっちーと、進藤兄弟と、相手チームだけだった。

その相手チームも混乱して、傍から見るとこっけいだ。そして聞こうと思っていたことを立松とやらにたずねる。

「さっきなんて言っていたの？なんか舞うとか言っていたけど。」

「あゝそのことか。白鳥は再び空を舞うって言ったんだよ。」

「白鳥って？」

私はここぞとばかりに詰め寄った。でもそこから先は、答えてくれなかった。

礼！

どこか遠くでそんなことが聞こえた。でも私は考える。いったいなんなのか。意図的に隠されている気がする。

こんなときの私の勘はあたるから、家へ帰ってからもう一度データを洗いなおすことにした。

第十八話：白鳥の舞（後書き）

現在スランプ・・・。文が上手く思いつきません。
がんばって書いているつもりなので！
では。

第十九話：空の聖域？

第十九話

負けてしまった。当然といえば当然。12対2からひっくり返せる
ほうがおかしいんだ。でも、久しぶりに暴れられて楽しかった。興
奮の渦に巻き込まれ、自分を少し失いそうになったけど……。

試合後、俺は観客席に戻った。先輩や、大門、閃がいるところへと。
そこへ向かったら先輩だけ残っていた。俺のグローブの袋を持って。

「あ、先輩。ありがとうございます。閃と、大門はどうしたんです
か？」

袋を受け取りながらたずねてみた。先輩は聞かれると予測していた
のか、すぐに口を開いた。

「閃って、立松か。あの二人なら、いっちーが守備やった後すぐ帰
ったけど？」

「そうですか。じゃあ、「それとさあ、あんたモテモテじゃない？」

話しているときに割り込まれる。それは止めてほしい。心で言った
けど聞こえなかった。当然か。

「まあそれはどうでもいいんです。とりあえず帰りましょう。俺疲
れちゃって……。」

「へー、いっちーでも疲れるんだ。ま、帰るか。その二人！」

いっちーでも？それってどんな意味だよ……。その前に、二人つ
て誰だよ！そう突っ込もうとした瞬間、二つのシルエツトが現れた。
ものすごく見覚えがある……。

「川島さんと水口？何でここにいるんだ？」

そう。その二人だった。思ったことを口に出す。すると、水口が口を開いたが、川島さんがせき止めた。なんで？理由が理解できないまま、俺は川島さんを見つめていた。

・・・彼女の顔が赤くなったけど。

そして外へと出て行った。普段着に着替えて動きやすくなっている俺は、グローブの袋をくるくると回す。

そうしていると、川島さんが声をかけてきた。

「なんで今まで野球やらなかったの？」

最悪の質問。俺はそれをうまくごまかす術を持っていない。考えているとさらに、水口まで詰め寄ってくる。

「それはあたしも聞きたいな。ものすごく気になっているんだがなあ・・・。」

なんか上目遣いをしてきている。すぐそこで川島さんがちよっとお怒りのようですよ。俺はこの変なやつを一刀両断する。

「それやめれ。お前がやるとちよっと・・・。」

「それどういう意味よ！」

「そのまんまの意味！」

逃げながらそう叫んだ。まず、100%の確立で追ってくる。とりあえず逃げて怒りがおさまるのを待った。結構単細胞だからすぐなおったけど。

その間に俺は言い訳を考えておいた。疑われること間違いないが、

これで一時のしのぎになるだろう。そんなことを考えて、伸びをした。それを見て怒った人もいるけど。

「市ヶ谷くん！さっきの質問答えて！・・・ってご、ごめんなさい・・・。」

怒鳴ったのを気にしているのか微妙に落ち込んでいる。別に気にしていない俺は軽くでこピンを構え、打つ。

ペチン！

結構大きい音がして、額に赤い跡ができる。

「ううう。痛いよお。」

結構なみだ目だ。やばくね！？すぐ駆け寄り、目線を合わせる。つといつてもちよつかがんだだけ・・・。こんなときは自分の背丈を恨むよ。

「悪かった！痛かったでしょ？」

頭を下げ、誠心誠意謝った。大丈夫かなあ？からかいのつもりでやったのに。なんか二人がじーっと俺を見ってくる。攻めているような感じだ。

水口は、『なに泣かしてんだよ、このアホ！もっと謝れ！』みたいな感じで。

リョウ先輩は、『あゝあ、泣かしちゃった。もしかしたら特種スクープかも！』

なんか攻めているというより楽しんでいるような・・・。そうこうしているうちに泣き止んで、ほっと一安心。そしてもう一度聞いてくる。

「さっきの質問、教えてくれないの？」

上目遣いで聞いてくる。水口と違っておねだりの仕方が上手い。ヤバイ……。でも、こいつには言えない。意を決する。

この言葉が、自分を傷つけることになるうとも。

身体の中から、吐き出すように。

「俺、野球嫌いだから。」

三人の動きが、止まる。俺はただ一人歩き始める。それにみんなついてきて、一気に罵声を浴びせる。……。二人だけ。

「アンタ！嫌いってどういうことよ！」

「……。嫌いなわけじゃないでしょ……。！？うそでしょ……。？」

あーそうだよ！うそに決まっているだろ！なんで嫌いなことに関わらないといけないんだ！心の血が流れる。だけど、その傷口を広げながら、俺はさらに嘘を重ねる。

「嘘じゃない。本当のことだ。俺は、野球が、嫌いだ。」

心が死にそう。そんなことない！って叫びたい。大好きなのに、どうして嫌いって言うんだ！？

「嘘はやめ「嘘じゃない！！！！」」

川島さんがもう一度問いかけてきたのをさえぎり、俺は怒鳴った。

思考回路がショートしかけている。そして俺はここから逃げ出した。

another side

川島 瞳

私たちはのんびりと帰っていた。ついに・・・、ついに！市ヶ谷君と帰れる！

そんなことが脳内を満たしていた。あのことを聞くまで。

「俺、野球嫌いだから。」

嘘・・・！そんなはずない！なんで嫌いな人が、親友の頼みでも試合に出るの？

あの時、あんなに生き生きしていたのに！そんなはずがない！私は問い詰める。

「嘘はやめ「嘘じゃない！！！！」」

私は彼の怒鳴り声に震えた。ものすごく怖かった。だけど、なんか悲しい・・・。我慢しているように感じる。絶対、彼は野球が嫌いじゃない。

市ヶ谷君は走り出していった。私は追えなかった。そして斑鳩先輩が追っていった。私は、これじゃ駄目だよね・・・。そして彼女が走り出した。

「なんで、嘘ついたのかな・・・。」

「本当だよな。あのアホが。ばればれなんだよ。もっとまともな嘘付けて思うよな。」

・・・そんな悪口言っているのかな・・・。

斑鳩 リヨウ

まったく！ふざけてんじゃないよ！こっちは伝えたいことだってあるってのに。あいつは泣いていた。

実際には泣いていない。でも、心が泣いている。そんな感じがした。だから私は追っていった。

100メートル先を歩いている。足をトップギアに持っていく。

捕らえた！

「いっちー！待ちなさい！」

いっちーは手を振り払おうとしたみたい。けど私がしっかり捕らえている。離さない！しっかりと聞き出してやる！ふふふ・・・。

「せ、先輩・・・。てえ離してください。それに・・・怖いです。それは分かりきっていましたが。」

よくよく見ると周りがひそひそ私たちのことで話している。パツと手を離し、言葉を口から出す。

「なんで逃げていったの？第一、嘘はいけないけど。」

「嘘なんか・・・、ついてないです。」

ごまかしは、私に対しては無駄ってことがわからない様ね。

「あんな生き生きしている顔で嫌いなんて言えたら大したもんよ。」

それに、なんでどもの？やましいことがないならどもらないでしょ！」

口がふさがる。反撃する手立てがなくなったようだ。

「なんで嘘をついたの？」

お姉さま風に聞いてみる。それも効果がなかった。ショックね・・・。
そして、さつきからの言葉を伝える。

「『あの時、急に押しかけちゃってゴメンね。』だって。アンタなにされたの？」

その言葉を聞いた瞬間、彼は逃げ出した。
何か触れてはいけない領域に、彼の聖域に無断で入り込んだ気がする。

聖域に入り込んだものの末路、破壊か拒絶か。そして最後に、本人が受け入れるか。
私の背筋に冷や汗が流れた。

第十九話：空の聖域？（後書き）

すいません……。学校始まって疲れています。つというわけで、次の投稿は土日のどちらかです。

たぶん……。

遅くとも土日には更新するつもりなので！では！

第二十話：空の過去 1（前書き）

注意！

今回は俺の過去がでてきます。

結構ぐろいところもあるのでハイライトだけを知りたいかたは後書きに飛んでください。

お願いします。

b y 空

第二十話：空の過去 1

第二十話

家にたどり着いた俺はぜいぜいと息を吐く。頭の整理はできている。心がそれを認めたくないだけ。床に倒れこんだ。何かがあたまに浮かんでくる。

そして俺の意識は闇へと落ちていった。

6年前・・・

明らかに普通じゃない家庭。ぼくの家を形容するならそれが一番当てはまった。父親は市ヶ谷^{いちがや} 風矢^{かぜや}、母親は市ヶ谷^{いちがや} 美香^{みか}。ぼくの親はプロ野球選手だったんだ。一軍の中で有望な若手、『疾風』の異名を持っていた。ほんと、その異名の通り盗塁が得意な、ぼくの尊敬する父親だった。

反対に母さんは、普通の人。・・・いや、普通というにはあまりにもかけ離れていたのだと思う。ぼくに父さんが見ていないところで普通に暴力を振るうし、殺されそうになったこともあった。怖かった。いい子にしていれば、母さんは怒らないかもしれない。ぼくはそんな淡い期待を持ち、優等生って言われるようにがんばった。それが、余計母さんのプライドを打ち壊してしまった。もともと母さんは父さんに劣等感を持っていた。才色兼備の父さんをみれば、確かに嫉妬してしまうだろう。そしてその息子が優秀なら、「やっぱ風矢さんの息子ね。」って言われることは間違いなかったから。そんなこと、子供のぼくには分からなかった。ただ、嫌われないようにその日その日を生きることに精一杯だった。毎日暴力が、虐待が続く。

「ごめんなさい・・・。許して・・・。」

あるとき、ぼくは、何に許しを請うていたんだろう。かあさん？それとも何か別のこと？そんなことはわからない。

「うるさいわね！あんたなんかいなければ良かったのよ！」

「ゴメン……。ゴメン……。」

無力なぼくには、ただ許しを請うことしかできなかった。そして、悪夢が訪れる。

「「いってきます。」」

「「いってらっしゃーい」

ぼくと父さんは家を出る時間は同じだった。今思うと、ぼくにわざわざ合わせてくれたのだと思う。普通の親子同士の会話をして、駅で父さんと別れる。退屈な登校。それは学校でも変わらなかった。今思うと、それはましだったかもしれない。嘘偽りない笑顔がまだ、出せたから。

少し嫌がらせもあった。プロ野球選手の息子って、結構つらい。もちろん野球は上手いって思われて、運動好きで、性格がいいっていう風に見せないといけない。偽りの日々。

でも友達の前では、しっかりと自分を出せた。闇の中の光明。それがぼくにとっての、友達のポジション。

「空！おはよ！」

「うん。おはよ。」

友達存在、それがなかったらぼくは学校へといっていない。授業は大体理解できるし。

今日ものんびりとしながら授業が終わり放課後になった。

「そろそろ！勉強見てください……。」

「まったく……。」

ぼくは苦笑いをした。なんでこのあたりが分からないだろう。第一、一学年上の彼女がどうして俺に教えを請う？こんなじゃもつと学年が高くなったときに授業についていけないぞ？これの将来を案じつつ、ぼくは尋ねる。

「どこ？それと今日はあーちゃんの家行っていないか？」

その言葉を聞いた瞬間、あいつの顔は少しうれしそうで悲しい顔になった。すぐ持ち直して、言う。

「もちうちで！というわけであつて……！」

「もうちょつと発音しっかりやれよ。じゃあ行くか。」

そしてぼくたちは校門を出て行った。歩きながらいろいろぐちを言い合う。そして彼女の家につく。勉強を教えてやった。……基本から。

「だからここは、こっちから割るから答えは15なんだよ。」

「あつ、そっかー！ありがとっ！」

まったく。世話が焼けるな……。でもこの平穏でぼくは充電したい。これから家で起こる、いつもの事態に備えて。ねっころがる。完全に充電モードだ。でもあいつはそれを分かっているから、僕に近づかない。そこまで無神経じゃないし。

「おじゃましました。」

「また明日ねー！勉強教えてよ！」

苦笑いしながら、ぼくは立ち去る。本当は、ぼくが充電のためだけにここによっているのを、彼女は知っている。だけどそれでも受け入れてくれるところがあるのは、気持ちいい。そしてぼくは家に帰っていった。

充電したのはいつもどおり。家へ帰ってみたら、誰もいなかった。

「ただいま？」

無常に反響する己の声。首をひねりつつ、自分の部屋へと駆け込む。そして、扉を閉じてベッドにねころがる。少し疲れた。眠ろう。俺は一時の眠りについてた。

そしてぼくは隣の部屋で争う音で目が覚めた。目をこする。もうちょつと寝たいなあ……。

喉かわいた……。牛乳……。

僕は扉を少し開く。開いた瞬間息をのんだ。

「お父さん……？なんで———。」

赤、一面にあるのはただ紅い、とてもなじみのある液体。ぼくはそれがなんなのか分かりすぎている。

それは、紛れもなく、血だった。

そして母さんが包丁を目の前に構え、父さんに突きつけている。そんな……！母さんは父さんのことが嫌いだったの……？

「―――！」

目の前に、赤が降ってきた。顔が血で染まる。

怖い。怖いよ……。あーちゃん……。

それでも、お母さんは止まらない。血まみれの者を乗り越えて、こちらへくる。

「そ……。ら。はや……。く……。にげ……。ろ。」

声が聞こえた。母さんが近づいてくる。目を見てしまった。

いかれている。歯の根が合わない。普段感じている恐怖よりも怖い。本能へと呼びかけている恐怖。そして脳内で告げられる。

危険！今すぐ逃げろ！と。

「今すぐ逃げろ……。！」

怖かった。けど、お父さんの声が理性をうち消し、僕は窓から逃走した。足が痛い。石を踏みながら隣の家へと走る。母さんが追ってくる。

ヤダ。コワイ。

誰か――――。

そして隣の家のチャイムを鳴らしたとき、お母さんが僕を斬りつけた。ドアを越えた後、僕は失神した。

そして今の家にすぐ移ってきたんだ。この記憶、僕はどうして忘れていたんだろう？　なんか暖かい……。

起きたとき、俺は布団にいた。――膝枕付きで。

「え？」

「あ、空。起きたんだ。大丈夫？」

「か、花梨!？」

目の前にいたのは花梨だった。暖かく感じたのはこのせいかな。

「うなされていたけど大丈夫なの？」

「うん．．．。平気。ちよつと昔のことをね、思い出しちゃっただけ。」

平靜を装えない。怖い。夢とは言え、十分にリアリティがあつた。

そして花梨は目を見開いている。そのことには触れずに、俺は告げた。

「なあ？」

「なに？」

「明日、学校さぼって良いか？ちよつと、出かけたところがあるんだけど。」

明日は平日。だけど、昔の家。少しずつでも進んでいかないといけない。いつか、いつか、この鎖の呪縛から逃れられるように。その思いを読みとってくれたのかOKだった。

あーちゃん。久しぶりに会いたいな。

第二十話：空の過去 1（後書き）

空9歳の頃。

母が父にコンプレックスを持っており、その遺伝子を受け継いでいる子供に苛立ちがいき、毎日暴力をふるう。

一方の空は、あくちゃんの家で体を休めて毎日を堪え忍んでいた。そしてついに、暴力をふるっていたことがばれて、母は父を包丁で刺した。

そして次の日、空が一回その家を見に行つて、あくちゃんを探す！らしい

すみません……。うまくまとめてませんね……。

第二十一話：電車での邂逅

第二十一話

電車が揺れる。花梨に借りたMP-3を使い、気を紛らわせながらゆらゆら身体を揺らす。

「はじめ・・・それだけはつけないとな・・・。」

昨日、家についた後見た夢。・・・いや、夢ではなく過去。まだ、心にリミッターがかかっている、全部を思い出したわけじゃない。まだ思い出したいくないし・・・。

昨日はこんなことになってしまった・・・。たまに花梨の脳は正常かどうか疑いたくなる。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

あの過去は、ぼくが封印した過去の一つ。なんだか涙が止まらない。全ての涙を体外に出したと思われたところに、やっと涙が止まった。そして花梨を問いたです。

「花梨・・・。」

「な～に、空？」

「なんでここにいるんだ・・・？」

疑問。当然出てくることだ。花梨の家からここまでは、結構な距離がある。どうしてこれなんだ？こんなに都合のいいときに都合のいいように花梨がくるわけがない。そんな偶然なんてない！だから尋ねた。

「なんとなく。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・嘘だろ。」

「嘘じゃないわよ！暇だからこっちきただけだって！」

じとーっと視線を向けてみる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（じとーっと視線を固定する）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（冷や汗をだらだら流す）」

約一分。この空気に耐えられなくなって、花梨が話し出した。

「栄介君がね、「空の様子がおかしいからみてやってくれ。」って言ったからここに飛んできたのよ。そしたらあんた玄関でうなされてるんだもの。驚いちゃったわよ！？」

「やっぱあいつらなら気づいちゃうのか・・・・。」

「ねえ。なにがあったの？」

別に花梨から見たらたいしたことじゃないけどな・・・・。でも俺にとっては辛い。だから隠してきていたのに。

「・・・・・・・・なんでもないよ。」

「そんなわけないから聞してるの！」

「じゃあ、言いたくない。」

その言葉を受けて花梨は少し考え直したようだ。そして真剣な表情で俺に問う。

「じゃあ・・・・、アンタなんでもうなされていたの・・・・？」

その言葉で、夢で見えていたものを全て思い出す。頭が痛い……。だけど……。だいぶました。

「空！大丈夫！？ものすごい汗だよ！」

「あはは……。平気平気。」

ちょっと間を空けて、俺は夢の内容を告げる。

「ちょっとね……。6年前のことを思い出しちゃって。」

「――――！！」

花梨はなにもしない顔で固まる。固まる。固まる……。

約1分が経過したころ、俺は花梨の頬をつついた。びくつとする。

花梨の起動完了！

じゃなくて。

「あのさ、あーちゃんって覚えてる？明日会いに行きたいんだけど。」

「あーちゃんかあ。覚えてるけど？でも……。明日学校でしょ？」

そうだった。今日は日曜。明日は学校だった。

「わ……。忘れてた……。っていうか花梨はなんで明日学校なのここにいるんだ？」

花梨はにっこり笑って言う。

「明日開校記念日だから泊まりにきた！明日は父さんも来るって言ってたし。」

おじさん来るのか。なんでだ？あの人も仕事あるだろう？そのことを疑問符にして告げようとする。

口をあけたところで花梨に台詞をとられたが。

「父さんはね、空のスカウトに来るって。何でも今日の試合見たらいいよ？ 友達のビデオで。」

やっぱり・・・逃げようか。怖いし。

「明日学校サボるわ。んで、上手く言っといてくれ。それに・・・明日は引っ越してきた日だし。」

そういつてみる。多分……だめつて言うだろうな。

「いいよ。」

「いいのかよっ！」

予想に反してあっさりと認めてくれた。そしてかばんからあるものを取り出す。

$$\begin{array}{c} \lceil \\ \text{M} \\ \text{P} \\ \hline 3 \\ ? \\ \rfloor \end{array}$$

「はい！こんなこともあろうかと持ってきていたのですよ。ふふふ・・・」

こえー！アンタ予知能力でも持つてるんですか！？こんなこともあろうかと思ってどんなこと考えてるんだよ！

天才の考えは、俺にはわからない・・・。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

とまあ、こんな変なことがあって、俺は電車に乗っている。隣の県へと向かう。家の鍵は持っている。なぜかという、おじさんがこの家を譲り受けて仏壇がおいてあるらしい。

三人分・・・。

父さんと母さん、そしてじいちゃん。視線を伏せる。

「それにしても暇だな・・・。」

「あれ？市ヶ谷君？なんでここにいるの？」

視線を上げる。目の前にあったのは少し長い髪。だれ・・・？

「えーと・・・、確かに俺は市ヶ谷空ですけど・・・。あなたは誰ですか？」

「なんだよ。私は誰でしょう？」

この声聞いたことあるな。一回だけ・・・。誰だっけ・・・？思い出せ！過去の記憶を検索する。ヒット件数、10000以上。

・・・10000以上？なんでだ？

降参してしっかりと顔を見る。顔を見て思わず「うわっ！」と叫んでしまった。

「わっ！っていい度胸ね・・・！」

青筋出てますけどいいんですか？こめかみぴくぴく動いてるし。ニコニコ笑っていたらごまかせるなんて思わないほうがいいですよ？

「まあまあ、そんな怒らないでください。梓先輩。」

「怒るに決まってるでしょうが！」

「ここ電車内ですよ？」

「うっ……。」

忘れてたんですか……？だめじゃないですか……。っと言うより、なんで先輩がここにいる？

「なんでここにいますか？今日は学校ですよ？」

「自分のことを棚もあげて……。」

といいつつ、俺の隣に座る。

「私はちよつと親に呼ばれたのよ。確か……、おばあちゃんの一週忌。」

「そうですか……。先輩のおばあさん亡くなったんですね。」

しみりとした雰囲気が漂う。この雰囲気は嫌いなんだけど……。打開できない。所詮他人の俺には。暗い沈黙が続く。

『次は～山崎～山崎～』

丁度いいタイミングでなってくれた。俺はここで降りる。椅子から立ち上がったところで先輩も立ち上がる。

「「ここで降りる（の）んですか？」」

はもった。さっきまでの気まずい雰囲気は、どっかへ飛んでいってしまった。

改札を通り、そこで別れた。単に俺が場所を忘れていたのもあるけど。

「すいませ〜ん。」

「は〜い」

交番へ入り地図を見せてもらう。見つけてお札を言う。この住所を聞いても、近所の人以外は・・・恐れない。時の流れは速いもんだ。

「6年か・・・やっぱ長いな・・・。」

そう、あのころは誰もが俺に軽蔑の視線を向けてきていた。ぼくはそれに耐え切れなくなつて・・・逃げたんだ。

ぼくが――――弱かったから。

第二十一話：電車での邂逅（後書き）

もうだめだぁ……。燃え尽きてます……。って言うのは嘘ですけど。

でも更新速度は落ちています……。とりあえず、一章は次で完結、その後人物紹介をはさんで、

二章に行きます。

更新速度落ちていてすいません！

第二十二話：約束の指切り

第二十二話

まず、小学校へと向かった。たいした思い出はないけど。

「あれ・・・？」

校庭を覗き込むと、何か違和感がある。なんだ？

「校舎が・・・大きくなってる。」

工事でもされたのか？6年はやっぱり長い。歩いているときも考えたような気がするが、気のせいだと思いたい。ここにはいい思い出が特にならない。いじめられてたし。

「どうでもいいか・・・。とりあえず一つ目、だ。」

どうでも言いなんていっちゃだめか。もっと強くならないと。ここへ来た目的は、もう果たした。

キンコンカーンコン。

チャイムが鳴った。丁度授業が終わったのだろうか？でも・・・、もう俺には関係ない。

「後二つかあ・・・。」

そう独り言をつぶやきつつ、俺は自分の家に戻り始めた。信号を渡り、右へと曲がり、入り組んだ路地を抜ける。抜けたところ

ろには、一軒家が建っていた。

俺と、父さんと母さんが住んでいた家、感傷はない。持ってきていた鍵を使ってドアを開ける。

ガチャリ

普通に会いた。入り込む。記憶の中で思い浮かべた映像と違う点はまったくない。

木製のテーブルに椅子。野球のポスター。

それらの全てが“きれい”になってそろっている。

・・・・・・？何かおかしい。きれいになっている？

6年間も放置したんだぞ！？なんできれいなままなんだ？なんで記憶と一致するんだ？

だめだ・・・・。データがなくて全然分からない・・・・。

だけど・・・・。この様子からして毎日上がりこんでるようだな。そう思い立った俺は、一回鍵を閉め、電気を消した。

無論、侵入者を捕らえる。

「腹減った・・・・。それと仏壇に行かないと・・・・。」

考えるのを忘れていたが二つ目の目的、ばあちゃんの仏壇をしつかりと拭かないと。

そして俺は別の部屋へと移った。廊下をゆっくりと歩く。

ばあちゃんの仏壇の前で手を合わせ、黙祷する。しばらくして、目を開ける。なぜかお供え物がおいてある仏壇を拭く。

・・・・っといっても、ほとんど掃除なんかする場所がない。汚れていないのだ。

「なんでだよ・・・・。明らかに不法侵入じゃないか。」

いったい誰なんだ！？物を盗むのではなく、掃除をしていくのは変人だ。この家の中には、父さんの私物が多々残っているのだから。

ガチャリ！

ドアが開いた音がする。身体の緊張。

侵入者だ！

そーっと玄関のほうへ近づいていく。電気がついている。念のために木刀を持ち、リビングへと歩いていく。

「~~~~♪」

鼻歌を歌っているようだ。そして姿を見る。

暗いところから明るいところへと出した目は、少し細めてその姿を見る。

何かものすごい見覚えのあるシルエットですが……。気のせいだろう！

完全に目がなれたところで、俺は木刀を中段で構えながら近づく。

「なにしているんですか？」

しっかりとにらみを利かせ、平坦な声で問いかける。

それはこっちを振り向き俺は目を見開く。……あっちもそうだったけど。

「あ……、梓先輩！！！！！！？」

「市ヶ谷くん！？！？？」

俺たち二人の声は、そこらじゅうに響きわたった。

「すごく驚いたじゃないですか。人の家でなにしてるんですか？」

「こっちも驚いたわよって・・・人の家？ここって市ヶ谷君の家じゃないでしょ？」

はい？？？確かに表札は市ヶ谷じゃないし、ここでは市ヶ谷って名乗ってなかったけど。なんで昔のことを知ってる口で話す？あまりにもおかしい。

「このことをどうして知ってるんですか、泥棒さん？それに、俺は確かにここに住んでいたんで。」

「なんで知っているっていわれても・・・。私は泥棒じゃなくて、ここを掃除しに来たんだけど？」

ナンデスト！？

「じゃあなんでこの鍵もってるんですか？」

「それは・・・鍵をもらったのよ。お母さんがこの家の主人と知り合いで、私がこの子と知り合いだったからね。」

「じゃあとりあえず、警察へ突き出します。」

「なんで!？」

そりゃ不法侵入者がいたら突き出すでしょ。そんなくらいわかれ。でも一応家へともってくか。

「一応家の人についてからにしますね。」

そういつて俺は先輩の襟をつかみ、外へと連れ出した。

「離せて!」

「全く・・・、先輩が犯罪者になるとは・・・。で、家はどっちですか?」

「あっちだけど・・・。犯罪者じゃない!」

こんな会話を続けながら、俺は先輩の家にたどり着く。結構近場にあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・どうしたの?」

「・・・・・・・・なんで・・・・・・・・。」

結論から言うと、そこはいわゆる僕の充電所。

あゝちゃんの家だった。

どうして? あゝちゃんは引越したのか? そしてもう一つ、俺の頭に仮説が浮かぶ。可能性を一つずつ潰す。

「いつから此処にいますか?」

ついつい切迫した口調になる。空気が変わる。

「いつって・・・、生まれたときは此処にすんでたし、引越してないわよ?」

後もう一つ。データがそろいさえすれば解がわかる。

「じゃあ最後に一つ質問。梓先輩の名字は・・・「高梨」ですか?」

それを告げた瞬間、梓先輩は目を見開いた。言わなくてもわかる。

「なんで知ってるの!？」って思ってることだろう。

そして俺は、梓先輩の家へと乗り込んでみた。

「ちょ、ちよつと!」

なんか聞こえたけど・・・。

「おかえり〜ってなににきたのかしら? あなたは誰?」

その辺においてあった棒をつかみながら、俺に向ける。俺は両手をあげ反抗の意志がないことを示し、問いかける。

「高梨瑞穂さんですよ? 久しぶりです。俺は・・・、僕は、赤桐空です。覚えていますか?」

「!?!?!?」

カランカラン

驚いてる。棒落としちゃったし・・・。とりあえず約束を果たさない。あ〜ちゃんとの。

「あの・・・。」

「ええええええええええ、え〜と・・・、なに?」

「ちよつと梓先輩と話させてくれませんか?」

「いいけど・・・。なにする気?」

そんな怖い目でにらまなくてもいいのに。ぼくは好きであんなことをしたんじゃない。

「市ヶ谷くん？なにしてるの？」

後ろから声がかかる。後ろへと振り向き用件を告げる。

「ちょっと話があるんですけどいいですか？」

「いいけど……。」

瑞穂さんを追い出し、俺は梓先輩と向かい合う。

「久しぶりですね。梓先輩。」

「久しぶりって……、さっきもあったじゃない！」

「まあ、気付いたのがついさっきですし。僕の名前は赤桐空。覚えていますか？6年前のことを。約束のことを——。」

少しばかりの沈黙。俺と先輩は動かない。降着をうち破ったのは俺だった。

俺は寝っ転がる。梓先輩も引き寄せる。

「ちょ……、ちょっと！離してって！」

俺はその要求を聞かず、畳の上で目を閉じた。

「おやすみ……。」

僕がした約束。また一緒になにかをやろうって。指切りしたんだ。

そして俺は眠りについた。深い——安心できる眠りに。

梓side

誰かと思ったらあの空なの!?

赤桐空って・・・、あの子のことかぁ。大きくならなかったみたいね・・・。

そんなことを考えていると私は引き寄せられた。

「ちょ・・・、ちょっと離してって!」

もしかしてなにかされる!? どうしよ!

声を上げようとしたとき空はつぶやいた。弱々しい、懐かしい声を。

「おやすみ・・・。」

空が泣いている。私の前では決して泣かなかったのに・・・。

私の頬に液体が流れる。約束したよね。彼の小指と私の小指を絡ませて、私はつぶやきはじめる。

「指切った・・・。」

一人でやる指切り。これは私の罪。彼を笑顔に出来なかった・・・。
関係はないだろうけど空がつぶやいた。

「ありがとう・・・。」

私も疲れた・・・。今日こそは約束をしっかり守る。

掛け布団を持ってくる。今日はそこまで暑くない。

空にかけてあげて、その中に私も入る。男の子にしては華奢な体が体に当たる。

そこで目を閉じながらつぶやいた。

「おやすみ・・・空。」

そして私も眠りについた。

第二十二話：約束の指切り（後書き）

これにて第1章終幕。

つかれた〜でも楽しかった〜！

第二章は一章より短くなる予定ですあくまでも予定なので〜
更新ペースがしっかり守れていませんが今後も見に来てくださ〜い

登場人物紹介（前書き）

もしかしたら抜けている人もいるかも知れないのでいたら教えてください。

登場人物紹介

1年の住人

市ヶ谷（赤桐） 空

十五歳 男

身長155cm 体重47kg

備考

結構顔はいい方。童顔。

頭がよいが、決して天才タイプではない。

足は速い。過去に何かトラウマ持ち。

進藤 栄介

十五歳 男

身長177cm 体重65kg

備考

野球部のキャプテン。頭は平均並みだが、最近は野球にかまけて勉強していない。

いつもなにかの責任を負わされるような人。顔はいい部類に入る。

進藤 健介

十五歳 男

身長177cm 体重64kg

備考

野球部の副キャプテン。頭は栄介と違ってかなり良い。顔はいい部類に入る。

水口 明日香

十五歳 女

身長166cm 体重51kg
備考

いわゆる姉御さんみたいな感じ。

空と学級委員をやっているが、空がさぼり気味なのでちょっといら
いらしている。

川島 瞳

十五歳 女

身長151cm 体重45kg
備考

超消極的性格。つい、困っている人を見ると助けるようなお人好し。
空に微妙に恋心を持っている可能性あり。かわいい顔をしている。

泉みさき

身長157cm 体重49kg
備考

頭は学年内トップレベル。お嬢様風の話し方をするが、凶星をつか
れると弱い。

先輩方

霧月 さつき

十七歳 女

身長160cm 体重45kg
備考

結構社交的な性格。学校でも一番の美人と呼ばれている。

頭は赤点ぎりぎり。

女子サッカー部のフォワード。

斑鳩 リヨウ

十七歳 女

身長171cm 体重56kg

備考

女子バスケットボール部のレギュラー。情報屋で、学校一いろんな人の秘密を握っていると思われる。結構ずばら。

伊藤（高梨） 梓

十六歳 女

身長164cm 体重52kg

備考

女子サッカー部のディフェンダー。さっぱりしている。空と過去に会ったことがある。

校外の生徒たち

立松 閃

十五歳 男

身長172cm 体重68kg

備考

泰仙高校の投手。二軍のエース。

大門 和樹

十五歳 男

身長185cm 体重72kg

備考

泰仙高校の捕手。二軍の正捕手。口調が変。

市ヶ谷 花梨

十七歳 女

身長165cm 体重53kg

備考

国内有数の進学校に通っている。空の父方の従姉。
性格は普通ではない。結構美人。

大人たち

市ヶ谷 風矢

享年二十九歳（6年前） 男

身長169cm 体重64kg

備考

元プロ野球選手。『疾風』の異名を持ちそろそろスタメン定着の頃
だった。

おおらかな性格で、人気者。美香に殺害される。

市ヶ谷 美香

享年三十一歳（5年前） 女

身長147cm 体重55kg

備考

嫉妬深い性格。常に空に暴力をふるっていた。

風矢を殺害する。頭はいい。

市ヶ谷 雅弘

四十歳 男

身長172cm 体重72kg

備考

プロのスカウトマン。（下っ端）

花梨の父親で、唯一空を気にかけている大人の親族。

松山さん

三十一歳 男

身長190cm 体重80kg

備考

松山運送の社長。事情がある空を雇っている。

登場人物紹介（後書き）

ドカツ！バキッ！バシッ！

「「「勝手に個人情報公開するな！！！！！！！！」」」

「ぎゃあああああ！！！！！！！！」

ぼろぼろ・・・。

登場人物に殺されかけた作者のつもりの空き缶です。
結構疲れた・・・。ほかの小説読んでこよう・・・。
では！

「「「体重公開するなよ！！！！」」」

→女子軍団よりでした！

第二十三話：私は憂鬱（前書き）

とりあえず・・・、題名と中身が大してあっていないので・・・。
その辺は分かってください・・・。
では！逃げます！

第二十三話：私は憂鬱

第二十三話

「あゝあ。空君見に来てくれなかったなあ．．．。」

私は一言つぶやいた。せつかく2ゴール決めたって言うのに．．．。

「それにしても．．．、どうして空君はいないの？」

「私が知るか。」

いつの間にか後ろに来ていたリヨウがぶっきらぼうに答える。まったく．．．。でも．．．今日は憂鬱。

「そうは言っても．．．。心配じゃない？」

「そうかあ？」

髪の毛をすきながらリヨウが答える。適当．．．。そこで一つ思い出し、リヨウにたずねる。

「空君に謝ってくれた？」

そのことを聞いたとたんいきなり罰の悪そうな顔になる。．．．なにしたのよ。

「なんかねえ．．．、そのこと言った瞬間いっちーが走っていったのよ。なにかに怯えたような感じでさあ。」

なんで？謝ったら逃げた？意味がわからないじゃない！

「ねえねえ？今日空君の家に行ってみるわ。空君ともっと話したいし、もっと知りたいから。」

決意を固める。授業が始まりそうなので席へ戻ろうとする。

♪~~~~♪

着メロがなった。ケータイをのぞき込み、それがリョウからのメールということに気付く。

『そうそう、教えてほしいって言ってたわよね。いっちーのこと。だから書いておくわ。って言うってもほとんどないし。』

私は次のメールが来るまでの間にバイブモードに設定する。そうした瞬間メールが来た。

『まず、市ヶ谷空の父親が市ヶ谷風矢、母親が市ヶ谷美香。父親と母親はすでに他界。理由はまず父親。』

そこでメールがとぎれる。続きを受信する。そこにかかれていたことはものすごく驚くものだった。

『父親は6年前に母親に・・・市ヶ谷美香に殺されたらしい。それも、いっちーの目の前で。』

そこでメールがとぎれた。リョウのケータイが没収された。・・・これだけ・・・？

ちよっと不満。むかつくなあ！あの教師！普段は黙認しているくせに！！！！

授業が始まったから、そのことはもうそれっきりになって集中した。数学なんてわかんない!!!

「じゃあここ答えてください。え〜と・・・、じゃあ霧月さんで。」

「ほら霧月さん！」

も～～、わかんないよ!!

[illegible]

地獄だ……。あの数学は地獄だった……。なんであれがあのようになって……。なんていうか。

ふすふす・・・シュ。

脳内活動停止、直ちにバックアップ開始、処理完了。

「そんなことより部活にいかないとねえ……。」

「そうそう！んじゃあ私は先行ってるぞ。部活違うけど。」

そう、今は放課後。部活に行かなくてはいけない。私もため息をつきながら部活へと向かうことにした。

「めんどくさいなあ……。なんで今日だけそんな風に感じるんだろう？」

ダメじゃん、私。空君がいなくてこんなになるなんて。あいたいなあ……。

今日の練習はどうしようか・・・。

「ねえどうする？」

「さあ？アンタがこんなんじゃないし。やる気でないし。梓もないし。」

「梓もないの!？」

「はあ。」

身体を虚脱感が包む。なにもしたくないなあ。空君の家に見舞いでも行こうかな？

ついでに梓の家にも。どうせ今日は私たちの活動場所がないから、休みになるみたいだし。

よしっ、決めた！

「なんでそんなうれしそうな顔？なにかあったの？」

「今日はいいことはなかったわ！でもこれから面白くなるの。うふふ・・・」

心が幸せの感情に満たされる。――後で聞いた話では、このときの顔はものすごかったとか・・・。

もちろん今の私にはそんなことを気にする余裕はなく、スキップしながら学校を出て行った・・・かばん忘れた・・・。

さっさと取りに戻って、部活をサボって、空君の家に向かって歩き始めた。

駅へとつき、私は改札を通る。定期をピッと鳴らし、ホームで立っている。

電車へ乗り込む。空君となに話そうかな？たのしみ～～～！

私の頭にはもうそのことしかなかったらしい……。ダメじゃん私。ガタンゴトン。

電車にお決まりの音が聞こえてくる。なんか後ろではあはあ言ってる声が聞こえる。……。気持ち悪い！

私はこの車両から逃げ出す。ヤダ！追ってきてる！

そこで丁度降りる駅がきた。さっさと降りて走り出す。現役女子高生なめんなよ！

口調が変わってるんですけど……。

意外と痴漢は速く走ってくる。ばればれなの分かって、追いかけるなんて愚の骨頂。

確か空君の家にはつかい棒があったから、それで叩きのめす！
そう心に決め、走った。とにかく走った。でも痴漢も意外と足が速い。

やるわね……。現役サッカー部と互角なんて。なんか声が聞こえるな……。

「はあっ、はあっ。」

そろそろ息が切れてきた。やっぱりきついわね……。バッグ持ったままだと。

そうこうしているうちに空君の家へついた。そしてつかい棒を使いみぞおちへと決める！

どすっ！

「うげっ……。。」

「へ……。？」

痴漢だと思っていたものは知っている人影だった。

「・・・リヨウ・・・？なにやってるの？」

がらがら！

「・・・なにやってるんですか？霧月さん。」

あゝ！もうややこしくなってきた！

あのあとリヨウを家に運び込み、私たちは向かい合った。

「空君はどこですか？風邪って聞いたんですけど？」

「空は・・・と言ったかはいえない。ちよっと出かけている。風邪でもないし、調子が悪いわけでもないはずよ。」

ちつともわかんない。そして私は問いかけた。

「空君の前でお父さんが殺されたのは本当なんですか？」

「ええそうよ。あなたはちゃんと知っているみたいだしね。」

なんであつさりと答えられたのか・・・。空君は必死に隠そうとしていたみたいなのに。

じゃあお母さんは留置場か。

だから独りだったのね。かわいそう・・・。そんなことを考えていると、花梨さんが急に真剣な表情になった。

「霧月さん。あんたさあ、空に同情してないか？」

「同情ですか・・・？してませんけど・・・。」

嘘だ。なんで嘘をつく？

「そっか。ならいいけど・・・、同情なんてするなよ。決して。」

「なんでですか？」

「理由はいえない。それだけを頭においてくれればいいから。」

そういうと表情を元に戻した。彼女がどれだけ空君を大事に思っているか、それを見せられたような気がした。

「ほら！明日も学校あんだからさっさと帰ったほうがいいよ！空も明日からなら行くだろうし。」

「あ・・・、はい。」

追い出されてしまった。まあこんな時間だし仕方ないか。でも・・・、
、なんでいろいろと隠すんだろう・・・。

憂鬱だわ・・・。

あ、リヨウ忘れてきちゃった。

第二十三話：私は憂鬱（後書き）

えー・・・、すみません！

更新かなり遅れてます・・・。

全然ダメです・・・

G W中にできるだけ更新したいと思います！
では！

第二十四話：価値観のずれ

第二十四話

人には隠したいことはたくさんある。もちろんぼくもそうだ。

傷口をえぐるのはやめて！同情なんて……。どうせ誰にも分らない。だから、ぼくは心を閉ざした。

それより眠い……。おやすみ……。

ぴぴぴっ！ぴぴぴっ！

目覚ましの音が聞こえる。その音で俺は目を覚ます。はぁ……。昨日は大変だった……。梓先輩……。結局そう呼ぶことにした。いまさらあーちゃんなんて恥ずかしいし。

仲直り……。でいいのかな？とりあえず、少しずつもとの状態に戻っていくように努力する。二人でそう決めた。

ぼくが心を開かない限り、難しいけど……。

「少しずつ、一歩でもいいから進む……。かぁ。難しいこと言ってくれたもんだ。」

花梨が置手紙をしていった。内容は今俺が言ったとおり。ついでにおじさんも似たようなことと、

『いつでも待っているぞ！さっさとスカウトしたいしな！』

んな馬鹿な。俺がスカウトされるほどの選手なわけないだろう！なんで俺を誘うかな……。

テーブルの上にはなんかいろいろ書いてある紙があったし。

「先輩・・・、きたんかあゝ。話したくないな・・・。」

とりあえずがっこへ行こう。のんびりと支度をして外へ出る。

「ちーす！空！」

「・・・。。。。。」

ボタン！

扉を閉めた。そして恐る恐るもう一度あける。

「急に閉めんなよ！」

「・・・ちよつとびびったけどさあ。」

「黙れ、えいすけんすけ！」

「「つなげんな！」」

目の前にいたのは珍しく、栄介と健介だった。こいつら朝練ないのか？まあ、今年はどう野球部の夏は終わってるけどさあ。

「なんでここにいんだ？」

「おいおい・・・。この前もそうだったけどほんとに学校の行事忘れてんな・・・。」

「前置き長い。」

ぐっさあ！

栄介は地面に座り込んで、いじけた。そして健介に目で問うた。すぐに答えてくれて疑問が氷解する。

「期末テストの一週間前だ。忘れんなよ・・・。それと、お前は一

痛いところをついてくる。その通り、俺は推薦入学というやつで、学期ごとにテストで平均5番を維持しなければならない。だから次の期末は一位をとる必要がある。

「ああ、そうだな。じゃあこれからお前家に入り浸る。助っ人も呼ぶし。」

健介は、栄介の襟をつかみながら歩き出した。「ぐえ」って聞こえたけど気のせいだな。とりあえず・・・、いくか。

そして学校へと歩き出す。気分重いけど。

[illegible]

この言葉は学生にとっては口癖だろう。睡眠不足ってわけじゃないんだけど……。無理がたたったかな？

そう、このことで俺は気分が重い。なんか気まずいし。俺が一方的に持つてるだけではないはずだ。先輩も昨日うちに来た。って言うことは花梨から少なからず説明を受けた、つと言うことになる。だから・・・会いたくない。

「そんなこといってもさ！無駄無駄！お前は会わないとダメだよ。お前は、過去の鎖を断ち切らないと。」

「んなこと言われなくても分かってるよ。はぁ……。」

栄介は軽々言うけどなぁ。お前が身軽になったからって、こっちは身軽なわけじゃないんだけどな……。一番理解しているやつに言われると、ちょっと気分が重い。わかってんだけどなぁ。

「理解はできてる。……だけど心が認めたくない、って感じなんだよなぁ。」

「ま、そんなこともある。結局最後は自分の力で断ち切らないといけないんだ。いくら失敗しても、立ち上がって、過去から逃げない。」

久々に栄介が真面目モードになる。このときのこいつの言葉は、重い。俺よりはましな人生だったけど、それでもこいつは絶望を見たことがある。

だから、俺はこいつを信用してる。……聞く価値があるかどうかは別だけど。

とりあえず、俺はどうするか？それが問題だ……。微妙にシェイクスピア……。

さつきside

今は昼休み。私は彼になんていえばいい？

廊下であつたときなんか露骨に避けられていたし。もうやだ……。

「ねえ、リョウ。どうすればいいと思う？」

「前から思ってたけどその脈絡ない話やメロ。」

「ゴメンゴメン。なんかさあ、空君に避けられちゃって。」

私はどうすればいいの？ 軽く問うたつもり。だけどなんかリョウが真剣になって答えた。

「無理やり聞き出すか。特にそんなことに対してのトラウマは、ないみたいだからな。」

そう！ 無理やりは良くないけど、やっぱそうやるべきよね！ ふふふ・・・

「ふふふ・・・。」

「ごめん、あんたがなに考えてるか時々理解できないや。」

あきれたようなリョウの声が、私の耳を通り脳へと伝わった。・・・けれどそれを私の脳は、ただの音としか認識しなかった。

とりあえず私は放課後、昇降口で待ち伏せした。もうテスト週間、部活はない。だからみんな集まってくる。

いた！

私はこっそり後ろへと周り、後をつける。話してる内容が聞こえた。

「じゃあ花梨呼ぶか。どうせあいつ暇だし。」

「・・・そっか。栄介にほとんどとられたりするもんな。あいつは後で個別で見てもらおう。」

「そうすっか！」

「俺のことそんな風にいうな〜!!!」

・・・面白い。ちょっと感性変かもしれないけど。

あ、後ろ振り向いた。ちょっとその顔はないんじゃないの？ 微妙に

傷つくわよ？

「せ、先輩……。」

「はい、ちょっときなさい。」

そうやって校舎裏に連れて行った。周りの生徒の目は、気にしないことにしよう。

校舎裏に行くと、空君はこちらに顔を向ける。微妙に顔が赤い。そんなことは気にせず一気に本題へと入る。

「なんで今日避けたのかしら？」

空君は答えない。目をそらして「何のこと？」って言うオーラを出している。ばればれなんだけどね……。

「とりあえず分かりきってるから逃げないで答えなさい。」

「逃げるのかあ……。やっぱり難しいもんですね。言ってもいいですけど……。」

「今すぐ言いなさい！」

彼はびくつと肩を揺らし、こちらを見る。なんか無表情ね。

「やっぱ言いません。つと言おうかと思いました。……けど、少しずつ進まないといけないんで、ちょっと努力してみます……。」

なんか最後のほうで声がちっちゃくなったし。それさえなければかっこいいんだけどね。

「先輩は父さんのことは知ってるんですね？」

「ええ。」

「俺はですね、一つ考えていたことがあるんですよ。」

そういつて一回言葉を切る。ものすごくためらっている感じね。

「同情するのは、愚者の行い。次を考えるのは賢者の行い、って。所詮他人、誰にも人のことは分からない。」

それがどう関係するの？まったく分けがわからない。

「まったくわけのわかんないって顔してますね。俺にとっては先輩の行動が「愚者の行い」に見えたんですよ。俺は愚者は嫌いだから避けていたんです。まあ、決心がついてなかっただけ、って言われればそれまでかもしれません。」

まったく分からなかった。空君はどれだけの秘密を抱えているのだろうか？

私は・・・、もっと彼のことが知りたい・・・！

第二十四話：価値観のずれ（後書き）

全然ダメですね・・・。

今ぼろぼろです。

もっと精進します。

第二十五話…テスト勉強編

第二十五話

「やっぱり気分重い……。」

あの後俺はさっさと先輩と別れた。なんか気まずい雰囲気だったし、先輩にこれ以上聞かれるのが怖かったから。

「今日は勉強するか。それにしても……このメアドは俺にどうしろと？」

メルアドが書かれた紙を、先輩から渡された。おれPCも持ってないし、使い道がないんだけど。

「ケータイほしいけどな。生命保険の金もあるし、それで生活費代用するか。」

のんびりと歩く。駅への道は一人だ。確かにケータイはほしい。花梨にいつでも助っ人頼めるし。

駅に公衆電話があるからそこで電話すっか。後で花梨にも相談するか。

駅へついた。公衆電話を探す。すぐ見つかった。

金を投入して花梨の家の電話番号をプッシュする。

トゥルルル

プツッ

「はい？もしもし。」

俺は軽く舌打ちをする。なんでこいつが出てくる。女の声を取り繕って俺は声を出した。

「すいません。花梨とクラスメートのものですけど、花梨いますか？」

「あ、はいはい。代わりまゐす。」

ふうっ。なんとかごまかせた。そして保留音が鳴る。

「はい代わりました。誰ですか？」

「あゝ俺だ花梨。空だけど。」

「って空……！こっちに電話しないでケータイにしてよ！」

あきれた……。こいつ、自分のことを棚に上げやがって。

「俺さ、お前に電話番号教えてもらったことないんだけど。」

「あれ？そうだったけ。で、本題は？」

「今日助っ人きてくんない？こっちさテスト期間で。」

あっちもテスト期間かな？なら大丈夫だと思うけど。

「あのねえ、こっちもテスト期間だし勉強しないといけないの！別に暇だし面白そうだから行くけど。夜に行くわね。じゃあね〜」

「じやな」

そして電話を切った。家帰ったら今度は松山さんのところに電話しないと。

定期を取り出し、俺は改札を通り抜けた。

[illegible]

——
「ええ、すみません。今日から一週間、俺バイトやすませてもらいます……。すみません。終わったら二週間休みなしで働くんで、すみませんでした！」

そういつて電話を切る。返事も聞かないできつたから起こってるかなあ？まあ今回は俺の命にもかかわるからよろしくということだ。

「さてと、待つか……。」

「空〜！何教えればいいの〜？」

来るの速すぎっ！電話してから大して時間たってないのに、どうしてもうきてるんだよ！！！！おかしいだろ！
そんな心中は中においておかないと。

「んじゃこれからあいつらの家行くから。勉強道具持ったからな。じゃあ行くぞ！」

「まってよ〜。私も自分の勉強しててもいいでしょ〜？」

「そりゃねえ。ここの本いるんなら、何冊か持ってたってもいいけど？」

「じゃあそうさせてもらおうわ〜。んじゃあ行きましょう。ところで空。」

なんだ？いきなり真剣な顔をして……。どうして？

「なんだ？そんなになんかあったか？」

じーっと待つ。そこで疑問に思ったことがあったから、話に割り込んだ。

「そーいや、花梨の母さんになんか言われなかった？俺が話したのばれてないよな。」

「ええ。大丈夫よ。疑ってる様子はなかったみたいだし。ところで。」

「また真剣な顔に。なんだ？？」

「どこの家に行くの？」

「・・・・・・・・・・。」

「ずるう！」

「言ってなかったつけ。」

「言ってなかった？」

「言っていない！予想はしてあるけど！」

「栄介と健介の家。すぐそこだし。」

「へー。言ってなかったんだ。納得納得。」

「どこにあるの？」

「そんな話をしながら玄関を出る。そして花梨は家の裏のほうへ走っていく。」

「おーい！どこ行くんだー！」

「自転車取りに。だって結構時間かかるんじゃないの？」

「一分もかからん。隣の家はそんな遠くないよ。」

「すぐそこだからさっさと行くよ。」

「ほんとにー？」

それを見無視して無言で歩く。花梨も後ろからついてきた。歩くこと約二十秒。

「ついたけど？」



花梨の表情は啞然とした感じに。面白いな・・・。

「じゃあ入るから。」

チャイムを鳴らさずに普通に入っていた。

[illegible]

「おじやましーす」

「他人礼儀はいらないっての。」

とりあえず、勉強を始める。作者がただいま中学三年のため、勉強内容は理解できません。

「だから！ここを代入するんだよ。」

「お！なるほど。サンキュー花梨。」

そこで花梨がなにやら取り出した。

「じゃあこれから小テストするので、点数が一番悪かった人は晩御飯を作りなさい。」

「マジかよ!!!」

叫んだのは栄介一人だけ。俺と健介は絶対勝つ自信があるから、何も言わなかったけど。

「じゃあ十点満点だから。」

そういいながら配っていく。

「五分間ね。じゃあスタート。」

俺たちはいっせいに問題を解き始めた。とき始めたたん俺は怒鳴る。

「なんだよこの問題! 明らかにむずいじゃないか!!!」

「そりゃ〜ね〜、あんた達と栄介が勝負になるわけないじゃない。」

正論を返され、がつくりと問題を解き始めた。結構複雑だ・・・。

「はいはい、空! 7点。健介8点、栄介・・・、4点。」

栄介の問題を覗きこむ。そして啞然とする。どうしてこれで、点数が四点なんだ????

「さてさて栄介君。ご飯を作りなさい。」

「え〜! マジかよ・・・。」

俺達は笑ってその風景を見ている。すると、花梨がこちらに目を向けてきた。

「空!!! あんたこれじゃ学年トップ取れないじゃないの!!!! さっさと勉強するわよ!!!!」

「はいいいい!!」

こ、怖いよ……。アイコンタクトで健介に助けを求める。

『ちょっとなんか言ってくれ。』

『無理。怖いし。』

『この薄情者!!』

『はいはい。』

「頑張ってね。」

なんか生暖かい目で見られた……。最後は言葉に出されたし。もういやだ!!!!!!

身体はぼろぼろ。つと言うのは嘘だけど、脳がオーバーヒートした。そして晩御飯を食べるためにテーブルへ行った。

「うわ! なんだよこれにおい。」

ものすごくなにかが焦げたようなにおいがする。ハンバーグを作ると言ってたのに、どうやったらこんなにおいがするんだ?

「わりい空。焦がしちゃった。」

「どうやったらこんな焦がし方になるの?」

中身を見て俺はつぶやいた。炭。形容するならそれがいい。

「もう変われ! 俺がやる!」

そして俺は料理を作り始めた。さっさと作って、運ばせる。簡単な野菜炒めにご飯に味噌汁。結構好評だった。

栄介に片づけをさせて、勉強し始めたところで睡魔が襲う。ね・・・むい・・・。

パタンと寝てしまった。

おきたときは、花梨が置手紙をしていた。

『このプリント全部終わらせなさいよ!』
「・・・、マジで?」

約二百枚あるよ・・・。質より量か?

泣く泣く終わらせた。

そのかいあって、テストでは一位だった。健介と同点だったけど、別にいいだろ。

第二十五話：テスト勉強編（後書き）

今回は短いです。すいません！作者もテスト勉強中で更新遅れます！では

第二十六話：二人の別れ

第二十六話

「まちなさーい！！！」

「いやだ！！！」

俺は後ろのなにかから逃げる。・・・なにかって言ってもなにかは分かってるけど。あのお嬢様の口調の、実際は大してお金持ちじゃない人。この前告白してきたあいつ。

泉みさき。

なんでここまで情報を持っているかは、極秘で。

って言うよりなんで俺は逃げてんだ？俺ってなんで追われてんの？なんか疚しいことをしたっけ・・・。

「つかまえたわ！」

「だからなに・・・。」

そうだ。思い出した！なんか目が怖かったんだ。そういえば昼飯・・・。食い忘れてきた・・・。絶対あいつら食ったな。

「はあー。」

「私と会って開口一番「はあー」ってのはなんですか！」

「・・・で、なんのよう？」

こんな普通の時間が、俺にとっての幸せの時間。俺が昔壊したこと、いやな思いをほんの少しだけ忘れられる。

それでいいのか・・・？

・・・。何だ、今の声？
ま、いっか。

心に響いた声を無視した。

やっぱ昼飯は食われていた。ごちそーさま！っていう紙とともに、
空の弁当箱があった。

とりあえずおごらせた。泣いていたけど気にしない！

今日はバイトへ行かないで、先輩と帰ることにした。

サッカー部の練習を見る。あくちゃんと呼ぶのはもう恥ずかしいから、梓と呼ぶことにした。・・・、まだなれてないから先輩と言ったりしてるけど。

その梓が・・・、やっぱ言いづらい。梓先輩が攻撃を防いでクリアした。そのボールを受け取り霧月先輩が走る。数人かわし、シュートを打った。

「うまいなあ・・・。」

ハイタッチを交わす二人を見ながらつぶやいた。笑顔が見れる。それだけで、少しうれしい。

お前は・・・幸せでいいのか？

また聞こえた。なに？この声。俺の心をざくざくえぐる。
気にしたらダメだ。ココロが壊れる・・・。

10分後、練習が終わった。先輩を待つ。ちょっと暇だ。本を取り出し読み始めた。

ちょっとグロイシーンにかち合う。心の奥の「なにか」が蠢く。
そして少し、記憶がよみがえる。

光るものの柄を持った・・・俺。赤にまみれている、銀。

そう、だ。俺は・・・、人殺しだ。

それしか思い出せない。でも、その通りなんだ。

「はははははっ・・・。」

うつろな笑い声だなぁ。自分でもそう思えるほどの声だった。

「わらえねーよ。マジ！」

そうだよ。俺は人殺しだ。今までの声もそうだ。全て、俺の後ろめたさが生み出した、俺の心だ。

俺は、このままでいいのか？

再びその問いを、ココロへと問いかける。自分の心へと。

・・・いいわけない。ただでさえ、自分の親を見捨てた俺だ。そんな俺が、ただ一人、幸せになっていいわけがない。

先輩が、俺の目の前にやってきた。梓先輩も連れて。

「なんで梓先輩も？」

「えーと・・・、最近空君と仲良くなったからその理由の問い詰めと、脅し。」

怖いです。先輩。梓もびびってますけど？

「話します！話しますから！だから止めてください！」

「あらそう？」

あっさり梓先輩の肩を離してくれた。ほっとする。
そして説明を始めた。

「え〜とですね・・・、俺と梓先輩は幼馴染なんですよ・・・。最近それに気づいたんですけどね。だから急に仲良くなったように見えるんですよ。」

「本当に〜？なんで今まで気づかなかったのよ！」

その辺の詮索はしてほしくないと思う。だから俺は口をつぐむ。いつの間にか別れるところまできた。

「じゃあ梓先輩さよなら〜！」

「じゃ〜ね〜空！」

そして俺は振り返る。そして口を開く。

「大事な話があるんですけど、いいですか？」

そしてちょっと顔が引きつる。なんか思いつきり恨めしい視線でみてるんですけど。

「ど・・・、どうしたんですか？」

「別に！！怒ってない！私もいうことあるから！」

誰もそんなこと言ってない・・・。言うことってなんだ？歩いて公園へと向かう。一緒にいられるリミットは、後五分。

いやだなあ・・・。どうして俺なんだろう？

どうして・・・。

いやだよ……。まだ……。一緒にいたい……。

歩いて公園へと歩いていく。木が少ない、ただの公園。子供が少しキャッチボールをするだけの空間。

そして、目の前にあるベンチに二人で座った。心臓の音がバクバク鳴っているのが聞こえるくらい緊張する。

これからつく嘘は、そんなものだから。

口を開きかけた俺を制するように、先輩が手を上げた。

「どうしたんですか？」

「えーっと……。先に言ってもいいわよね？」

「もちろん！ いいですよ？」

何か大事な話があるっていったな。その話が何にせよ、俺にはもう関係ない……。そのことが悲しくなるなんて思ってもいなかった。ほんの軽いはずだったけど……。

「空君。なんか無理してない？」

「はい？」

無理？ そんなもの、ずっと昔からしている。記憶に封印をかけて、暮らし始めたあのときから。ずっと。

「あはは、だいじょうぶですよ？」

「そう……。？ じゃあ本題だけど今度試合あるから見に来てくれな
い？」

「いいですよ？」

ここでも嘘を重ねる。本当にダメな人間だなあ俺って。ぼくって。

「じゃあ俺からも、大切なことを。」
「なに？」

きらきらしてる目。ほんとにきれいで、純粹。俺もこんな目で生きられたらよかったのに。
そして口から紡ぎだす。残酷で、容赦のない一言を。

「別れてくれませんか？」
「・・・え・・・？」

顔は無表情で、なんとか耐え切る。でも、きつい。あるときよりも自分の意思でやっている分、余計に。

「何だよ！！！！なんで！！！！」

「強いていうなら・・・、なんとなくでしょうか？」

嘘をつくほうがきつい。うそつきにはなりたくないな・・・。

「そんな・・・。」

先輩の顔を見ることができない。つらいのは俺より先輩のはずだ。
なんで俺が逃げるんだ！？ふざけんな！逃げんなよ！ちゃんと向き合え！

そして、俺はしっかりと、先輩の顔を凝視した。

「—————！」

泣いている。両目から一筋、涙が流れている。ごめんなさい・・・。
俺のせいで・・・。

パーン！

「バカッ！だいつ嫌い！」

先輩は張り手を一発かまして俺の前から走ってなくなった。――
――この方が良かったんだ。先輩にとって。こうでもしなかったら・
・先輩はつらいだろうなあ。

俺は、・・・もう無理。

――俺はこの瞬間から、しっかりと思考するのを止めた。

さつきside

なんで・・・？おかしいよ！あんな辛そうな目をしているのに・・・
、なんで嘘をついたの？？？

立ち止まって、空を見上げる。青いのに、青くない・・・。空は・
・、晴れない。

いやだよ・・・。

どうしてよ・・・。

別れたくない。まだ、一緒にいたい・・・！どうすればいいの・・・
？

私は・・・、どうすればいい・・・？誰か教えてよ・・・！

ふらふらと歩く。そして目の前にはリヨウの家があった。

リヨウなら教えてくれる・・・。

その思いを胸に、私はチャイムを鳴らした。

第二十六話：二人の別れ（後書き）

すいません……。現在受験モードで勉強を結構やっています。なので書く時間が圧倒的に少ないです。一月に一回くらいしか更新できないかもしれないので……。

第二十七話：心の欠片

第二十七話

さつきside

ピンポーン

チャイムを鳴らし私は待った。でも待っていると空君のこと思い出してしまう……。なんで空君はあんなこといったの……。？結局はそこに行き着く。

がちやり

ドアが開いた音がして目の前にぼさぼさの髪をしたリョウが現れた。頑張って表情を隠しているけどねぇ……。正直言って自分で「寝起きです」って主張している顔だけど……。

「リョウ、髪ぼさぼさよ？」

「え！ほんと！？すぐ直す！あがってて！」

そう言うとりョウはすぐにどたばたと洗面所へ行った。

私……。きつい……。でも、氣遣ってほしいわけじゃない……。話を聞いて……！

リョウがどたばたと戻ってきた。髪型は元に戻り首の後ろでくくっている。いつもの調子に。

「んで、どうしたの？その暗い顔は。」

「やっぱ暗く見える……。？はぁあ。」

天を仰ぐ。見えたのは白色の壁紙。今の私の心は空虚。あんまり考
えたくないなあ・・・。

「なにかあったの？それも重大なこと。」

リョウが真剣な口調になる。空気がピンと張った音が聞こえた感じ
がした。

口を開く。あったことを告げるために。

「あのね・・・、さっき空君に「別れて下さい。」って言われたの
・・・。」

それを聞いてリョウの表情が変わった。驚きの表情となり、怒りの
表情へと変わる。

その変化はごくわずかなものだったが、私の目にはしっかりと分か
るくらいはっきりとした変化だった。

そして、最後は嫌悪の表情になり、表情は固定された。そしてリョ
ウが口を開いた。

「話してみな？何でも聞いてあげるから。」

私の気持ちは軽くなった。言葉一つで人を変えることもあるって実
感した。

そしてためていた感情を一気に吐き出す。

「空君のバカァー！！！！」

「いきなりそれ！？」

きょとんとした顔で振り返る。なんで突っ込まれたの？
またいろいろな感情があふれ出てくる。

「どうして別れるなんていったの！！！」

「だからなんでハイテンション！？」

またもや突っ込まれる。もう見栄を張る気力もない。

涙が、ぽろぽろ二つの目から流れ落ちる。少し、泣き止むのを待った。

「なんかね、大事な話があるって言われて公園に行ったの。そしたらなんかすごく無理しているように見えて。」

そこできる。息を吸った。

「そしたらね、いきなり別れてくださいって言われたの。どうして？なんでそこまで無理して言ったの？教えてよ・・・！」

「甘ったれんな！」

パチイン！

いきなりリヨウがきれた。私の頬にびんたする。そのことを理解するのに数秒。どうしてはたかれたの？

リヨウはその茫然自失の間に、息を整えている。

「どうして・・・？」

「アンタは自分勝手か！？いっちーが無理しているって分かっているんでしょ！？なんで救わない！」

「無理しているかはどうかは分からないの！！！！そんなの無理ですよ！！」

気がついたら息が荒くなっていた。なんとか押さえようと努力する。

「まあ・・・、それもそうだけだね。」

「そうでしょ？　そうなの！」

無理やりその意見を通そうとしているのが、自分でも分かる。私はいつからこんな嫌なやつになっちゃったの？

「まあいいや。とりあえず調べてみたこと教えるけど。」

そう。これが聞きたかった。私にどうしてあんな態度をとったか、それが分かる手がかりになるかもしれない。

「父親のことは言ったとおり、それ以外に何もつかめなかった。それと母親のこと。」

いったん間を空けて、私を見つめる。

「母親は一回脱獄したらしい。それで、もう死亡届が出されている。」

「嘘！・・・そんな・・・。」

ここでリョウが推論だけど、と付け加えて続きを言う。

「おそらく死刑にされたのだと思う。違う可能性もあるけどね。」

何もいえなかった。口を開いても、脳が言葉を理解しない。理解したくない！

「その話が本当なら、空君はどれだけひどい人生を送ってたの・・・？」

[illegible]

「起きろ!!!」

そういいながら俺は起き上がった。正直俺は朝に弱い。いくら直そうとしても直らない・・・。

「うーい。分かったって。」

朝だからボケボケで、湯飲みを持ち上げる。

「お前馬鹿だろ……。つていままさら言うまでもないか……。」

この、いつも通りの日常は唐突に壊れた。

間抜けなチャイムが鳴り、健介がでる。

なにを話しているかは聞こえない。ただ少しずつ、健介の表情が

こわばる。

「わかった。今日はおまえは休め。家にいろ。」

そして健介が話すのをやめた。こつちを振り向き口を開く。

「空がやばい。」

「・・・！なにがあったんだ？」

「そこまでは・・・。だから俺がおまえ今日休むぞ。でないと・・・、あいつが壊れる。」

そこまで重傷か！気づいたら声を発していた。俺が休む！と。

「そっか。じゃあ今日は俺が行くから。学校で色々聞いてくる。」

「了解した。じゃあ勉強を教えてもらうか！」

スコーン！

そんな音がして頭に痛みが走る。

「はいはい、分かってますよ・・・。」

「さっさとしろ！ったく・・・、これじゃどっちが兄だかわからねえよ・・・。」

だいぶひどいな・・・。まあいいや！

そして、俺は空の家に向かった。たった十秒だけど。

勝手にドアを開けて入った。そこには目がうつろな、まったく考えていない人形のようなものがいた。

でも、・・・俺には、なにもできない・・・。単なる傍観者でしかありえなかった俺には。

いつも、それだから争いごとにはかかわらない。だから楽。

「今回ばかりはそれを呪うよ……。」

そう、小さくつぶやいた。その声は、誰にも届かない。

空 side

俺は何を求めている？

君はぼくを求めている。

君は誰だ？

ぼくは君。でも君はぼくじゃない。だからこそぼくを求める。

意味が分からない。何を望む？俺の望みは、……なんなんだ？

「「どうすればいい……？」」

ココロの声が重なった。俺の、ぼくの、心の中では答えは出ていない。

何年も前から、ずっと。

第二十七話：心の欠片（後書き）

まだまだ遅れます
すいません・・・

第二十八話：学校なんて・・・

第二十八話

健介 side

普段通りに学校へと歩く。いつもと違うのは栄介と空がいないことだけ。

「おっはよう！双子弟！」

「・・・その名称で呼ぶな。」

現れたのは水口。とっても変わっているやつ。

「双子兄とあいつはどうしたんだ？一緒に登校しないのか？」

「なあ一つお願いがあるんだが。」

一回とめてからもう一度言う。

「双子何とかって止める。二人で一つに見られるのは好きじゃない。それと、空と栄介なら休みだが？」

「へーあの馬鹿が休みねー。珍しいこともあったもんだ。で、なんで休み？」

「精神的不調。それ以外に言うことはない。」

核心に踏み込むな。うざいだけだ。お前にあいつの聖域に入る権利はないんだよ。・・・今は、誰も入れないんだから。

「な、なんで市ヶ谷君が休みなんですかあ？」

「えーと川島さん？で、あってるよね？」

「忘れるなんてひどいです！なんで市ヶ谷君が休みなの？」

こっちを見上げてくる目。つくづく平和しか知らない目だと思う。
思い込みでは判断できないけどな。

「あいつは精神的不調で休みだって。・・・なんだそれ？」

言うわけないだろ・・・。あんな状態の空なんか、誰にも言えない。

「まあ、訳ありってことで納得してくれればいいよ？」

「本当か？」

水口が、こちらを鋭い目で見やる。なんでだ？

「なぜそう思う？」

「・・・進藤にしてはしゃべりすぎ。なにかおかしいと考えるほうが自然だろ？」

まあ・・・、その通りだな。よく俺の事を見ている事に驚いた。そこまで気付いているやつは、滅多にいないってのに。

「あんた・・・、いや、あんた達か・・・。あんた達は自分達以外に線を引いてる。市ヶ谷とアンタたち兄弟で。悪かったわ。後でちよつと話させてくれない？」

俺の表情がきつくなったのだろう。空気の読み方が上手いな。俺は素直に感心した。

授業が始まる。あいつと昨日関わったやつを調べていく。やはりと言うべきか、霧月さつきがうかんできた。

適当に授業を受け流し終了の鐘が鳴る。三年の教室に行こうとした

とき、あいつに呼び出しを食らった。・・・覚えてやがったか。

「ちょっと来なさい！」

「・・・分かった。」

階段の踊り場。そこであいつは立ち止まった。水口がこっちを振り向いてしゃべり始める。今回ばかりは聞いてやるか。

「あんた達、昔なにかあった？」

「・・・別に、何でもいいだろ。話はそれだけか？」

はらわたが煮えくり返るような感じ。なんで知りたがる？

「ちよつとあんたの事を知りたかっただけ。それだけよ。もういいわ。」

あっさりしすぎじゃないのか？ いったい、あいつは何がしたかったんだろう？

首をひねっている間に、チャイムが鳴ってしまった。急いで教室へと戻った。

退屈な授業ではなく、体育と言う非常にのんびりできる時間を使い休養をとる。こんどこそ、あの三年のところへいく。

俺は歩き始めた。

さつきside

私は一日中上の空だったと思う。

空君の事を考えてばかり。私の中で、彼の存在がいかに大きいかを思い知らされるような感じ。

「はあ。」

「最近ずっとため息ついてるわね。しわ増えるわよ？」

ぱっ！顔を覆う。しわが増えたら大変！今日はしっかりお手入れしようっと……。

「ええ。その通りね。」

ああ、上の空……。

空君は学校に来ていない。なんでだろう？お見舞いに行こうかな……？

いろいろ彼の事を考える。絶対重症だ。リョウに今の脳を見られたら、ものすごい事をいわれそうな気がする。

「霧月先輩はいますか？」

とげを持った声。それが私を呼びにきた。

「えーと……、なにか用？」

「ええ。とても大事な用なので、屋上に来てくれませんか？」

なんかすごいとげを持ってる。しかも嫉妬の視線でじーっと見られてるし。顔いいけどそんなに見ることないのに。

「分かったわ。じゃあ行きましょう。」

微妙な腹の探りあい……、をしてると思う。

あっちはすごく真剣な表情。私は……、どんな表情？

「それで、空になにをしたんだ？」

確信的に問いかけてくる。疑問が頭をもたげる。

「空君になにがあったの？」

「ふざけんなよ。お前あいつに拒絶の言葉言っただろ。」

——だいつ嫌い！——

あの言葉を思い出す。心をえぐるような言葉を言ったこと。それは確かに悪いと思う。

「でも、なんでそのことを気にするの？」

「言っただな？」

「・・・言っただよ。」

望んだ答えは返ってこない。かわりに返ってきたのは、痛みと、一つの音。

バチーン！！！！

頬がジンジンする。思いっきりはたかれたって気付いたのは、少したってからだった。

「はぁ、はぁ・・・。」

私は呆然としながら、彼を見ている。のどから絞り出したような声で、彼は叫んだ。

「アンタがそんなんだから！ふざけんなよ！！！」

なにが言いたいのか、いつも要領のいい彼らしくない。

「——っなにすんの！っ・・・」

胸倉をつかまれる。ものすごく手馴れているような感じできた。

「なにすんのじゃないだろ！お前のせいであいつは・・・！」

急に冷めたような顔になる。そして謝ってきた。

「悪かった。いきなり取り乱したりして。」

なんか少し冷静になったよう。でも、なんかおかしい。空君の事で切れるんなら、どうしてもう冷静になったのだろう？

その事を問いかけようとしたときに、彼のほうが、先に口を開いた。

「もう、空に近づくな。」

——絶望の一言。私に見える景色が暗くなる。

「・・・なんで・・・！！！！何だよ！」

それしか、叫ぶ事ができなかった。

嫌だ・・・！そんなの！

「もう、あんたには関係のない事だ。」

「それでも！なにがあったの！？なんかあったら助けたいじゃない！」

これが、私の偽らざる本心だ。向こうは、ため息をついて言った。

「助けたい？人は、人では救えない。せいぜい補助ができるくらい

だ。人は自分で立ち直るしかない。」

「そんなことない！」

声が届かない。届いているのに。すると彼は、ケータイを取り出して話し始めた。

「栄介、ちょっと相談。・・・」

その後はなにを言っているか聞こえない。嫌だ。その思いが胸を支配する。

ケータイを奪い取って栄介君にも伝えたい・・・！私の想い！

「ほい、ケータイ。ちょっと栄介と相談したから、話してもいいよ。」

「・・・????」

心を見透かしたようなタイミング。啞然としながらも、彼からの電話を受け取って耳に当てる。彼に聞こえないよう後ろを向く。

「・・・。」

「・・・。」

無言が続く。なにから話せばいいのだろうか？
分からないけど、私は私の想いを伝える事にした。

「彼に会わせて！空君に会いたい！」

上手く言葉にまとめられない。言いたい事はここにあるのに。なんでもまとめられないの？

「丁度良かった。俺もその提案をしようと思ってたんです。健介が言い始めたことだけど。」

後ろをばっ！と振り返る。が、誰もいなかった……。行動はやつ！

「じゃあ行くわ。今日これから。」

「これから!？」

返事を返さず電話を切り、走り出した。
学校なんてサボってしまえ！

第二十八話：学校なんて・・・（後書き）

。最近はぐたぐたです。俺はずっと勉強、頭がおかしくなりそう・・・

更新さらに後れると思うので・・・
すいません

第二十九話：間抜けな人の、光の声

第二十九話

さっさと行こうと思い、正門の外まで走ってから気付いた。

「・・・バッグ忘れた。」

悩む。取りに帰るべきかそのまま行くか。・・・悩みどころね。

この悩んでる時間のせいで遅くなってるって気付いたのは、もう少し後。

5分ほど悩んでから決めた。

元の方向に走り出す。さっさとバッグを取って、行こう！

今は授業中。そんなときにドアを開けたらどうなるか、理解できる。

そんな事は関係ない！邪魔する人は・・・、どうしょ？

くだらない事を考えてその思考を振り払う。

走って走る。その事しか考えない。

ガタンっ！

「失礼します！」

「え・・・？ちょっと！さつき！」

「なにをやってるんですか！霧月さん！さっさと・・・。」

そんな話は聞かない。私はバッグをとって走り出す。

「リョウ！後よろしく！失礼しました！」

私はさっさと教室を出た。

リョウが後ろでつぶやいたのが聞こえた。

「――ま、頑張ってきなよ。」

ただ、ひたすら走った。息が切れる。でも、そんなの気にしてられない。私の限界速度で走る。

持久走の時よりも、サッカーの試合の全力よりも、全速力で走る。

「はあっ、はあっ。」

完全に息が乱れた。赤信号だ。・・・邪魔だなあ。撥ねられるのは嫌だ。だけど、急ぎたい。

微妙な葛藤に、心が支配される。

――そんなことやってるうちに青になった。

走って、もう体力がなくなりそうなときに、駅が見えた。

最後の力で走りきる。かばんからカード入れを出し、当てる。さっさと通って、ホームへ駆け上がる。

・・・暑い。体が火照る。すぐそこに自販機がないか探すが、見つからない。

「はあっ、はあっ。疲れた……。暑い……。」

早く来て！早く！

待ちきれない。

その気持ちで支配されかかったとき、電車が入ってきた。乗って、席が空いているから座る。

この時間の学生服は珍しい。でも見てこられるのは嫌だ。

「はあく。」

少しぼーっとしないと持たないのに。気持ちがり詰めてしまう。降りるべき駅がきた。止まる前に立ち上がって、ドアの前まで歩く。景色が移動する。

ドアが開いて、また走り出した。

なんで、私はこんなに空君が好きなのに、大好きなのに、あんなひどい事を言ってしまったの？

その問いに答えるものはない。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

もう、どこをどう走ったかを覚えられないほど、私は全力で走った。足がつれる。情けない……。たった少しを走るだけに、どうしてこんなに体力が減ってしまうのだろう。

もう景色は、ゆっくりとしか動かない。景色を追っていると、一つ、大きいものが見えてきた。

だいぶ、見覚えのある、大きな木造建築。

脳に酸素がいけないせいで、それが何かわからない。

動悸が治まってくると、やっと何かがわかった。

「空君の・・・家・・・。」

やっとついた・・・。

ふらふらと歩いて、インターフォンのところで立ち止まる。

チャイムを鳴らし、返事も聞かずに歩いていく。

ドアが開いた。

「こんにちわ、霧月先輩。」

そこには明らかに隠し切れない敵意と、悲しみと、悔しさが浮かんでいた。

「ええ、・・・こんにちわ。」

なぜそんな表情が浮かんでいるのだろう？

「では来て下さい。俺じゃあ、無理なんだ・・・！空を頼む。」
「え！ちよつと栄介君！？」

その言葉だけを言って、栄介君はいなくなってしまった。

「いったいなにが起きているの・・・？」

一つだけ、ふすまが開いている部屋がある。そこへ入っていった。

「――っ、な、なに・・・？これ・・・！」

そこには空君がいた。確かに空君だと思う。でも、その姿は、普段の彼と全然違う。

「うう・・・、うわあああ！！！」

「空君！？」

ひとときわ強くなった後、彼は縮こまる。

「やめてよ……。……。か……。ん……。。」

後のほうの言葉は聞こえなかった。
見てられない！空君！

気がついたら、私は彼の手を握っていた。

「私はここにいるから！だから……。。」

だからの後には、何も言葉が出ない。

それでも、少し彼はおとなしくなった。

なんで彼だけが、こんなに傷つかなくちゃいけないの？空君は……。、

「やさしすぎるよ……。……。なんで……。、自分が全てを背負っちゃ
うの……。？」

目から、しずくが落ちた気がした。

それをぬぐわず、私は栄介君に電話をかけた。

『空君……。、何の夢を見てるの……。？』

『空か……。他人に一切口外しないって誓えるか？今から行く。』

そういつて、彼との電話が切れた。

空君……。

栄介君がやってきた。さっさと入ってきて、私の隣に座る。

「リョウ先輩がいるから知ってると思うけど、あいつの母親が父親

を殺したのは知ってるだろう？」

「ええ。」

それなら聞いた。でも、それじゃ納得できない部分が多すぎる。リヨウも、母親は死刑になっただろうと言っているし、どうしてこんなになってしまうのかわからない。

「これから先は知らないと思うだろう事だ。心して聞け。」

私はその口調に、つい居住まいを正した。

「あいつの母親は、脱走したんだ。数年前に。」

「え……。それならニュースになるでしょ!？」

「なるわけがない。それがばれる前に、くそばあは死んだからだ。」

話がわからない……。

「理解してないみたいだから、時間軸で言うよ。」

一息おいて話し出す。

「まず、くそばあが、空の父を殺す。そして豚箱に、くそばあがぶち込まれる。脱獄し、空を殺しに現れたんだ。」

「なんで……?」

「どうせ逆恨みだろ。こいつさえいなければってな。」

何か言いたげな顔の私を無視して話を続ける。

「問題はここからだ。空を殺しにきたあいつは、深夜に襲った。こ

の家には刀があったしな。」

「刀なんてあるの!？」

まず私はそこに驚いた。でも、彼は一睨みして話を続けた。

「刀はあった。そんなのはどうでもいい。それで、空が返り討ちにした。」

「え……。」

「それでうちに電話してきて、いろいろあったんだろうけどな。」

気になる内容ばかりだ!そんなことがあったの……? 私なら耐えられない……。

「いろいろって……?」

「そこまでは聞けない。聞くのは常識はずれだ。」

そういい残すと、彼は立ち去っていった。

この空間にいるのは、私と空君だけ。そろそろ帰らないと。

「次の日曜日の10時、私試合があるの。聞こえてるのなら見に来て……!場所は鑑川グラウンド。お願い!」

空君がしゃべったような気がした。振り向いたけど、そんな痕跡はない。

私は立ち去った。でも、聞こえた音はなんだったのだろうか?

空side

何も考えられない……。声が聞こえてきた気がする。

「日曜日……10時……鑑川グラウンド……。」

ぼくが大好きな人の声が聞こえた・・・。ぼくにとっての光・・・。
ぼくは、返事をしたのかなあ・・・？自分で拒絶したくせに。

第二十九話：間拔けな人の、光の声（後書き）

だいぶ遅いです……。受験やだ〜！
とりあえず頑張りますので！
そろそろこの話も終わります
では〜

最終話…記憶の鎖

最終話

さつきside

次の日も、その次の日も、空君は学校に来なかった。

学校を抜け出した事では怒られたけど……。

毎日、彼の家に行って手を握って、何度も話す。

無駄かもしれない。でも、私は話しかけずにいられなかった。

空君がここにいるだけでいい。でも、どうして話した後は、涙が出てきちゃう

んだろう？

「さつき先輩〜！よけて！！！」

大きい声が私の思考を中止させた。風を切る音。そして衝撃。

「きゃっ！」

どかっと音がして、その衝撃に目をしかめる。飛んできたほうを向くと、梓が走ってきていた。

「大丈夫ですか？先輩。」

「大丈夫。ちょっと驚いただけだし。」

ただそれだけなのに、梓は異常とも言えるほど心配してきた。

「本当ですか！？」

「いや……だから……。」

「ほんとにだいじょうぶですか!？」

・・・ちよつと対応が心苦しくなってきた・・・。逃げよう! そうと決めるまでに0・1秒。即決で梓から逃げ出した。

「まってくださいーい!!!」

ドップラー効果で変な事になっているけど・・・、無視! そもそもこの場合ってドップラー効果って言うのかな?

「どこいく霧月!」

「ランニング行ってきます!!!」

「ならよし!!!」

その声を聞きながら走り始めた。いいわけないでしょ! っと後ろで騒いでいる声が聞こえる。

先生ご愁傷様。だけど私は気にしない。

ただ走った。そして走っている途中で気がついた。

「私、どこへ行こうとしてるんだっけ・・・?」

そもそもこの逃走劇には目的はなかった事に気がついてしまった。いまさら戻るのも心苦しいし、どうすればいいのかな?

約一分、私は歩きながら考えた。特に名案も思い浮かばない。

ランニングする程度の時間じゃ空君の家にも行けない。

「歩いているしかないかな・・・? どうせならランニングしようかな・・・。」

ぶつぶつ言いながら考えをまとめていく。その時、栄介君がやって

きた。鬼気迫るような表情で声を放った。

「空を見てないか!？」

「どーゆーこと？」

鏡がないから分からないけど、今の私の表情は不安で塗り固められてると思う。

「空が家からいなくなったんだ！」

「え・・・!？」

単純に驚き。その感情が私の心を占める。なんで？

気がつく、私は彼を脅していた。

「なんで空君がいないのよ！」

「ちよっと目を離れた隙になくなったんだよ・・・くるしい・・・」

そういつて彼はご臨終・・・。っていうのは嘘だけど気絶した。首絞めてたらそうなっちゃっただけだ。

決して私は悪くない。・・・そう思っておこう。

唯——彼の姿はいつまでたっても見つからなかった。

警察に搜索願を出したもののあまり相手にされず。結局試合の日を迎えてしまった。

私の表情は、日増しに暗くなっているらしい。いろんな人からその

ことを指摘された。

理由はわかっていのに、動けない。根本的な解決方法がないから。あー！いらいらする！空君はどこよ？

テンションが低いまま試合会場へと向かう。試合に集中しないといけないのに。家を出たところで、目の前にリョウが立っていた。

「おはよー。こんな朝早くにどうしたの？」

「・・・、ちゃんと試合に集中しなさいよ。今日負けたら部活引退なのよ？」

「・・・わかってるわよ・・・」

いわれると即答できない。何かをを見透かしたかのように、リョウは畳み掛けてくる。

「ホントに分かってんの！？あんたもっとサッカーしたくないの！？」

「うるさいわよ！ほっというて！！！」

ここまで自分にとって彼の存在が大きくなっていたなんて。

それは知っていたけど、知られたくはなかった。

だからって叫ぶなんて・・・最低。

いつの間にかグラウンドについていた。きっと無意識のうちに向かっていたのだろうけど、実際そんなことが起こると驚くばかり。いつの間に着いたんだろう？リョウは怒ってしまっただろうか？自分が悪かった。ということは分かっているのだから、あとで謝りに行こう。

今は試合に集中するだけ――。

試合前のウォームアップを終わらせて、顧問の先生のところへ集まる。

私は順当にフォワードで呼ばれた。梓もディフェンダーとして呼ばれている。

試合が始まる直前に、梓が声をかけてきた。

「先輩、空はどうしたんです？ 空の性格なら応援には絶対来ると思うのですけど……」

「空が行方不明なのは知ってるでしょ……？ まだ見つかってないのよ」

「あのうわさは本当だったんですか！？」

知らなかったの？ あれほど仲よさそうだったのに。誰も教えてあげなかったのかしら？

「ええ。だから今探しているのだけれど……」

そう言ってこの場を離れた。今は試合に集中したかった。

いつもどおりに試合会場に足を踏み入れる。

踏み入れたときに襲う緊張と高揚感。そして、大きな歓声。

でも、今日は高揚感がなかった。……どうしてだろう？

その原因はすぐに分かった。

それは直せない。直すために必要なピースが抜けているから。きっと心の中では期待していた。きっと空君は来てくれるって。

彼は、こなかった。

「先輩！ しっかり動け！」

梓の声が聞こえる。分かっていると返事を返すも、集中できない。結局決定的シーンでミスをしてしまった。

ハーftimeに入る。私は自己嫌悪を繰り返しながら、スポーツドリンクを少し飲む。

「先輩。やる気ないなら下がってくれませんか？あの気の抜けたプレーは一体何です？」

「ごめん梓……」

梓がさらに怒ろうとしたところに、顧問がやってくる。

「梓！あんまり言うな。俺からもさつきには言うことがある」

そういつて私のほうへと向き直る。

「さつき。後半になって動きがよくなるようならすぐ代えるぞ。わかったな？」

「はい。わかりました」

今は0対1で負けている。どうやって動けばいいかをイメージして、その時の最良の動きを探す。

だけど、その最良が見つからない。今の自分じゃ何もできない気がする。

「はぁ・・・」

ため息をついて空を見上げる。暗雲が立ち込めている。そろそろ雨が降り出しそう。

そんなことを考えている場合じゃないのに！

考えがまとまらないまま、ぎすぎすした空気のまま、後半のキックオフを迎えた。

後半5分、また決定的なチャンスはずした。先生がベンチでアツプの指示を出すのが見えた。

交代するのは嫌なのに、どうして体が思い通りに動かないの？泣きたくなってくる。こらえてボールが動き出すのを見ようとしたとき。

——待ち望んだ声が、私の耳に届いた。

「先輩！！！！がんばれ！！！！」

この声は——紛れもない空君の声。鳴り響いた声は、私に力を与えてくれる。

声のした方向を見ると、そこには確かに空君がいた。

心配したような顔で、だけど期待を持った顔で。

心の枷が消えうせた気がした。

いつの間にか試合は終わっていた。気を失っていたわけじゃない。

体感時間が少なくなった感じで、とても充実していた。

まだまだやりたかった。

結果として4対1。私が一人で4点入れた。けれど、先生や梓に怒られた。

曰く、恋人が来たからといってやる気を出すのはどうなのか。

まとめると、この一点に尽きてしまった。

最後に先生の言ってくれたことはありがたかったけど。

「行方不明だった彼氏がいるんだろ？さっさと会いに行ってきた？」

「え……？いいんですか？」

「その代わり、反省文としごき覚悟しとけよ」

「は……はい……」

しごきはともかく反省文は……。あれはやめてほしい。
先生に礼をして、私は空君のところへと走っていった。

空 side

ずっとずっと、僕の意識は戻らなかった。……いや、戻ってはいたんだ。

ずっとあいつにのっとられていただけで、中から見ていた。
何が起こっているのかも理解していた。

『おい、まだ体をのっとってんのか？』

『理解するまでだ。あくまで借りているだけだしな』

それに、と続ける。

『今お前の生殺与奪は俺が握っているんだ。あんま迂闊なことは避けたほうがいいと思うが？』

『それは心配すべきことじゃないと思うな』

そう僕は『俺』に告げる。

『さすがは俺、わかってるじゃないか。もともとの主人格を殺すのは無理だからな。だけど、そろそろ俺も終わりだ』

『どーゆーこと？』

それには答えず、強制的に僕の意識を落としていった。

気がついたときはグラウンドにいた。ここは先輩たちが試合をするグラウンドのはず。

『なんでここにいるんだ？』

『そろそろお前に代わるころなんだよ』

『どーゆー意味だ？』

怪訝な表情――顔は見えてないと思うがで問うてみる。
苦笑した雰囲気が出た。

『あくまでさつき先輩が好きなのは俺ではなくて僕だ。だから、そろそろ返してやるよ』

『意味わかんない！何でそんなことやってんだよ』

何で僕の体をのっとったんだよ？

『そろそろ俺にも目を向けるときだ。思い出せよ。俺が誰なのか』

そう、この態度はどこか自分に近いものを感じている。僕の人格変容が行われてしまうようなとき……。

あのときか……？

『ご名答。俺はお前が逃避するために作った二重人格だ。別に恨んじやいないがな、俺とお前は根幹的な部分が共通なんだよ』

つまり、と俺は続ける。

『俺もさつき先輩のことが好きだ。だけど先輩は俺じゃなくて、お前のことが好きなんだ。それが分かってるからこそ、俺は引く』

『何でだよ……。僕とおまえは同じなんだから、一緒にいればいいだろ？』

『だからそろそろお前に代わるころなんだ』

疑問が次から次へとわいてくる。

『なぜ？』

『俺が俺であることの限界。そろそろお前はすべてを見るべきだ。じゃあな』

そう言って消えた。見えはしないけど確かに消えていくのを感じた。そして、すべてを思い出す。

どうして親が殺されたのか、どうして僕も襲ったのか。断片的ではなく、すべてが流れ込んでくる。あいつは、こんなもんまで背負っていたのか。それに比べて、僕はここまでもろい。

心の中へ向かって呟く。

ありがとう

返事は、なかった。

意識が浮上していく。目の前には試合中のグラウンドがある。

先輩がいた。とても苦しそうにしているのが分かる。

声を出さずにいられなかった。

「先輩！！！！がんばれ！！！！」

その言葉をいい、試合を傍観した。

先輩の鬼神のごとき活躍で、先輩たちは勝利した。

そして僕は分かったんだ。言葉にはしにくいけど、しっかりと心に

刻んだ。

試合が終わった後、少しボーっとしていた。あのかっこいい先輩が好きだ。

この気持ちは変わることがないと思う。

「空君!!」

衝撃。その後押し倒され、美人の顔が目の前にあった。僕の大好きな人。

「どうしたんですか？先輩」

「どうしたもこうしたも……心配したんだから!!」

分かっている。僕は昔に比べたらとても恵まれているんだ。見守ってくれる人がいて、一緒に楽しく遊べる人もいる。

「ごめんなさい。そして先輩、ひとつ言いたいことがあるんですけど」

「何？言いたい事って？」

「ずっと乗ったままですか？ほんとに言いたいことが言えないんですけど……」

そういうとしぶしぶといった感じで、僕の上から降りてくれた。そして、改めて見つめなおす。

「ヤダ、恥ずかしいじゃない」

そんなつもりはなかったんだけど……。無視して言葉を発する。

「先輩。僕はあなたのことが――」

記憶の鎖は途切れることなく、二人の心の間をつなぐ。

鎖でつながれた心は離れることなく、常に一緒に歩み続ける――

最終話…記憶の鎖（後書き）

すみません！受験とその後における予習復習一次考查に手間取って
ぜんぜん書き進められませんでした。

もし読もうと思っていた方がいらっしゃるなら、本当に申し訳あり
ません。

この場でお詫びします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5562b/>

記憶の鎖

2010年10月8日22時42分発行